

1. 第1課に入る前に

1) 日本語の特徴

- ・日本語は日本国内に住む日本人およびその日本人が主に移民した中南米に住む日本人の間で話されている。即ち日本語は日本人という単一民族のみが使用している言語である。(中南米に住む日本語を話す人たちは日本人ではないが、日本語を母語としているという意味で日本人と考える。)日本の人口は現在1億3千万人ほどいて話者数の順位は世界第9位である。
- ・日本語学習者は韓国の90万人、中国の40万人、オーストラリアの約40万人をはじめ、アジア、大洋州を中心に約235万人となっている。
- ・日本語の文の構成は「主語(subject)・修飾語(modifier)・被修飾語(modified)・述語(predicate)」の順序で構成される。即ち述語となるものは名詞(noun)、動詞(verb)、形容詞(adjective)等があるが、この述語が必ず文の一番最後にくる。

名詞文 わたしはマイク・ミラーです。

動詞文 わたしは9時から5時まではたらきます。

形容詞文 さくらはきれいです。

また修飾語は必ず被修飾語の前にくる。

わたしの本、 かわいいあかちゃん きれいな花 早く起きる とても寒い

名詞の格(主格、所有格、目的格等)を示すのに語順や語尾を変化させるのではなく、文法的な機能を示す機能語(助詞・particle)を後ろに付け加える(膠着させる)。

これらの事から言語類型論上は、語順の点ではSOV型の言語に、形態の点では膠着語に分類される。

2) 日本語の発音とかな

- ・日本語の発音を構成する最小の単位を拍(モーラ)といい、50音図の1音と1拍が対応する。この意味から50音図のかな1文字を日本語の発音記号と考えることもできる。この考えでいくと、かなを覚えることにより日本語の初心者でもかなで書かれている文はアクセントを抜きにすれば一応は日本語を読める。また日本語では促音(っ)、撥音(ん)、長音(ー)も1拍と数えるのが特徴である。
- ・日本語の等拍性といい日本語のすべての拍は時間的に同じ時間をもつ。この点も英語等の発音とくらべるとはるかに簡単で単純と言える。(日本語はリズム感に乏しいという印象をもつのはこのためである。)
- ・モーラの種類は以下に示すように111程度存在するが、濁音である「が行」の音は語中語尾では鼻濁音となるがこれを拍と数えないと数は減る。また外来語の表記の関係で「シェ」「チェ」「ツァ・ツェ・ツォ」「ティ」「ファ・フィ・フェ・フォ」その他の外来音を含めるとさらに数は変わってくる。(しかしこれらの音は外来語を表記するために考えられたものと考えると元来の日本語の発音とは言い難い。)
- ・日本語のモーラは5つの母音(vowel)と子音(consonant)の発音に母音が付加されたもの、半子音に母音が付加されたもの、それと拗音、促音、撥音、長音からなる。ここで母音とは口の形と舌の位置を変えることによって発音される音でありその音のある時間続けることが可能である。子音とは呼気と唇、呼気と舌と歯茎、口蓋等を使って発する音である。そのためその音を拍以上の長さで続けることは不可能である。半子音とは母音と子音の中間の音でやはりその音を拍以上伸ばすことはできない。

・50音図

直音 (母音)

あ い う え お

直音 (子音+母音)

か き く け こ

さ し す せ そ

た ち つ て と

拗音

きゃ きゅ きょ (清音)

しゃ しゅ しょ (清音)

ちゃ ちゅ ちょ (清音)

な に ぬ ね の	にや にゆ によ	
は ひ ふ へ ほ	ひや ひゆ ひよ	
ま み む め も	みや みゆ みよ	
ら り る れ ろ	りや りゆ りよ	
が ぎ ぐ げ ご	ぎや ぎゆ ぎよ	(濁音)
(か き く け こ)	(きや きゆ きよ)	(鼻濁音)
ざ じ ず ぜ ぞ	じゃ じゅ じょ	(濁音)
だ ぢ づ で ど		(濁音)
ば び ぶ べ ぼ	びや びゅ びょ	(濁音)
ぱ ぴ ぷ ぺ ぽ	ぴや ぴゅ ぴょ	(半濁音)

直音 (半子音+母音)

や ゆ よ わ を

特殊モーラ

ん (撥音) っ (促音) ー (長音)

・長音(long vowel)

長音は1拍の長さをもつ短音に対して2拍の長さをもつ音で、ある1語の単語の中で前の拍の母音をもう1拍延ばして発音される。長音で発音されるか、されないかで意味が変わる場合があるから注意させる必要がある。

おばさん → おばあさん おじさん → おじいさん

初級授業の中では特に長音で注意しなければならないことは発音と表記の違いが出てくることで、

おとおさん(お父さん)の発音に対し表記はおとうさんであり、おなじく おとおと(弟) → おとうと、 ええご(英語) → えいご、 ええが → えいが(映画) 等である。

これに対し 大きい は 発音、表記ともにおおきいであり、遠い も 同じくとおいとなる。2語とも初級レベルの語であるのでその他の初級語でも出てきたときに注意を促したい。

又カタカナ表記では長音は前拍の母音を使わずに長音記号“ー”を使うことも教える時に留意されたい。

コーヒー、エアメール、カード 等

・撥音(Japanese syllabic nasal)

「ん」の音はうしろに来る音によって、発音のしかたが変わる。(変音)

えんぴつ 「ん」の発音時に唇が閉じていることに注意させる。

みんな 「ん」の発音時に舌が上歯茎の裏についていることに注意させる。

てんき 「ん」の発音時に口が開いていることに注意させる。

・促音(geminate consonant)

表記においては語中の促音が入るところは「っ」で表わされる。発音においては拍と拍との間にあって発声しない拍として扱われる。促音があるかないかで違ってしまうので促音も重要な発音表現であることを認識させる必要がある。授業においては拍を手拍子で取りながら発話させ語中に1拍の休止があることを理解させる。初級においては助数詞あるいはIグループの動詞のて形に多く出てくるのでそれが出てきた時に教えたい。

1杯、1本、言ってください、行ってらっしゃい、待ってください

おと cf おっと、 ぶか cf ぶっか 等

・アクセント (accent)

アクセントとは1語の発音の中である部分を強く言ったり弱く言ったり、あるいは高く言ったり低く言ったりする、1語の中の発音の強弱、高低の配置のことである。日本語のアクセントは高低アクセントでありこの日本語のアクセントには規則性がある。ある拍の直後でアクセントが高から低に下がる時、その拍をアクセントの核といい、アクセントが高から低に下がることを下がり目という。アクセント記号では の

ように表す。「箸」は第1拍、「橋」は第2拍にアクセント核があり、「端」にはアクセント核がない。アクセント核は一つの単語には一か所もないか一か所だけある。従って一度下がったアクセントが再び上がることはない。即ち高い拍は一拍だけか、連続した数拍化であり、離れた二か所以上に現れることはない。また共通語（東京アクセント）では単語の第1拍と第2拍の高低が必ず異なり、単語と単語の切れ目が分かりやすくする機能をもっている。高い拍が一か所だけしかないという事からある単語の下がり目の位置が決まれば単語中の拍の高低が決まる。単語が持つアクセントの型には3型ある。即ち第1拍にアクセント核があるもの（下がり目が第1拍のすぐ後ろにある）を頭高型、第1拍と最後の拍の間にアクセント核があるもの（下がり目が語中の間にある）を中高型、最後の拍が高で終わり次に続く助詞に低アクセントを要求するもの（下がり目が語の最後にある即ちアクセント核が語の最後にある）にあるものを尾高型といいこれらをまとめて起伏式のアクセントという。これに対し最後の拍が高で終わり次に続く助詞もそのまま高で発音されるもの（下がり目がない）を平板型、平板式という。

頭高型 はし（箸）、ほん（本）、ちず（地図）、あめ（雨）、はいしゃ（歯医者、敗者）、ひ（火）

尾高型 あめ（飴）、いしゃ（医者）、はいしゃ（廃車）、おちゃ（お茶）はし（橋）

中間型 たまご（卵）、おとうさん（お父さん）、おかあさん（お母さん）、かいぎしつ（会議室）

平板型 さくら（桜）、けむり（煙）、たばこ（煙草）、ひ（日）、はし（端）

アクセントの機能：アクセントはなぜあるのか。日常使う日本語には同音異義語がいくつかある。（箸、橋、端）、（型、肩、方過多、渦）（雨、飴、天）（事、琴、古都）（紙、神、髪、加味）・・・・これらの同音異義語でアクセントを変えることにより語の意味を区別していると考えられる。即ちアクセントは語の意味を区別する機能を持っているといえることができる。また次の文においてもアクセントがなかったら誤解を生じる。

アノヒトハキョウヨウガアル。 （あの人は教養がある）

アノヒトハキョウヨウガアル。 （あの人は今日、用がある）

アノヒトハキョウカイニイク。 （あの人は教会にいく）

アノヒトハキョウカイニイク。 （あの人は今日、会にいく）

上の2つの文も下の2つの文も書いた文では文節の切れ目及び書き言葉が異なるので一目でその意味が分かるが、話した場合切れ目なく一気に発話されるとアクセントに違いがなければ意味は不明である。従ってアクセントには語や文節の切れ目を示すというもう一つの機能をもつことがわかる。

動詞・形容詞のアクセント：アクセントについて主に名詞についてやや複雑な規則を述べたが、動詞、形容詞についてもある規則性がある。まず動詞はアクセント上分類すると以下の2つだけに分類される。

平板式 キク（聞く） ワラウ（笑う） ハタラク（働く） ウル（売る） オドル（踊る）

タタカウ（戦う） シル（知る） アビル（浴びる） アマエル（甘える） ネル（寝る）

起伏式 カク（書く） オモウ（思う） ヨロコブ（喜ぶ） ヨム（読む） ツクル（作る）

カナシム（悲しむ） ミル（見る） オチル（落ちる） ヒキイル（率いる） デル（出る）

ここで見られる規則性の第1は起伏式の動詞では辞書形のとき拍に関係なく後ろから2拍目にアクセントの核がくる。また平板式の動詞ではどんな活用形でも語尾は平板式であるが、3拍以上の起伏式動詞の時にはて形、た形のときにアクセントの核が前に一つずれる。形容詞についても同様に分類される。

平板式 アカイ（赤い） ツメタイ（冷たい） カルイ（軽い） カナシイ（悲しい）

起伏式 ヨイ（良い） シロイ（白い） ミジカイ（短い） ナイ（無い） タカイ（高い）

タノシイ（楽しい） ウレシイ（嬉しい）

日本語教育では動詞、形容詞を教える際その辞書形が平板式か、起伏式であるかを教えればアクセントと活用の際のアクセントが見当できることになる。

その他：その他以上の規則にあてはまらないアクセントの核の移動が特別な語について発生するが、専門的となるので生徒からの質問が出た時に対処することにより。

かえる（帰る） はいる（入る） おおい（多い）

くる（来る）

日本語のアクセントは、方言ごとの違いが大きい。特に広範囲で離され話者数も多いのは東京式アクセントと京阪式アクセントの2つである。日本語教育では原則として東京アクセントを共通語として用いるが、時と場所に依じて京阪式があることと、その違いを教えるもよい。

はなが（花が） 東京式 はなが（低高低） 京阪式 はなが（高低低）
みずが（水が）、とりが（鳥が）、かぜが（風が） 東京式 （低高高） 京阪式 （高高高）

・イントネーション (intonation)

イントネーションとはアクセントが語を単位とした音の高低を問題にしたのに対し、イントネーションは発話される文または句の中の末尾の音の高低を扱う。話し言葉の中で現れるものなのでイントネーションは大変、変化に富みかなり個人的なものとも考えられるが、社会的習慣によりその形がある程度固定しているとも言える。

イントネーションの種類と機能：イントネーションは感情的なものと論理的なものがある。

感情的イントネーションは発話に伴う話し手の感情によって現れるもので、話し手の細かい感情がこのイントネーションによって相手に伝えられる。

トンデモナイ （普通の状態） トンデモナイ、トンデモナイ （感情が強く入った時）

普通の会話の中ではイントネーションだけでかなりの感情表現を表すことができる。

会話1 太郎：「帰る？」

花子：「帰る」

会話2 太郎：「帰る？」

花子：「帰る？」

句末に上昇調のイントネーションが現れる場合は相手に分からせようとする感情が入る場合が多い。

「キョウハ ニホンゴノ イントネーションニツイテ ベンキョウシマショウ」

日本語教室で生徒にこのイントネーションで話すのがよく見られるのも、このためである。（しかし生徒にはできるだけ自然のイントネーションで話しかけるのが望ましい。）

論理的イントネーションは話し手の感情に関係なく、その文におのずから備わっているイントネーションをいう。即ち平叙文(affirmative sentence)、疑問文(interrogative sentence)において前者は文末を平坦調のイントネーションで終わるが、後者は文末を上げる上昇調のイントネーションで終わる。これはその文の持つ話し手の意図によってすでに決まっているイントネーションである。

イントネーションの型：イントネーションの型には1) 平坦調 2) 上昇調1 3) 上昇調2 4) 下降調 5) 特殊な型 の五つの型がある。

平坦調は普通の平叙文に現れるもので、平叙表現には主に断定、主張、勧誘、不満、要求などがある。

「うまい」「これでいい」「えんぴつではちょっとまずい」「そのばあいはこれをつかってください」

上昇調1は主に、質問的表現（質問、問いかけ、反問、確認要求）に伴う。

「しんぶんはいたつのひとですね」「きじゃなくたけですか」「おとこ？」「あしたいく？」

上昇調2は話し手が自分の述べようとするところを強調するまたは同意を得ようとして文末を特に際立たせる時にあらわれる。この時文末の最後の音節全体が強く発音され、全体的に高まっているのが上昇調1と異なる。

「そんなことしていいとおもってるの」「そうでしょう」「そうおもわない」

下降調は話し手が相手に対して不満の態度、感情あるいは軽蔑の気持ちを表すときによく見られるもので文末が急に下がるのが特徴です。また文末に「よ、か」などの終助詞を伴う事が多い。

「そんなことないですよ」「よのなかめちゃめちゃじゃないですか」

特殊な型は文末に「な、ね、よ、さ」など、主に間投性終助詞を伴う場合によく現れるもので、発話の中で話し手の感情がよりはっきりと表現される。

「おどろいたわねー」 「ひどいなー」 「どういうつもりなんですかねー」
 会話の中で
 「よく、はたらくわねー」 「よく、はたらくわよー」
 「おどろいたわねー」 「おどろいたねー」

2. どんな生徒たちに、どのように、どんな日本語を教えるか。

- 1) 私たちの日本語教室の性格：私たちは現在伊東国際交流協会の中の日本語教室で日本語を教えている。時間的として1週間に1度午前午後合わせて3時間という非常にわずかの時間であり又来る生徒たちもさまざまである。先生方も100%ボランティアの無報酬の先生がたである。普通一般の日本語教育という面からみるとファミリー的ではあるけれど、いかにも間に合わせ的な感じであるのを逃れえない。といっても今まで、約11年になろうとする間に教室ではたくさんの生徒たちに日本語を教え、能力検定試験の合格者も多数送り出してきた。このように小規模であり教える時間も決して多いとは言えない教室であるがやる気があればそれなりの働きをすることができるといえる。そのような意味で私たちが、この教室でいかに効果的に生徒たちの日本語習得意欲に力を貸すことができるかを考えることは重要である。そこで今まで伊東日本語教室にどのような生徒たちが多く来たか、また数は多くはないがこの生徒にとって今、日本語の習得は緊急の問題でありかつ日本語の習熟がこの生徒の将来を左右しかねないという生徒たちに対してどのように教えるか、というように今まで伊東の日本語教室に来た生徒たちをあるグループ毎に分けそのグループ毎の生徒たちにどんな日本語を教えるかを検討していけばそれなりに効率的な、生徒たちが本当に勉強したいところの日本語教育を与えられるのではないかと考え、話を進めたい。本題に入る前に生徒の日本語の能力をチェックする意味で能力検定試験におけるレベルの大きな判定基準と試験の構成の表を下記に掲げる。

級	構 成			認 定 基 準
	類 別	時 間	配 点	
1	文字・語彙	45分	100点	高度の文法・漢字（2000字程度）・語彙（一万語程度）を習得し、社会生活をする上で必要であるとともに、大学における学習・研究の基礎としても役立つような、総合的な日本語能力。（日本語を900時間程度学習したレベル）
	聴 解	45分	100点	
	読解・文法	90分	200点	
	合 計	180分	400点	
2	文字・語彙	35分	100点	やや高度の文法・漢字（1000字程度）・語彙（6000語程度）を習得し、一般的なことがらに対し、会話ができ、読み書きができる能力。（日本語を600時間程度学習し、中級日本語コースを修了したレベル。）
	聴 解	40分	100点	
	読解・文法	70分	200点	
	合 計	145分	400点	
3	文字・語彙	35分	100点	基本的な文法・漢字（300字程度）・語彙（1500語程度）を習得し、日常生活に役立つ会話ができ、簡単な文章が読み書きできる能力。（日本語を300時間程度学習し、初級日本語コースを修了したレベル。）
	聴 解	35分	100点	
	読解・文法	70分	200点	
	合 計	140分	400点	
4	文字・語彙	25分	100点	初歩的な文法・漢字（100字程度）・語彙（800語程度）を習得し、簡単な会話ができ、平易な文、または短い文章が読み書きできる能力。（日本語を150時間程度学習し、初級日本語コース前半を修了したレベル。）
	聴 解	25分	100点	
	読解・文法	50分	200点	
	合 計	100分	400点	

- ・ 中国人旅行サービスビジネス研修生：今まで伊東日本語教室に迎えた生徒たちのうち、最も生徒数の多いグループがこのグループであろう。この生徒たちの特徴としては、
 - i) 既に中国内で日本語を1年～2年学習しているので初級レベル（日本語能力検定4～3級）は終了している。従って学習意欲は中レベル以上の日本語を目指している。
 - ii) 日本人企業の中で既に働いているので、日本人企業内の規則、習慣等も学習中である。
 - iii) 研修先がホテル、旅館であるため日本人の旅客と接する機会が多く正しい敬語の習熟が緊急である。
 - iv) 研修期間がほぼ1年であるため教室での学習期間も1年であることが多い。
 - v) 在日中に日本語能力検定3～2級を目指す生徒もいる。（目指す生徒には教室としてもこれを最大の目標として教えても良い。）

このような生徒に対して教室では

- i) テキストとして「テーマ別 中級から学ぶ日本語」を主に使用してきた。ここでは日本の社会生活・家庭生活の中でおきる出来事、話題、（テーマ）を日本人が中文の長さで書いた文章ははじめに掲げられており、これを基にして日本人の生活習慣、文化的なもの、考え方などを学びそれと同時に日本語の学習として中級程度の語彙、やや複雑な日本語特有の言い回し、慣習的言い方等を学ぶものである。初級の日本語に比べてより日本語らしい日本語、普段日本人が話したり書いたりする日本語により近い日本語を学習するといえる。
 - ii) それだけに初級の日本語を十分に習得していない生徒には若干理解に無理なところがあり、また教師側でもそれなりに日本語教育での技術（文法的知識）が必須となってくる。十分に初級をマスターしたと見える生徒についても、たえず初級的な必須事項を確認しながら、まちがっていることがあったら再修正をし、あやふやなところはノートに取らせるなどして初歩的なミスは繰り返させないような配慮が必要である。
 - iii) ある程度初級をマスターした生徒にはこのテキストは日本の生活習慣を日本語を学習しながら知ることができるという点で優れたテキストだと思われるので、生徒に意欲があれば積極的に使って行ってよいテキストだと思われる。
- ・ 日本人と結婚された外国人：中国人研修生について多いのがこの人たちではないかと思われる。教室が発足して11年あまり経とうとしているが、それ以前から日本に来て仕事をしているうちに結婚した人、あるいは最近多く見受けられるケースで日本人と結婚するために日本に來られた人たちで特に中国人、フィリピン人の人が多い。そのような生徒たちの中でまずあげられるのが
 - i) 日本で比較的長く生活している非漢字圏の人：この人たちは主に女性に多く、子どもも大きくなって小学校の高学年になり、子供は日本語に何の不自由もしていないが、自分はまだ漢字も満足に読めない、従って学校からの通知もよくわからない、せめて初歩の漢字くらいは読めるようになりたいと言って來られる人がいる。中にはこの日本語教室のOBという人も來られる。

このような人たちは既に日本語の会話については略問題ないので彼女たち一人一人の要望に応じて漢字学習については3～4級程度の漢字を初めは読み（音読み、訓読み）から徐々に書く練習を正しい書き順で学習させていくのがいいと思われる。この時漢字学習に興味を持たせ、あるいは効率的に学ばせるために漢字の成り立ち、漢字の構成からみた漢字の種類（象形、指事、会意、形声漢字等）漢字の発音等について話をするのも面白いと思われる。いずれにせよ漢字の数はかなりの量があり、最初のうちはその数に圧倒されて学習意欲が低下しないようにできる範囲で気長にやることを教えなければならない。
 - ii) 漢字圏の人：中国系の人（中国人、台湾人、中国系マレーシア人）の人たちは既に漢字を使っている人たちであるが、現代の中国人のように、日本で使われていない略した漢字（簡体字）を使っている。特に若い中国人は現代の日本の漢字を理解できない人もいたり、または特定の漢字を読めない人がいるので日本の漢字を教えることが必要となってくる。台湾人は旧漢字

(繁体字)を使用しているが、漢字によっては日本で使われている字体と違っている時があるので注意が必要である。

- ・ 日本語ができない小学生、中学生：このグループ分けの中で特に問題としておきたいのが、この生徒たちである。(伊東市ではフィリピン人の家庭の子女たちが多い。)この生徒たちは日本の学校で勉強しなければならないという意味から日本語の習得が特に緊急な生徒たちである。日本語のレベルも全くの初歩段階から教えなければならないことが多く、またその緊急性のために週一回の授業以外に授業をすることもある。いずれの場合も通学している学校側と十分連絡を取り合って、効率的な授業を生徒の負担とならないよう気をつけて行う必要がある。
- ・ 日本語にあまり習熟していない人：日本に來られて長くいるけれどあまり日本人と交際のない人、日本に來られて日の浅い人などは初歩的な日本語もできないという人がいる。

このような人たちには全くの初歩からの学習となり、「みんなの日本語初級Ⅰ」がテキストとなる。この日本語学習の初心者に対する教え方が教室の本来の指導法であり、日本語教育が目指すところでもある。従って私たちはまずこのために日本語教育の技術を勉強しなければならないし、今回の研修もこの技術を磨く事を第一の目標として進めていきたい。

3. 授業の進め方

1) 理想的な教師像 (日本語教師養成講座からの抜粋)

- ・ 日本語を学習者の立場に立って、外国語として客観的に分析する能力を養うこと。
- ・ 自己の知識を再確認する習慣をつけること。
- ・ 発音の違いを聞き分けたり、書き留めたりする練習を積むこと。
- ・ 自分で文を多く書き、推敲する能力を身につけること。
- ・ 日本そのものについて熟知すること。(地理的な日本、日本人の歴史、日本の文化、習慣、国民性・・・)
- ・ 生徒とのコミュニケーションを積極的にとり、あきさせないまた効率的な授業を心がけること。
- ・ 生徒との違いを知り、認め、尊敬できる態度を身につけること。
- ・ 明るく、忍耐強く、思いやりと熱意をもって授業に対処できること。

2) どんな日本語を教えるか。

- ・ です、ます調 (丁寧語 **polite language**) の日本語を教える。

です、ます調は日常私たちの間ではあらたまった時以外使わない。それは日本人の間では丁寧語でありまた公用語であるからで、ふだん私たちの会話は家族だったり、外に出たとしても身分の高低差がない友達、同僚、付き合い仲間であることがほとんどだからである。しかし日本語を勉強する外国人にとっては私たち日本人は親しい友達でもないし、日本語を話す時はあらたまった場所で話す場合がほとんどである。もし外国人が私たちが日常話している日本語で話しかけてきたりしたら、私たちはびっくりしたり、むしろ不快を感じるだろう。逆に道で見知らぬ外国人が丁寧にです、ます調で話しかけてきたとしたら私たちはこのうえもなくその外国人に好感を抱くことであろう。このような意味で初歩の日本語を学習しようとする外国人にはです、ます調を教えることが必須だといえる。

- ・ できるだけ易しい、平易な日本語を使うよう心がける。

言葉には何通りもの言い方があって、偉い人ほど小難しい言葉を使いまわして自分の偉さを誇示しようとする。また「ものは言いようで角が立つ」というように言い方次第で相手を怒らせたり、喜ばせたりすることもできる。日本語教室での初級の日本語は易しい日本語ほどベストである。(しかしレベルを上げていくに従って日本語のもつ微妙なニュアンスの違いも教えていかなければいけない。)

- ・ 文字の学習について

日本語にはひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字の4種の文字があるが、まず最初にひらがなの発音から始め、順次カタカナの発音に入る。この学習がある程度進んでからテキストの各課に入る。助詞「は」、及び「へ」の発音についてはテキストの実学習の中で教える。読めることにある程度習熟したらひらがな

よびカタカナの書き方に進む。漢字については無理に強いることなく本人の興味をそそりながら、できる範囲内で気長に教えていくようにしたい。

4. 「みんなの日本語」を使って指導するうえでの留意点

1. 教え方の基本姿勢：テキストを使って教えるのであって、テキストを教えるのではない。（大沼先生の講座テキストからの引用）即ちテキストに出ている日本語だけを教えるのではなく、テキストの文法事項をもとにして、生徒が自分で実際に生活の中で、学習している日本語を使えるように、一般化し応用できるよう指導する事が、教える側のまず第一に留意しなければならない姿勢である。
2. 「みんなの日本語」の各項目毎の留意点を順を追って言う。学習もこの順を原則として進める。

- 1) 文型 (sentence pattern)：ここではその課で学ばなければならない基本文法事項を含んだ文があげられているから、この基本文法事項をまず第一に教える。

例えば 第14課 では 文型 1. ちょっと待ってください。

2. ミラーさんは今電話をかけています。

の2つの文が挙げられている。この14課での文法事項は動詞の“て形”（て form）を使った文の学習であることを最初に指導する。最も基礎的な動詞文は第4課に初めて出てきて第7課まで動詞文を学習するが、その活用形 (conjugation) は“ます形”だけである。第14課で初めて他の活用形“て形”が出てくる。そこで動詞にも活用があること、(形容詞の活用については既出) その一つがて形であること、て形を使った文型1, 2の説明（1. においては、て形+ください の形で人に何かを頼む時の言い方、2. においては、て形+います の言い方で 動作が現在進行 (progress) している表現）などを行う。さらに動詞の各グループにおける て形の作り方を指導する。これらが基本文法事項である。

- 2) 例文 (example sentence)：ここでは文型において提出された文が会話の中で実際に使われている状況を想定して掲げられている。従って例文の文は文型のそれより具体的である。またその場に応じて文型の文を変化させて違う状況の表現を学習したりする応用問題的な場合もある。生徒の学習能力を考えながら、生徒に余裕があれば、応用表現を学ばせて行きたい。ここでの文を学習するときは、会話がされている状況を前もって生徒に説明しておくことが、生徒の理解を早くするのに役立つと思われる。英語が理解できる生徒であればさらに英語表現と対比させて説明するのも一つの方法である。
- 3) 練習 (exercise, practice)A：ここでは枠組み、網掛けの濃淡などで、構文、文法事項が一目でわかるように示されていて、文法理解を助けている。文型練習の基本となる「代入ドリル」(substitution drill) や「変換ドリル」(transformation drill) などの形を示しているのでここで基本的な発話練習を行う。

代入ドリル：文型または例文の文の一部を入れ替えて、発話を繰り返す練習方法で、文型の一層の理解と刷り込みを促す。それとともに応用力、語彙の豊富化をも目指す。絵やカード、実物、模型などを使用し、実際の場面を想定し単なる練習のための練習にならない工夫が必要である。

変換ドリル：平叙文 (declarative sentence, assertive sentence) から疑問文 (interrogative sentence) 動詞の肯定文 (affirmative sentence) から否定文 (negative sentence)、現在形 (present tense) から過去形 (past tense) などの変換やいろいろな表現の述部 (predicate) の変換の練習方法。文法理解を促すとともに実際の会話の時に正確な表現を瞬時に言えるまで練習をさせる。

- 4) 練習 B：練習Bでは問題形式で学習を進めていくもので生徒がこの課で学習したことが実際に理解されているかを確認しながら進めていく。各問題の前には「例」が示されているからこの「例」を十分理解している事を確認した上で練習を始めることが肝要である。イラストまたは問題の中で生徒にとって新しい語彙が出てきたか、必要としたら最低限のアドバイスを提供し(新しい語彙のみを教える) 答えはあくまでも生徒の発話にまかせるようにしたい。最初のうちはスピードは関係なく文法の理解が最優先である。

- 5) 練習C：練習Cでは文型が実際にどのような場面や状況の中でその機能を果たすかを理解させる。従ってここでも会話が行われているシチュエーションの説明が大事であると同時に代入練習の会話でもあるので文型の理解を復習しながら行うのがよい。この時、代入部分を行う文が生徒にあたるよう役割を決め先生と会話しながら行えばより自然の会話に近づけることができる。
- 6) 会話 (conversation, talk, dialogue)：以上練習Aから練習Cを終えてから会話に移るようにしたい。この順序で行うのは生徒が十分に学習事項に習熟した後に実際に近い発話を体験するためである。会話の中では全部を生徒に読ませるのではなく、先生と生徒が会話のなかのそれぞれの人物の役割を担当し (role playing) 実際の会話をしているような発話をすることが大事である。ここでも生徒の理解を確認しつつ、わかっていないようなら語彙でも文型でも説明しわからないまま進めることのないよう留意したい。またこの会話はDVDでの教材があるので必要に応じて使っていきたい。
- 7) 問題：問題は個人質問 (personal question)、聴解 (hearing, listening) 文法 (grammar)、読み物 (reading) などがある。

個人質問および聴解：この問題は付録に回答スクリプトがついているので、これが回答となるように先生が質問を作成し生徒に質問する。回答は生徒に口頭で答えさせると同時に書かせると書き取りの練習にもなるし、口頭で見落とされる誤りを見つけることができる。

文法：文法は必要ないとする先生もいるが、母語を学習する幼児、児童はとにかく外国語を学習する子供、青年以上の生徒には、外国語を効率よく正確に学習するという意味から文法は必須である。特に初級、中級へと進んでいく段階においては基礎的な文法を積み重ねて、学習を進めていくことになるのでできるだけ早く基礎的な文法の習得が肝要である。初期の文法必須項目としては

- ・品詞の区別の習得：名詞 (noun)、代名詞 (pronoun)、動詞 (verb)、い形容詞 (i-adjective)、な形容詞 (na-adjective)、副詞 (adverb)、接続詞 (conjunction)、助詞 (particle)、
- ・動詞の活用形 (conjugation) の習得：ます形、て形、た形、ない形、じしょ形、ふつう形
- ・形容詞の活用形 (inflection) の習得
- ・助詞の習得：は、も、の、を、が、に、へ、で、と、や、から、まで、までに、より、でも・・・
- ・文型の習得：名詞文、動詞文、形容詞文、これらの文の変換 (平叙文、疑問文、進行形、過去形等)
- ・丁寧形と普通形：日本語を学ぶ外国人はまず丁寧形 (です、ます形) を学ばなければならないことはすでに前述の通りであるが普通の日本人が日常話す言葉は普通体がほとんどである。初級においても引用文の引用部には普通体を用いなければならない。従って初級のうちに丁寧形と普通形があることを認識させる必要がある。

読み物：学習事項で構成された中文を読解し、理解したかどうか質問に答えるものである。生徒に音読で読ませて、新出語彙があればできれば辞書で調べさせ内容が把握できたか口頭で質問しながら解答を確認する。正しく回答できたら、質問の追加あるいは学習者の個人的生活、体験、意見、知識などを学習者の能力を見ながら進められれば学習者とのコミュニケーションがさらに深められる。

5. 教室内でよく使う言葉、日常の挨拶、数字について

日本語の学習をテキストを使って指導すると同時に、教室内で使う言葉、日常の挨拶、決まり文句、初歩的な数字などを並行して教えて行くようにすることはスムーズな学習進行のうえで役に立つと共に学習者に、より日本語に親しみを持たせるのに有効である。

- 1) 教室内でよく使う言葉：始めましょう、終わりましょう、休みましょう、わかりますか (はい、わかります/いいえ、わかりません) もう一度、いいです、だめです等
- 2) 毎日の挨拶、会話表現：おはようございます、こんにちは、こんばんは、おやすみなさい、さようなら、ありがとうございます、すみません、お願いします
- 3) 数字：1～10くらいまでのアラビア数字と漢数字

これらの言葉のプリント教材が教室内に用意されておりますのでご利用ください。

6. 教え方の実際例

第 一 課

I. わたしはマイク・ミラーです。

1) 基本文法事項：

- ・文型は N_1 は N_2 です。
 N_1 は名詞で 人名、動物、物、代名詞などがくる。 N_2 も名詞で名前、国籍、身分、職業がくる。
- ・「は」はその前の名詞がその文の主題(subject)であることを示す、いわゆる「とりたて」の副助詞である。「です」は国文法における助動詞「だ」の丁寧形であるが、日本語教育では「 N_2 です」の形がその文の述部 (predicate) であることを示すという考え方をする。即ち主題 N_1 が何であるかを N_2 が説明している文で、式で表せば $N_1=N_2$ と書ける。この文型は述語が名詞であるからこの文体を名詞文ともいう。
- ・「わたし」は自分を指す代名詞である。初級レベルの人称代名詞 (personal pronoun) を下記に示す。

	第一人称	第二人称	第三人称
単 数	わたし、(わたくし)	あなた、(あんた)	かれ、かのじょ
複 数	わたしたち	あなたたち、あなたがた	かれら、かのじょたち

- ・マイク・ミラーは日本人からみて外国人の名前であるから、カタカナで書く事を教える。

2) 教え方のポイント：できる生徒には上記の説明を簡単に教えてもよいが、全くの初級のレベルではわからないであろうから自分の名前を言わせ、理解したところで教室のだれかを指しながら名前、国籍、職業などを言わせるようにする。

II. サントスさんは 学生じゃ ありません。

1) 基本文法事項：

- ・文型は N_1 は N_2 じゃありません。であり 1) の文型の否定文 (negative) である。式は $N_1 \neq N_2$ となる。
「じゃ」は口語体 (colloquial form) で公式体 (formal style) では「では」である。「で」は助動詞「だ」の「て形」で、「は」は「とりたて」の副助詞である。
この文の肯定文は「サントスさんは学生であります」であり、この文の否定形として「ではありません」「じゃありません」が導かれた。教室においてはこの理屈は省略して「です」文の否定形は「です」を「じゃありません」に置き換えて作成することを教える。「じゃない」「じゃないです」はここではまだ教えない。(じゃない は 普通体となる。)
- ・「さん」は二人称 (話し相手) または三人称の名前を呼ぶ時、その名前の直後に付けて用いる接尾辞 (suffix) でその人に対して尊敬、丁寧を表す敬称である。初級においては自分に対しては決して使わないことを注意する。類語 (synonym) として「ちゃん」「くん (君)」があることも順次教えていく。

2) 教え方のポイント：I. の文型で練習した文で間違いとなるような語彙を代入して否定文を作成する練習をする。(生徒が中国人であれば、私は日本人じゃありませんと言わせるようにする。)

III. ミラーさん は 会社員ですか。

1) 基本文法事項：

- ・I. の文型 ミラーさんは会社員です。 の文に疑問を表す終助詞「か」を文末に付加して話し手の疑問を相手に問う疑問文である。即ち文型I. の宣言文、断定文に対し話し手が確信を持ってないで疑問を持つ場合I. の文型の文末に終助詞「か」を付加して相手に確認 (肯定か、否定か) を求める文である。(ここにおける文型は文型I. の名詞文に限ることを教える。)
- ・従ってその答えは 肯定の場合と 否定の場合の二つとなる。

肯定の場合 はい、ミラーさんは会社員です。

または はい、そうです。

の二通りを教える。

否定の場合 いいえ、ミラーさんは会社員じゃありません。 先生です。

または いいえ、そうじゃありません。 先生です。

「はい」「いいえ」は品詞的には感嘆詞である。

- ・日本語における疑問文のイントネーションは疑問詞のある、なしに係わらず上昇調である。
- ・日本語の疑問文の表記において疑問符号（question mark）は通常の疑問文には用いない。但し 1 品詞のみで疑問を表す場合だけ疑問符号を用いる。（雨？ 行く？ 寒い？ ）

2) 教え方のポイント：文型Ⅲの質問をしながら文型Ⅰ、Ⅱを使って答えさせる。

- ・（あなたは） ～ さんですか。 はい、（わたしは）～ です。 はい、そうです。
いいえ、（わたしは）～ じゃありません。 ～です。
いいえ、そうじゃありません。～です。

「あなた」のかわりに教室内の人、また 「～」に国籍、職業などを変えて言わせる。

- ・この時日本人の日常会話のなかで「あなた」はあまり使わないでむしろ名前を使うことが多いこと、「わたし」も通常の会話のなかでは省略されることなどを教える。

IV. サントスさん も 会社員です。

1) 基本文法事項：

- ・ N_1 は N_2 です。 N_3 は N_2 です。の二つの文のように同じ述語が並ぶ場合、後の文の同じものを示す助詞「は」は「も」に変わることを教える。この「も」を同定の助詞といい、この「も」を従えている名詞が同じグループであることを示す。

ミラーさんは会社員です。サントスさんは会社員です。

→ ミラーさんは会社員です。サントスさんも会社員です。→ミラーさんもサントスさんも会社員です。

日本は島国です。フィリピンは島国です。

→ 日本は島国です。フィリピンも島国です。→日本もフィリピンも島国です。

上記のように二つの文を一つにする時（あるいはいくつかの名詞が同じグループになって主格になったり補語になったりする時）両方の助詞が「も」になることもできれば教える。

2) 教え方のポイント：

- ・初級の中で使われる語彙（国籍、職業、動物、くだもの等）を使って生徒に言わせる。
この時「劉さんは中国人です。あなたも中国人ですか。」の質問に対し肯定の場合は 「はい、私も中国人です」になるが、否定の場合は「いいえ、わたしは中国人じゃありません。」と「も」は使わないことを教える。

V. あの方は どなた ですか。

1) 基本文法事項：

- ・文型 N_1 は N_2 ですか。 の N_2 が人の名前を尋ねる疑問代名詞「どなた」に置き換わった疑問文である。従ってこの文は話し手同士以外の第3者の人の名前を尋ねる時に使う文である。
- ・「どなた」は「だれ」の丁寧形であり、初級者においても「だれ」ではなく「どなた」を使う事を教える。
- ・英語では疑問詞は文頭に来るが日本語ではその規則がないことを英語既習者には断る。
- ・「あの方」：詳しくは第2課で学ぶ学習項目（こそあどの規則および指示代名詞）なのでここでは単に話者同士から少し離れた人を指す言葉（英語既習者であれば **that person** に置き換えられる ことで説明）であると説明する。これも「あの人」の丁寧形であり「あの人」と言わず「あの方」という事を教える。
- ・疑問詞のある疑問文であるので答えには「はい」、「いいえ」は不要であることを教える。

2) 教え方のポイント：

- ・「あの方は太郎さんですか。」の文において太郎さんの名前が分からないからその部分を疑問詞「どなた」に置き換えて名前を尋ねるのだと説明するとわかりやすい。(疑問詞を含む疑問文はすべてこの置換方式で行うと説明しやすい。)
- ・教室においては先生が知っていて生徒が知らない人を生徒に尋ねさせる、あるいは生徒が知っていて先生が知らない人に対し先生が尋ね、生徒が答えるという会話で学習する。

VI. ワットさんは さくら大学の 先生です。

1) 基本文法事項：

- ・ここでの文法事項は N_1 の N_2 という 助詞「の」の使い方である。この「の」は名詞と名詞の間に入って二つの名詞の関係を示す。文法的にこの「の」は格助詞として扱われている。
わたしの時計、さくら大学の学生・・・所有 (N_1 が所有する N_2) ・所属 (N_1 に所属する N_2) の関係
東京の地下鉄、伊豆の温泉・・・所在・場所の限定 (N_1 にある N_2 、 N_1 に住んでいる N_2)
伊東の南、食事の後・・・基準に対する空間的・時間的位置 (基準 N_1 に対して N_2 は～) 等々
上記のように「の」が示す二つの名詞の関係は多々あるがここでは、とりあえず所有・所属の関係のみを教え、その都度出てきた時点で新出機能を説明する。

2) 教え方のポイント：生徒の持ち物、生徒の国籍、生徒が働いている会社、協会で働いている先生方を例に発話させていく。

VII. テレサちゃんは 何歳 ですか。

1) 基本文法事項：

- ・ここで第一に学習する文法事項は数字と共に使われる助数詞 (counters) である。日本語ではある物の数を言う時、数だけを言うことはまずなく、数字に必ず助数詞をつけるということを教える。この助数詞をつけることにより物の種類、物のイメージをよりはっきりと言い表すと考えられる。これはヨーロッパ系言語にはないもので、逆に東南アジア、中国、韓国語等にみられる。日本語にはこの助数詞が数多くあるが初級では日常使う物の範囲で十分である。
- ・ある物の数量を尋ねる時、「何 (なん) + そのものの助数詞」が数量を尋ねる疑問詞であることを教える。ただし物の価格、値段を聞くときは「何円」より、「いくら」(「おいくら」) を使う事が多いし、「ひとつ、ふたつ」と数えるものの数を聞くときは「いくつ」となることも慣れてきたら教える。
- ・助数詞には絵のついた資料が用意されているので利用されたい。

2) 教え方のポイント：

- ・まずは1～10までの発音を教える。慣れるに従って100代、1000代くらいまでをおしえる。数字の言い方には規則性があるからその規則性をつかませれば、それほど難しくはないはずである。複数の発音のある数字がある (4：し、よん 7：なな、しち 9：きゅう、く) のでその両方を教える。大きな数字の単位 (万、億、兆・・・) は日本語では4桁毎に単位が更新するが英語では3桁毎 (million, Billion・・・) になるから英語話者にはこの点に注意する。(この大きな数字は初級の中以上からでよい。)
- ・この数字が言えるようになってから初めて助数詞をつけた言い方を学習させる。助数詞の種類によって「いち」が「いっ」になったり、助数詞「本、ほん」などは数字によって「ぼん」になったり、「ぼん」になったりするから注意を要する。初めのうちにあまり面倒なことを教えると学習意欲を低下させるおそれがあるから、最初のうちからあまり詰め込ませないことが肝要である。
- ・人の数を数える時、助数詞は「人、にん」であるが「一人、二人」だけは「ひとり、ふたり」となることに注意。人の数え方は初級の段階の必須事項なのでこれだけは覚えてもらう。この数え方が「ひとつ、ふたつ・・・」からきているので余裕のある生徒には、この数え方があることを教えてもよい。
- ・「何歳」は丁寧語からいえば「おいくつ」であるから、丁寧語が必要な時は「おいくつ」を使うように指導する。
- ・時間、日にちについては第4課から始まるので、時間、日にちはそれからでよい。
- ・教室では生徒の家族の人数、年齢、生徒の国の人口、日用品の値段などを聞きながら会話を進める。

- ・第11課で助数詞を使ったよりくわしい学習をするのでその準備として助数詞を十分に習熟させておく。

第 2 課

I. これは 辞書 です。

1) 基本文法事項：

- ・第2課では、まず第一に「こ、そ、あ、ど の規則」を学習する。「こ、そ、あ、ど の規則」とはある物またはある場所を指示する代名詞（指示代名詞 demonstrative pronoun、これは、ここは・・・等）において、指示するものが話者あるいは相手との距離によってその呼び方がある規則性をもって変わることをいう。その一覧表を下記にあげる。

	指す物が物		指すものが場所	指すものが方向	指すものが方法
	主格、目的格	連体形			
近称（指すものが話者の近くにある時）	こ れ	こ の	こ こ	こちら (こっち)	こ う (こんな)
中称（指すものが相手の近くにある時）	そ れ	そ の	そ こ	そちら (そっち)	そ う (そんな)
遠称（指すものが話者、相手両方から遠い時）	あ れ	あ の	あそこ	あちら (あっち)	あ あ (あんな)
不定称（疑問詞の時）	ど れ	ど の	ど こ	どちら(どっち)	どう (どんな)

- ・ものが大きくて話者と相手の領域の差が感じられないときは、「こ」を使う。
「この部屋は気持ちのいいへやですねえ。」 「これは 田中先生の くるまです。」
- ・指すものが話者、相手からも遠いものは、「あ」を使う。
「あれは 私の 会社のビルです。」
- ・上の表で指すものが方向の場合、こちら、そちら、あちらの使い分けは自分の領域、相手の領域というより「こちら」の場合は自分に向かってくる方向、「そちら」は相手に向かっていく方向、「あちら」は両者から遠ざかっていく方向というほうが適切である。
- ・同様に方法を指す場合、「こう (こんな)」は自分のやり方、「そう (そんな)」は相手のやり方、「ああ (あんな)」は第3者のやり方をいうと説明する。
- ・英語圏学習者においては「これ」は英語の「this」, 「それ」は英語の「it」, 「あれ」は英語の「that」に略対応していると教えてもよい。

2) 教え方のポイント：

- ・机上のもの、または絵カード等を使って近称、中称の練習、教室内、教室外のものを使って遠称の練習をする他、文型の練習だけでなく語彙を増やす学習も同時に行うようにする。
- ・この練習は後に出てくる文型「これはなんですか」を学習したのち会話の形で練習したほうがより効果的に進められると思われるので、この時点では練習を軽く行ってもよい。

II. これは コンピューター の 本です。

1) 基本文法事項：

- ・既出 「N₁のN₂」 の 格助詞「の」の新しい使い方である、 種類、属性を表す「の」の学習である。すなわち物であるN₂の内容、性質、種類等をN₁が説明していると考えられ、N₁についてのN₂（英語においては N₂ about N₁）の意味である。

2) 教え方のポイント：

- ・教室内にある雑誌、本などを使って、 自動車の雑誌、コンピューターの雑誌、ファッションの本、小説の本、観光のパンフレット、日本語の辞書、英語の辞書、日本の時計、伊東の地図、さくらの花、
- ・新聞を見ながら 経済のニュース、政治のニュース、芸能界の話、麻生首相の写真

- ・テレビ番組を見ながら 韓国のドラマ、歌の番組 等を言わせる。

Ⅲ. それは わたしの 傘です。

1) 基本文法事項：

- ・前項の内容説明の「の」に対してここでの格助詞は所有者をあらわす。即ち「N₁の N₂」においてN₁はN₂の所有者をあらわす。N₁がもっているN₂の意味で、N₁は英語における 所有格に相当する。

2) 教え方のポイント：

- ・生徒の所有物、教室の所有物、先生の所有物等を使って発話を行う。
わたしのえんぴつ、教室のホワイトボード、先生のマーカーペン

Ⅳ. この 傘は わたしのです。

1) 基本文法事項：

- ・この文型はⅢ. の文型のバリエーションであるが、新出事項として「この」の用法と所有を示す「N₁の」に「です」をつけることによって所有者を示す述語になることの2つを学習させる。
- ・「この」「その」「あの」は「これは」「それは」「あれは」に対応して（領域の規則に従って）、物が存在する場所を示しながら、物を主題としてとりあげる時に使う。「この傘」は「わたしの領域にある傘」であり、「その方」は「あなたの領域にいる人」の意味である。
- ・「N₁のです」はN₁が所有者であるときのみ許される言い方で、前の句の中で、既に呼ばれている物N₂を重複することを嫌い、省略されていると解釈する。即ち「このN₂はN₁のN₂です」において後者のN₂が省略されているとする。

2) 教え方のポイント：

- ・Ⅲ. の文型のバリエーションとして Ⅲ. で発話した同じ内容で文型Ⅳ. を発話させる。あるいはⅢ. の文型で文を書かせ、Ⅳ. の形に変形させる問題形式として練習してもよい。
これは わたしの ボールペンです。 → このボールペンは わたしのです。
それは 先生の じしょです。 → そのじしょは 先生のです。

V. これは テレホンカードですか。・・・はい、そうです。

それは ノートですか。・・・いいえ、そうじゃありません。 手帳です。

1) 基本文法事項：

- ・この文型は第1課の文型3. で学習した疑問文とおなじである。ただN₁が指示代名詞に代わっているのので、「これは～ですか。」と聞かれた場合答えは「それは」で応え、「それは～ですか。」と聞かれた場合答えは「これは」で応えることに注意する。即ち
これは テレホンカードですか。 → はい、そうです。
→ はい、それはテレホンカードです。 の2通りの答えとなる。

2) 教え方のポイント：

- ・生徒の持ち物、絵カード等を使用しながら、語彙の練習も含めて発話を繰り返す。

Ⅵ. それは 何ですか。・・・[これは] 名刺です。

1) 基本文法事項：

- ・文型Ⅰ. N₁ (N₁は指示代名詞) は N₂です。において N₂が何であるかわからない時 N₂の代わりに 物の名前を尋ねる疑問詞「何 (なん)」を置いて 物の名称を尋ねる疑問文である。これから疑問詞を使う疑問文が多く出てくるが、これは第一課で学習した「何 (なん) + 助数詞」で物の数量を尋ねる疑問文に続く第2番目の疑問詞を使った疑問文である。
- ・「これは」、「それは」の問いに対し、答えはそれぞれ「それは」「これは」で応えるのはV. の時と同じである。
- ・疑問詞を使った疑問文の答えは、「はい」「いいえ」は不要である。

2) 教え方のポイント：

- ・生徒に対して「それは なんですか。」と聞いて、「これは へです」と答えさせる練習をすると同時に生徒の語彙力を確認する練習にもなるので、いろいろ多く質問して生徒の語彙力を増やす学習をする。

VII. これは 「9」 ですか、「7」 ですか。

1) 基本文法事項：

- ・ある物を取り上げて、その名称を聞く時、候補となる名称を二つ並べてどちらが正しいか選択を迫る疑問文である。「これは」「それは」の質問に対し、答えはそれぞれ「それは」「これは」で応えるのは前の例文と同様であり、「はい」「いいえ」も不要である。

2) 教え方のポイント：

- ・この文型は2者選択を迫る疑問文の学習と同時に、間違い易い学習項目を確認する言い方として授業の中で実際に使ってみると、文法事項の練習と生徒の確認事項の二つを一度に学習できる。逆にいえば2者選択の質問を常にしながら授業を行えば、生徒の曖昧な点を先生がいつでも確認できるということになる。

「り」または「い」をボードに書きながら この字は 「り」 ですか、「い」 ですか。

「ね」または「れ」をボードに書きながら この字は 「ね」 ですか、「れ」 ですか。

「1, 000」または「10, 000」を見せながら これは 千ですか、一万ですか。 と質問する。

VIII. それは 何の 雑誌ですか。・・・[これは] 自動車の 雑誌です。

1) 基本文法事項：

- ・「N₁のN₂」の言い方の中の「種類、属性、内容」を表す「の」において、N₁が不明のとき(N₂の種類、属性、内容が不明) N₁を疑問詞「何」に置き換えて、N₂の「種類、属性、内容」を聞く疑問文である。

2) 教え方のポイント：

- ・文型Ⅱ. の逆質問文として、「みんなの日本語」のテキストを指さしながら、「これは 何のほんですか」の質問をし、「それは 日本語テキストの本です。」の答えを引き出させる。
同様に絵カード等を使いながら、本、辞書、花等を指さしながら「何の本」「何の辞書」「何の花」と質問を繰り返し、発話を続ける。

IX. あれは だれの(どなたの) かばんですか。・・・[あれは]佐藤さんの かばんです。

1) 基本文法事項：

- ・「N₁のN₂」の言い方の中の「所有者」を表す「の」において、所有者N₁が不明のとき、N₁を人の名前を聞く疑問詞「だれ」(敬称は どなた)に置き換えて、N₂の所有者を聞く疑問文である。テキストでは「だれの」となっているが、第一課の文型V. のように「どなたの」という方が好ましいように思う。
「だれの」「どなたの」はあくまで人に限る時だけで、会社、団体には使わないことを注意させる。

2) 教え方のポイント：

- ・質問の答え方として、文例のように「佐藤さんの かばんです。」でも良いし、また「佐藤さんのです。」でもいい事を教える。
- ・生徒の所持品、まわりの人の所持品を使いながら発話させる。

X. この 傘は あなたの ですか。・・・いいえ、[その傘は]わたしのじゃ ありません。

1) 基本文法事項：

- ・この文型は前述の文型Ⅱ. の疑問文で持ち主の確認を聞く文である。答えは疑問詞のない疑問文であるから「はい」「いいえ」を必要とする。

2) 教え方のポイント：

- ・答え方も複数の答え方があることを教え、簡単な日常会話に慣れさせることを学習する。

この傘は あなたの ですか。・・・はい、その傘は わたしのです。

はい、わたしのです。

はい、そうです。

否定の答えについても同様の練習をする。

- ・IV. で行ったバリエーションの練習もさせると理解を深めながらより慣れさせる効果がある。

この傘は あなたのですか。 → これは あなたの 傘ですか。

XI. この かぎは だれのですか。・・・わたしのです。

1) 基本文法事項：

- ・前項 文型X. の 所有者の確認の疑問文において 所有者を表す名詞を疑問詞「だれ」に置き換えて 所有者の名前を聞き出す疑問文に変わったものである。

2) 教え方のポイント：

- ・所有者の名前を聞き出す疑問文はもう一つ「これは だれのかぎですか。」があるが、X. の練習と同じく双方からの変換を練習させて、慣れさせる。

この かぎは だれのですか。 → これは だれのかぎですか。

その かさは だれのですか。 → それは だれのかさですか。

- ・これまでにでてきた 疑問詞をまとめて 練習させる。

人の名前を聞く 「だれ（どなた）」

物の持ち主の名前を聞く 「だれの（どなたの）」

物の名前を聞く 「何（なん）」

既知の物の 内容、種類、属性を聞く 「何の（なんの）」

第 3 課

I. ここは 食堂です。

1) 基本文法事項：

- ・第3課では、まず場所を指す指示代名詞について、学習する。「こそあどの規則」については第2課の表に従って教える。

- ・上の例のように話し手、相手とも同じ場所にいると認識している場合は「ここ」を使う。

ここは 教室です。 ここは 伊東市です。 ここは 日本です。

- ・場所の指示代名詞では、話し手の領域が「ここ」、相手の領域が「そこ」という他に、「そこ」の場合は話し手、相手、双方から少し離れた場所（中称）を「そこ」という距離的な言い方も入ってくる。

そこは 社長のへやです。 事務所は そこです。

- ・「ここ」「そこ」は話の中での場所、時間をさす場合もあるが、初級の段階では実際の場所のみとする。

ここは 大事なところです。 事 ここに至って、 ここ 2, 3日

そこを 注意してください。 そこは あなたに 関係ない。

- ・「この」「その」「あその」の場合、単に場所だけを指すだけでなく、店の名前、会社の名前、特定の場所を指す場合もある。

この ラーメンは おいしい。 その 野菜は 安い。 あその 店員は 感じがいい。
(この使い方から、「どの～」という疑問詞が単に場所を聞くだけでなく、「～」が作られた会社、国を聞く疑問詞になっていると考えられる。)

2) 教え方のポイント：

- ・話し手の領域を指して「ここは」という場合は実際にはほとんどない。「ここは」は話し手、聞き手双方の場所を指して言う場合がほとんどで、学習の場合も教室、伊東市、静岡県等 双方がいる場所を使って教える。

- ・あるいは、次の文型II. のように 特定の物を主題にしてその場所を言う言い方「電話は あそこです。」のような言い方をしながら「ここ」「そこ」「あそこ」の概念を理解させていく。

II. 電話は あそこです。

1) 基本文法事項：

- ・ある物、人を主題にあげて、その物、その人が存在する場所を述語として述べる文である。ここでは場所

を指す名詞に指示代名詞が使われているが、場所を示す名詞、行為を示す名詞などを使ってもよい。文型Ⅴ. では 「事務所」という名詞が使われている。

お手洗いは あそこです。

父は 会社です。

母は 買い物です。

おばあさんは 洗濯です。

「父は 会社です。」等の言い方を取り上げ、本来「N₁はN₂です」の文型はN₁=N₂でなければならない、その意味から日本語は文法的にかなりいい加減だとよく取りざたされるが、決してそうではなく述語において場所を指しているとわかりさえすれば立派にその意味を果たしていると考えられる。言語はその伝達において誤解が生じなく、かつ簡略をよしとすればこの言い方はむしろ良いとも言える。

2) 教え方のポイント：

- ・文型Ⅰ. は指示代名詞「ここ」が主題として取り上げられた文であり、文型Ⅱ. は指示代名詞が述語として使われている文である。文のバリエーションの練習で主語、述語を入れ替える学習をしてみると、文型Ⅰは可逆可能であるが、文型Ⅱは可逆できない。「あそこ」は指し示す範囲がある程度広くなるので指す物がある程度大きくないとおかしい文になってしまうからである。日本人にとって当たり前のような事もおかしい例を取り上げながら説明すると、言葉の理解を深めるのに役立つ。

Ⅲ. ここは 新大阪ですか。 はい、そうです。

1) 基本文法事項：

- ・第1課の文型Ⅲ. 「N₁はN₂ですか。」の文型でN₁に場所を指す指示代名詞が使われている文型であり、N₁の場所を確認する疑問文である。疑問詞のない疑問文であるから、答えには「はい」「いいえ」を必要とし、肯定の場合は「はい、そうです」であり、否定の場合は「いいえ、そうじゃありません」になる。

2) 教え方のポイント：

- ・絵カードなどを用いながら、「ここは 公園ですか。」「ここは 駅ですか。」等質問しながら進める。

Ⅳ. お手洗いは どこですか。 [お手洗いは] あそこです。

1) 基本文法事項：

- ・文型Ⅱ. において場所を指す代名詞が不明のとき (N₁がどこにあるのか不明のとき) 場所を指す代名詞の代わりに、不定の場所を指す代名詞「どこ」に置き換えて、N₁がどこにあるのかを聞く疑問文である。
- ・「どこ」の代わりにより丁寧の語感をもつ「どちら」を使ってもよい。「どちら」は方向を聞く疑問詞であると同時に場所を聞く疑問詞の丁寧形でもある。
- ・「どちら」が「どこ」の丁寧形として使われると同様に本来、方向を指す指示代名詞「こちら」「そちら」「あちら」がそれぞれ「ここ」「そこ」「あそこ」の丁寧形として使われる場合もある。
- ・「お手洗い」は「手洗い」に敬語を表す接頭語 (prefix)「お」がついた語であるが、ここではトイレのことを「お手洗い」というだけにし、詳しくは文型Ⅶ. で説明するようにする。

2) 教え方のポイント：

- ・デパートの売り場のイラスト、伊東市の地図、日本の地図を使いながら、それぞれの売り場、食堂など、また市役所、警察、公園等あるいは日本の大都市、名所旧跡、国立公園等を生徒に質問し地理の勉強をしながら日本語の勉強をすると興味を持たせることができる。

Ⅴ. 山田さんは どこですか。 事務所です。

1) 基本文法事項：

- ・文型Ⅳ. の形でN₁が人に代わって、その人が今どこにいるかを聞く文である。この時N₁が話し手の目上の人であったり、上司の人であった場合は「どこ」ではなく「どちら」を使う方がベターである事を教える。むしろ日本語学習者にとってはN₁が人の場合「どちら」を使った方が良いと教えた方がいいかもしれない。
- ・N₁が現在話し手の相手の場合、この文は相手の住んでいるところ、あるいは相手の出身地を尋ねる文になることも余裕があれば教える。

2) 教え方のポイント：

- ・職場のイラスト、公園で過ごしている人たちのイラスト等を使いながら特定の人を探させながら発話をすすめる。

VI. エレベーターは どちらですか。・・・・・・そちらです。

1) 基本文法事項：

- ・この文型は文型Ⅳ.「お手洗いは どこですか。」の文の疑問詞「どこ」を丁寧語である「どちら」に代えた文である。「どちら」については先述の通りで、N₁がものの時でも外出先等で場所を聞く場合は「どちら」を使う方がいい事を教える。教え方のポイントは文型Ⅳ. と同じなので割愛する。

VII. [お]国は どちらですか。・・・・・・[わたしの くには]アメリカです。

1) 基本文法事項：

- ・文型Ⅴ. でふれた通り「どちら」を使って相手の国籍 country、出身地 hometown、出身学校 graduate school、勤務先 company、住居 home 等を聞く文である。相手の国籍を聞く場合は「(お) 国」出身地を聞く場合は「(お) 生まれ」住居「(お) 住まい」となることを教える。
- ・「お国」の「お」は体言、用言の上について、尊敬、謙譲、丁寧の意味を表す接頭語 prefix である。
尊敬を表す・・・・「お顔」「おわかりになる」
謙譲を表す・・・・「お手紙を差し上げます」「おはずかしい」「お願いいたします」
丁寧を表す・・・・「お国」「お生まれ」「お米」「お天気」
初級においての「お」については私たちが普通に使う最低限の名詞（お米、お水、お金、お手洗い、お菓子等）に留めあまり詳細にこだわらずに進めたい。

2) 教え方のポイント：

- ・「わたしは 日本人です。」→「ミラーさんは アメリカ人です。」→「わたしの国は 日本です。」「ミラーさんの国は アメリカです。」という会話で国の意味を理解させ、どこの国から来たのか言わせる。
- ・同様に「出身地」「住居」等を聞きながら発話を進める。

VIII. それは どこの 靴ですか。・・・・・・[これは] イタリアの 靴です。

1) 基本文法事項：

- ・「N₁のN₂」の文型において、N₁が国名、土地名、会社名でN₂が製品名の場合格助詞「の」は「N₁で製造された、作られた」の意味を表す（N₂ made in N₁の意）。逆にある物がどこで製造されたもの、どこで作られたものであるかが不明でそれを聞く場合はN₁を場所を聞く疑問詞「どこ」に代えて「どこの～ですか」と聞く。文型Ⅷ. はそういうことで「ある製品」の製造元を聞く疑問文である。

2) 教え方のポイント：

- ・手近な品物（電子辞書、腕時計、かばん等）を使ってどこの製品かを聞いたり、聞かせたりしながら発話を進める。あるいは日本各地の名産品をあげながらその生産地を言って行っても面白い。
静岡のみかん、新潟のこしひかり、伊東のひもの、トヨタの自動車、NECのコンピューター

IX. この 時計は いくらですか。・・・・・・[それは] 18, 600円です。

1) 基本文法事項：

- ・第一課の文型Ⅶ. で「何+助数詞」があるものの数量を聞く疑問詞であること、従って「何円」はあるものの値段を聞く疑問詞であること、しかし実際は「何円」はあまり使われず「いくら」という場合が多いと説明したが、この文型はその値段を聞く疑問詞「いくら」を使って物の値段を聞く疑問文である。
- ・この「いくら」も丁寧形の「おいくら」があることを教えても良い。

2) 教え方のポイント：

- ・日本では相手の品物を見てその値段を聞くことはあまりしないことを教える。どうしてもその値段を聞きたい場合は「いくらくらい」を使う事を教える。
- ・第一課では1, 000代までの数字を教えたがここでは100, 000代ぐらいまでの数字を教える。この時の教えるポイントは、「十、百、千」の単位は繰り返し使うこと、9, 999及び99、999、9999を超えると大きな単位「万」「億」が使われることを教える。学習するときに使用する数字は小さい

数字では 年齢、日用品の値段、中くらいの数字で電気製品、自動車の価格、大きな数字で国の人口、面積、土地の値段等を使うと教えやすい。

第 4 課

I. 今 4時5分です。

1) 基本文法事項：

- ・第一課文型Ⅶ. で初めて助数詞を使った数字を学習したがここでは時間を表す助数詞、時(じ) 分(ふん、ぶん) を使って時間を言う学習をする。
- ・この文型は 主語N₁「時間は」が略されていて、元の文は「今 時間(時刻) は 4時5分です。」である。
- ・「～時」という時「4時」(よじ) は特別な発音をし「9時」は(くじ) のみであるから注意の事。また「9」は「9分」のときは「きゅうふん」である。
- ・「～分」の場合「1分」「3分」「4分」「6分」「8分」「10分」のように数字が音便をとる時「ふん」が「ぶん」になる事に注意。このように日本語の数字は慣れるまで初心者にとってやっかいであるから、学習意欲を阻害することなくゆっくりと教えることが肝要である。
- ・「～時30分」は「～時半」の言い方がある事を慣れてきたら教えてもよい。
- ・時刻が一通り言えるようになったら、現在の時刻を示しながら「今 ～時～分です。」と言いながら「今」の概念を教える。

2) 類型文：

- ・ 今 何時ですか。・・・・・・・・・・2時10分です。
ニューヨークは 今 何時ですか。・・・・・・・・・・午前0時10分です。
IMCの電話番号は 何番ですか。・・・・・・・・・・0057-45-2597です。

類型文の最初の文は、基本文型Ⅰ. の言い方において、今の時間が不明のため、時間を言う部分に疑問詞「何時」を置き換えて時間を聞く文である。

類型文の2番目の文は、時差 time difference のため異なる世界各都市の時刻を聞く文である。ちなみに時差はその国の標準時間の取り方で若干違うが地球の経度を西に15° 行く毎に1時間遅れる。世界で1番早い時刻の地域は日付変更線の西側の地域で先進国でいうとニュージーランドである。

類型文の3番目の文はある物の番号 number を聞く文で「何」に番号を呼ぶ時の助数詞「番」をつけた疑問詞「何番」を教える。力のある学生には順番をいう助数詞「番目」「何番目」を教えても面白い。

3) 教え方のポイント：

- ・時計の模型、ホワイトボードなどを使いながら時刻を言わせる。時計を見ながらある程度時刻が言えるようになってきたら「今 何時ですか。」と質問しながら今の時間を言わせ、また学生の国の時間を質問し国の時間を言わせる。電話番号の言い方は個々の数字を言う言い方であること、ハイフン「—」は「の」と言う事を教える。

II. わたしは 9時から 5時まで 働きます。

1) 基本文法事項：

- ・基本文型「N₁が(は) Vます」の文の形で動詞が述語として用いられた動詞文である。N₁がどうするのか、どうしたのか、N₁の動作を説明した文である。動詞文には他に「N₁があります。」というような存在を表す文型がある。
- ・上記の説明からわかるように「動詞」とは人、動物、物の動作(走る、歩く、読む、書く) 作用(投げる、壊す、置く) 存在(ある、いる)を表す単語で、時制 tense、肯定、否定、他の単語との接続等によりその語尾が一定の規則により変化する。この語尾が変化する事を活用 conjugation といい、その一つ一つの形を活用形という。国語文法では未然、連用、終止、連体、仮定、命令があったが、日本語教育では「ます形」「ない形」「て形」「た形」「辞書形」「普通形」として教える。第六課までの初級の動詞の学習では、「ます形」の変化のみを勉強し他の活用形には言及していないが、最低でも動詞に活用があることだけで

も教えるようにしたい。

- ・活用していない最も基本的な形（現在終止形）を辞書形 dictionary form または plain form といい日本語辞書、国語辞書に単語として取り上げられている形がこの形である。全ての日本語の動詞はこの形のとき五十音図の「う段」で終わるという規則性がある。
- ・第4課、5課で使われている動詞は目的語を必要としない動詞で、このような動詞を自動詞 intransitive verb という。これに対して目的語を必要とする動詞は他動詞 transitive verb といい、第六課の学習項目である。
- ・「働きます」は動詞「働く」の「ます形」といい、単に「働く」と言った時より丁寧な言い方である。国語文法では「ます」は動詞の連用形に接続する助動詞として扱っているが、日本語教育文法では動詞の活用形の一つとして扱う。
- ・活用変化の規則による動詞の分類

活用形の変化の仕方は一定の規則によって行われるが、その共通の規則性から動詞を分類すると次の3つに分類される。

I グループ：「ない形」を作る時「ない」の前の音が必ず50音図のあ段になるもの。

国語文法における「5段活用」と呼ばれるグループ。

書く（書かない） 読む（読まない） 聞く（聞かない） 話す（話さない）

II グループ：1単語の動詞の中の音でどんな活用形でも音が変わらない部分を語幹（これに対し変化する部分を活用語尾）というが、「ない形」を作る時語幹に直接「ない」が続くもの。

国語文法における「上1段活用」「下1段活用」と呼ばれるグループ。

寝る（ねない） 食べる（たべない） 起きる（おきない）

III グループ：活用形に一定の規則性が見られないもの。国語文法における「不規則変化」と呼ばれるもので 「来る」「する」の2動詞のみがこのグループになる。

来る（こない） する（しない）

- ・初級のレベルの動詞では、最初に「ます形」の形が出てくるが、辞書には「ます形」の形では出ていない。自発的に学習する学生にとって、「ます形」から「辞書形」を作る規則、あるいは「辞書形」から「ます形」を作る規則を知っていないと自分で辞書を調べることができない。この意味から力のある学生にはその規則性を早い内から教える必要がある。下記にその規則を記す。

I グループ：「辞書形」のう段の最終活用語尾をい段に直し、その下に「ます」をつける。

書く → 書きます 読む → 読みます 聞く → 聞きます

II グループ：「辞書形」の語幹を残しその下に「ます」をつける。

寝る → 寝ます 食べる → 食べます 起きる → 起きます

III グループ：

来る → 来ます する → します

IIIグループは「来る」「する」だけであるから、IIIグループは別にして、この法則をよく見ると次のことがわかってくる。即ち「ます形」の「ます」の一つ手前の文字が「え段」であれば、その動詞はIIグループであること。なぜならIグループの動詞の「ます」の一つ手前の文字は全てい段であるからである。そして問題はIIグループの動詞でも「ます」の手前がい段であるものである。この場合その動詞がIグループかIIグループか分からないことになるが、この時はまず「ます」の手前のい段の文字をう段に変えて辞書を引くことである。Iグループであれば辞書にあるし、辞書になければIIグループであることがわかる。ただし「ます」の手前の文字がい段またはえ段の一文字だけであれば、その動詞は全てIIグループである。（着ます、居ます、見ます、出ます、寝ます等）

書きます → 書く は辞書にあり、 起きます → 起く は辞書にないことになる。

- ・IIの文型は動詞の時制でいえば現在形である。日本語の現在形については次の決まりがある。

i) 日本語には未来を表現する文法的時制はなく、現在形を用いて未来形を表す。

これから 学校にいきます。

来年 ヨーロッパにいきます。

ii) 存在を表す存在動詞の現在形は現在の存在を表す。

机の上に本があります。

iii) 一般の動詞の現在形は習慣、真理、普遍性を表す。

わたしは 毎日 朝 6時に 起きます。 (習慣)

われ思う。 故に われ あり。 (真理)

太陽は 東から 昇ります。 (普遍性)

- ・この文型でのもう一つの学習事項は「から」と「まで」の使い方で、「～から」はある動作などが始まる時間、または場所の「起点」を表す。「～まで」はその動作などが終わる時間、場所の「終点」を表す。品詞は両方とも格助詞である。「から」は初級Ⅱで原因、理由を表す言い方を学習する(疲れたから休みます、ひまだから家にいました。)が、この「から」は接続助詞である。

2) 類型文：

銀行は 何時から 何時までですか。・・・・・・ 9時から 3時までです。

- ・「何時から何時まで」と対のような形である事が行われる始まりの時間と終わりの時間を聞く疑問文である。「～からです」「～までです」はそれぞれそのままで始まりの時間、終わりの時間を表す述語となることができる便利な言い方である。

3) 教え方のポイント：

- ・動詞の活用(当面は「ます形」だけであるが順次「て形」「た形」「辞書形」を学習する。)に慣れさせるため、また自発的に学習する学生には辞書を調べる必要から最初のうちに辞書形を覚えさせるためにも早いうちから動詞の活用形を教えるようにしたい。

第14課では「待ってください。」「電話をかけています。」という文型を学習するが、日本語の動詞は時制(tense)、アスペクト(ある動作、状態のより詳しい時間的表現)依頼、義務、命令など表現するとき国語文法でいう助動詞などをともなって必ずその形を変える、即ち活用変化する。従って活用するという事、活用形の実際を知っていると知らないでは学習の進み方に大きな違いが出てしまうという事を教師として厳しく認識する必要がある。

- ・「～から」「～まで」の練習では1日の定常、習慣的な生活パターンを取り上げながら発話させる。また「～からです」「～までです」はそのままで始まる時間、終わる時間を表す言い方として教えたい。

わたしは 11時から 6時まで 寝ます。 わたしは 9時から 5時まで 働きます。

子供は 8時から 4時まで 学校です。 わたしは 12時から 1時まで 休みます。

あのスーパーは 朝10時から 夜10時までです。

郵便局は 9時から 5時までです。

わたしは 家から 駅まで 歩きます。 駅から 日本語教室まで 歩きます。(場所の起点、終点)

Ⅲ. わたしは 朝 6時に 起きます。

1) 基本文法事項：

- ・ここで重要な文法事項は、1日のうちのある時間帯を表す単語の学習と時刻に伴う助詞「に」の使い方である。

1日のある時間帯を表す単語：朝、昼、昼間、日中、夕、夕方、夜、晩、夜中、夜間、真夜中、午前、午後 等 これらの単語については expression of time という表題の表を利用されたい。

- ・格助詞「に」はいろいろの働きがあるが、ここでは「動作」「作用」が行われる時間を言う時、その時間の後に「に」をつけて、その動作がその時間に行われる、または行われたことを表す言い方を学ぶ。

即ち上記Ⅲの文型のように、～月、～日、～時、～分と月日、時刻を伴った動詞文の場合はその月日、時刻の数字の後に助詞「に」を必ずつける。

6時に 21日に 2時間前に 3時間後に

一般的に特定の時に、特定の動作が行われるような場合その時を表す語に「に」をつける傾向がある。

春 桜が 咲きます。(一般的、普遍的事実として 春になれば 桜が咲くという言い方)

春に 桜が 咲きます。(桜は 夏、秋、冬でなく 春に咲くのですという言い方)

木曜日 日本語教室に 行きます。

木曜日に 日本語教室に 行きます。

しかし単語により「に」を全くつけない(つけると不自然になる)ものもある。

今朝 昨晚 昨夜 昨日 今日 明日 先週 今週 来週 先月 今月 今年 毎日 毎週

これらの区別はテキストに出て来た度に、その都度教えることで良いかと思われる。

2) 類型文：

毎晩 何時に 寝ますか。・・・ 11時に 寝ます。

- ・疑問詞「何時」に「に」をつけてある動作が何時に行われるかを聞く疑問文である。時間と同時に、日にち「何日」、月「何月」、年「何年」、曜日「何曜日」、なども学生の力を見ながら教えていく。

3) 教え方のポイント：

- ・Ⅱ. と同様に一日の定常、習慣的な生活パターンを取り上げながら発話を進める。

わたしは 毎晩 11時に 寝ます。 毎朝 6時に 散歩します。

わたしは 日曜日に 休みます。

毎朝 何時に 起きますか。・・・ 6時に 起きます。

IV. わたしは きのう 勉強しました。

1) 基本文法事項：

- ・この文型で「ます形」の過去形を学習するが、第4課で学習する「ます形」を一覧表にまとめると、以下のようになる。「ます」以外の時の動詞の活用形の形は「ます」の時と同じである。

	「ま す 形」		
	肯 定 形	疑 問 形	否 定 形
現 在 形	ま す	ま す か	ま せ ん
過 去 形	ま した	ま した か	ま せ ん で し た

- ・この文型で使われている「勉強します」という動詞は我々日本人が熟語という言葉で習った「漢語」にⅢグループの動詞「します」がついてできた動詞である。その活用形は「します」と同じに変化するから、この形の動詞は全てⅢグループに分類される。初級のうちにでてくるものには勉強します 掃除します 結婚します 案内します 宿題します 出張します などがある。
- ・過去形は発話時点より前に起こったことを表す他に動作が既に完了したことを表す時に用いる。英語では過去形と完了形を厳格に区別して表現されるが、日本語では文法的にその区別を分けていない。

わたしは 昨日 東京へ行きました。(過去)

この本は もう 読みました。(完了)

朝ご飯を 食べましたか。(完了)

2) 類型文：

きのう 勉強しましたか。・・・ いいえ、勉強ませんでした。

- ・過去の動作について確認する疑問文である。
- ・「ますか」という疑問文は未来を表す名詞とともに聞かれた場合は未来の予定について聞くのに対し、現在形の「ますか」はある事についての習慣的動作について聞くことが多い。そしてそれに対する返事には特に区別はない。

あした 東京へ 行きますか。・・・ はい、行きます。

・・・ いいえ、行きません。

朝 散歩しますか。・・・ はい、散歩します。

・・・ いいえ、散歩しません。

これに対し「ましたか」と過去形で聞かれた場合、単純に過去の動作について聞かれた場合と「もうしてしまいましたか」と完了の意味を聞かれる場合の2通りがあり、否定の場合その答え方が違ってくる。

昨日 東京へ 行きましたか。・・・・・・・・はい、行きました。

・・・・・・・・いいえ、行きませんでした。

朝ご飯を（もう）食べましたか。・・・・・・・・はい、食べました。

・・・・・・・・いいえ、（まだ）食べていません。

この時点では完了形は未学習項目であるから「ましたか」の練習においては単純過去形についての質問に限る事に気をつけたい。

- ・また「あした 働きますか」の質問に対し「はい、そうです。」「いいえ、そうじゃありません。」のような答えが出る場合があるが、「そうです、そうじゃありません」の答えは名詞文「です」の場合に限ることも教えたい。

3) 教え方のポイント：

- ・過去を表す名詞（昨日、おととい、昨年、去年等）とともに過去のことについて発話させる。

何時ごろ 伊東につきましたか。・・・・・・・・昨日の夕方6時ごろ（伊東に）着きました。

（いつ）日本にきましたか。・・・・・・・・去年12月に（日本に）来ました。（ ）は未学習項目。

第 5 課

[この課の学習目標]

この課では乗物を利用して外出できる言い方を学習する。文法的には自動詞に行き先、交通手段、同伴者などを示す修飾語がついた形を学習する。

I. わたしは 京都へ 行きます。

1) 基本文法項目：

- ・文型は N_1 は N_2 へ V_i ます。で、 N_2 が場所、行き先を表す名詞、 V_i が移動を表す自動詞で N_1 が N_2 へ移動することを表す。この時 N_2 の後には行き先を表す格助詞「へ」または「に」をつける。「へ」は助詞として発音する時「え」と発音することを注意する。また到着点、行き先を表す「へ」と「に」ついて若干のニュアンスの違いがあり、「へ」は到着点を表す以外に特に方向性を示したり、その場所に移動するという感じがある。(国会は解散の方向へ、今日はどちらへ、さらに奥へ進む など)「に」もほとんど「へ」と同じであるが、「に」には特にその場所を限定するという感じがある。(富士山に登る、荷物を部屋に運ぶ など) 場所を表す「に」については、この課では学生に言及しない。(第10、13課学習事項) 英語圏の学生には「へ」が前置詞 to に略相当することで説明してもよい。
- ・「行きます」と「来ます」についてしばしば学生が混乱することがある。特に英語圏の学生においては英語の come が、日本語の「来る」と「行く」の両方の使い方があるので間違いやすい。(“Come downstairs. Dinner’s ready.” “I’m coming.”) 日本語ではこのような混同はなく聞き手、または第三者のいる場所へ向けて、移動する時が「行く」であり、話し手のいる場所に向けて、近づく時が「来る」である。(こっちへ来い、そっちへ行けは言えるが、こっちへ行け、そっちへ来いとは言えない。こっちは話し手の領分であり、そっちは聞き手の領分であるからである。)

2) 類型文：

あした どこへ 行きますか。・・・・・・・・・・奈良へ行きます。

日曜日 どこへ 行きましたか。・・・・・・・・・・どこ[へ]も 行きませんでした。

- ・第一文は“[～へ] ～へ 行きます。”の文において「行く先」が不明のとき、場所を聞く疑問詞「どこ」を場所の名詞に置き代えて行き先を聞く疑問文である。この会話が成立する場合を考えると厳密に言うとし話し手は聞き手が既にどこかへ外出するのかが分かっている時にこのような質問をするのであって、出かけるのが分かっている場合はまず第一に「あした どこかへ 行きますか」と質問するのが自然である。この意味から第二文の会話は例文として取り上げるには不自然な日本語である。(答えが“どこも行きませんでした。”であれば、質問は“どこかへ行きましたか。”でなければおかしい。) 以下私見になるが、第13課で疑問詞「どこか」「なにか」を学習するので“どこかへ行きますか。”“なにかへますか”の質問に対して“どこへも行きません。”“なにも～ません”と答える会話の学習はその時の方が適切かと思われる。ただし「きのう 学校へ行きませんでした。(家の) 外へ行きませんでした。どこも行きませんでした。」の発話はできるので、外出しないということから「どこも行かない」と教えることは可能である。(自然の会話からみるとどうしても無理があるように思えるが)

3) 教え方のポイント：

- ・移動を表す自動詞「行きます」「来ます」「帰ります」など使って、日常の行動について発話させる。時間の表現「～時に」をすでに習っているから時間を組み合わせた移動の表現なども発話させたい。

II. わたしは タクシーで うちへ 帰ります。

1) 基本文法事項：

- ・文型は“ N_1 は N_2 で N_3 へ V_i ます”で、 N_3 が移動する場所、 V_i が移動動詞のとき移動の手段、方法を表す名詞(主に乗り物) N_2 に格助詞「で」をつけて N_3 へ移動する手段、方法を表す文である。格助詞「で」は道具、材料を表す名詞などにもついて、その道具、材料を使ってある事をすると言う時にも使わ

れる。(第7課学習事項 わたしは ワープロで 手紙を書きます) また第6課では場所・地名・抽象的場所を表す名詞についてある動作が行われる場所を表す用法を学習する。(わたしは駅で新聞を買います)

2) 類型文：

何で 東京へ 行きますか。・・・・・・・・新幹線で 行きます。

- ・疑問詞「何」に手段・方法を表す格助詞「で」をつけて移動する手段・方法を聞く疑問文である。「なんで」はこの他に理由を尋ねる副詞としての用法がある。(なんでこんな事をしたんだ。) この誤解が生じそうな時は、移動手段を聞く場合「何で」を避ける言い方(どうやって等)を一般的にはしているが、ここでは初級であるのでそこまでは言及しない。しかし力のある学生には「なんで」に理由を聞く用法があり、たまに間違いが生じることがある事を言うておくべきかもしれない。

3) 教え方のポイント：

- ・今までに行った所へどんな交通手段を使って言ったかを発話させると同時に、日本にあるいろいろな乗り物の語彙を増やす学習をする。
- ・練習Bで「歩いて」を言わせる問題が出てくる。これは「て形」の動詞の一つの使い方(「走って、泳いで」と言うように、その動作で～します、～しましたの表現)であるが、ここではその文法的説明は省略して、交通手段を使わずに自分の足でどこかに移動する時「歩きます」の動詞を教えながら「歩いて～します」の言い方を教える。

III. わたしは 家族と 日本へ 来ました。

1) 基本文法事項：

- ・ N_1 は N_2 と N_3 へ V_i ます。の文型で人、動物などの名詞 N_2 に格助詞「と」をつけてその動作を N_2 と一緒にする(した)という文である。第4課で同種の物、または人を複数並べてそれらを一つのグループとして表現する時、それらの名詞を格助詞「と」でつなぐ用法(土曜と日曜は休みです)を学習したが、ここはその「と」の第2の用法である。前項の「で」、今回の「と」に限らず助詞は、それがついた名詞によって、あるいは文脈によってその用法、意味がいろいろ変わるから、新しい用法が出てくる度にその違いを十分に教えなければならない。それと同時に既学習事項はその復習をするいいチャンスでもあるから会話等をしながら再度練習をする。

2) 類型文：

だれと 東京へ いきますか。・・・・・・・・山田さんと 行きます。

- ・動作をともしするものはほとんど人の場合であるから、その人の名前が分からない時、人の名前を聞く疑問詞「だれ」を使って、「だれと～ますか」になる。
- ・動作をともしする人がいないときは、一人でその動作をすることになるから「一人で～ます」の言い方を教える。ここで人数を数える時の助数詞「～人」が未学習事項であればそれを学習する丁度いいタイミングとなる。ついでに「誰それと」と特定の人を指さないで「一人で、二人で、三人で」というような数だけを言って動作する言い方を教えても面白い。

3) 教え方のポイント：

- ・最初「どこへ行きますか。」と質問し「次にだれといきますか。」とつないで発話させると自然である。「一人で」を教える場合一人でした例を出しながら教える。(日本語教室へ だれと 来ましたか。・・・・・・・・一人で来ました。)

IV. いつ 日本へ 来ましたか。・・・・・・・・3月25日に来ました。

1) 基本文法事項：

- ・具体的な数字の時間を聞き出す疑問詞は「何時(なんじ)」で第4課で学習済みであるが、日にち、月、年の単位で、ある動作が行われる“時”を聞く時には「いつ」の疑問詞を使う。通常我々が「いつ」と聞く時は具体的な年月日まで要求している場合で、それほど正確な日にちを要求していない時は「いつ頃」と使い分けているようである。従って「いつ」と聞かれた場合はできる限り詳細な(日にちまで)時間で答えることを教えたい。また「いつに」と誤用する学生がいるので「いつ」には助詞「に」は不要である

ことをあえて教える。

2) 類型文：

誕生日は いつですか。・・・・・・・・・・6月13日です。

- ・文型Ⅳ. では「いつ～ますか」とその動作が行われる時間を聞く副詞的な用法であるが、この文では特定の日がいつであるかという名詞的用法の形の疑問文である。従ってこの質問のこたえには、年月日のあとに助詞「に」は不要である。

3) 教え方のポイント：

- ・5課において「～月」「～日」を完全に習熟するよう教える。「～月」で気をつけなければならないのは「4月 しがつ」と「9月 くがつ」であり、「～日」では1日から10日まで及び「14日」「20日」「24日」である。これらはカレンダーを見ながら教えると教えやすい。
- ・合わせて時を尋ねる疑問詞「何日」「何月」「何年」「何曜日」も表を見ながらおさらいをする。
- ・時を表す名詞に助詞「に」をつけるか、つけないかについて大沼先生が聞いた規則を以下にあげます。かなりの場合その規則にあてはまりそうなのでぜひ授業に役立ててみてください。

規則：①絶対的な時間（歴史的時間の流れにおいてその時間が特定できる時間即ち我々が持っている時間の中でその時間がその時の一回だけの時間）には「に」をつけて問題がない。

具体的な数字のつく時間、月日の名詞（～時、～分、～月、～日、～年、50歳の誕生日に）

②相対的な時間（ある不特定の時間、日にちまたはその時間、日にちを基準として派生した時間または日にち）昨日、今日、明日 先月、今月、来月、昨年、今年、来年、先週、今週、来週

第 6 課

【この課の学習目標】

この課での学習目標は日常生活のごく基本的な行動を言う事ができ、また人の誘いを受けたりそれに対する返事をする事ができる。文法的には他動詞の使い方および「誘い」の表現を学習する。

I. わたしは ジュースを 飲みます。

1) 基本文法事項：

- ・文型は 「N₁はN₂をV_tます。」である。ここでN₂は動詞V_tの動作・作用がおよぶ対象となるものでN₂を動詞V_tの目的語という。この目的語をとる動詞を自動詞に対し他動詞 transitive verb という。即ちこの文ではN₁がN₂に対してどういう行為、動作をしたかを表現する。目的語は一般的に格助詞「を」をうしろにつける。この目的語につく格助詞「を」は発音は「お」であるが、助詞として使われる時の書き方は「を」になることを学生に注意する。また動詞によっては目的語を二つとるものがあり、「を」を後ろにつける目的語を直接目的語、「に」を後ろにつける目的語を間接目的語という。自動詞でも補語に「を」をとるものがあるので注意。（公園を歩く、苦難の人生を生きる、太平洋を泳ぐ・・・）

2) 類型文：

① たばこを 吸いますか。・・・・・・・・・・いいえ、吸いません。

- ・文型Ⅰ. の疑問文で疑問詞のない疑問文であるから、返事には、「はい」「いいえ」をつける。

② 毎朝 何を 食べますか。・・・・・・・・・・パンと 卵を 食べます。

- ・目的語が不明のとき、目的語の部分疑問詞「何」に置き換えて目的語が何であるか（その動作をする対象が何であるか）を聞く疑問文である。今までの疑問詞「何＋助数詞」または「何で」（第5課）の「何」の発音は「なん」であったが、ここでの発音は「なに」になる事を学生に注意。（規則としていうと「た行」「だ行」「な行」が後に続く場合と助数詞が来る場合は「なん」となりこれ以外は「なに」と発音する。）これを例として漢字の読み方には「音読み」（中国漢語式発音）「訓読み」（大和言葉式発音）の二通りの読み方があることを教えてもよい。

③ けさ 何を 食べましたか。・・・・・・・・・・何も 食べませんでした。

- ・ここでも第5課文型Ⅰ. の類型文で言及したように「何を食べましたか」の質問に対し「何も食べま

せんでした」の答えは何か不自然である。(普段の我々の会話を考えてみても「朝ご飯何食べた」の質問自体よほど朝ご飯の中味に興味ある時以外あまりしない発話である。答えの方も何も食べなかった時でもその会話の中心は時間がなくて食べなかったか、調子が悪くて食べなかったのかその理由が問題であって何も食べませんでしただけの答えは真に中途半端である。従ってこの会話から「何もたべませんでした」を学習させるのは無理があり、この文型は第13課での学習事項としたい。)

- ④ 土曜日 何を しましたか。・・・・・・日本語を 勉強しました。それから 映画を 見ました。

・Ⅲグループの動詞「する」の「ます形」である「します」の他動詞の用法「N₁をします」の学習である。N₁自体が既に何かの行為を表す名詞であって漢語か英語であることが多くその行為を実際に行うという意味である。初級のうちに出てくるN₁には以下のものがある。

電話、食事、勉強、掃除、会議、見学、試験、仕事、宿題、入浴、スキー、スポーツ、コピー・・・・・・
ここで漢語を目的語とした場合「を」を使わないで直接漢語に「します」をつけた言い方も使われる。

電話します、食事します、掃除します、・・・・・・

・さらに、ここでは接続詞「それから」の使い方を学習する。二つの動作を連続してする時その二つの動作の間に「それから」を入れて、二つの動作に連続性をもたせた言い方である。「て形」を学習した後であれば「～して、それから～します。」という言い方ができるが、ここでは「て形」はまだ未学習項目であるので二つの文で言うことになる。

3) 教え方のポイント：

- ・他動詞及び目的語の概念を教えるのに実際の行為をしながら教えると教え易い。例えばホワイトボードに字を書き、「書きます」の動作を教える。次に「字」を指しながらそれが「字」であることを教える。「字」を書きながら「字を書きます」を教える。食事をしている絵カードを見せながら同様に「ご飯を食べます」を言わせる。ご飯は「食事」の意味と「炊いたご飯」の両方の意味があることを注意する。
- ・他動詞は初級と言ってもかなり数があるのである程度グループに分けて覚えると覚えやすい事を指導する。また初級他動詞は動作の動詞から始まるから絵カードを使って教えるのも効果的である。

飲食、料理に関係するもの・・食べます、飲みます、食事します、焼きます、煮ます、炊きます

五感に関するもの・・・・・・見ます、聞きます、読みます、書きます、

日常動作、生活に関するもの・買います、売ります、仕事をします、勉強をします、宿題をします
覚えます、忘れます、切ります、割ります、破ります、洗います、
ひげをそります、お化粧をします、たばこを吸います、

衣服に関係するもの・・・・・・服、シャツを着ます、ズボン、スカート、靴下、靴をはきます、帽子をかぶります、手袋、マスクをします、めがねをかけます、帯をしめます、
服、シャツ、ズボン、靴、靴下、帽子をぬぎます、手袋を取ります

物に関係するもの・・・・・・作ります、立てます、建てます、取ります、あげます、もらいます

感情に関係するもの・・・・・・愛する、喜ぶ、楽しむ、憎む、恐れる、悲しむ、後悔する、望む

- ・他動詞の語彙と同時に目的語の語彙も増やすよう心がける。例えば「食べます」の動詞と一緒に「朝ご飯」「昼食」「晩ご飯」各種食材、料理名などを覚えさせる。

- ・「それから」の学習では日常生活の中の連続した動作を話題に発話をさせる。

朝 何をしますか。・・・・歯を 磨きます。それから 顔を 洗います。

Ⅱ. わたしは 駅で 新聞を 買います。

1) 基本文法事項：

- ・第5課で移動を表す自動詞に付いて「移動する手段・方法」の「で」を学習したが、ここでは主に他動詞に付いて場所を表す「で」を学習する。文型は N₁は N₂で N₃を V_tます。で、場所を表す名詞N₂のあとにその場所で動作・作用が行われることを表す格助詞「で」をつけて、そこでV_tがされることを表す文である。

- ・場所を表す格助詞に他に「に」があるが、行き先を表す「へ」と同じような意味を持つ「に」の場合その

使い方はそれ程難しくない。(東京へ行きます。東京に行きます。椅子へ座ります。椅子に座ります。と言うように混同してもさしたる違いはない。) また物がある場所に存在することを言う時その存在する場所を表す「に」の用法がある。これは「で」と共用はできない。(机の上に本があります。庭に桜の木があります。×机の上で本があります。) 問題は「東京に住んでいます。」は言えるが「東京で住んでいます。」は言えない場合である。また「東京で生活しています。」は言えるが「東京に生活しています。」は言えない。この使い分けはなにかと考えると、「住みます。」は存在を表す動詞の一つ(この池に河童が住んでいます。＝この池に河童がいます。)で、「生活します」は動作・作用を表す動詞と考えると説明がつく。即ちある場所で能動的、意志的なある動作・行為をする時はその場所は「で」を後ろにつけ、その場所が単なる存在だけの場所であるならその場所は「に」をつけるということが言えそうである。(場所を表す格助詞「に」は第10課以降の学習項目である。)

2) 類型文:

どこで その かばんを 買いましたか。・・・・・・メキシコで 買いました。

- ・Ⅱ. の文型で動作・作用が行われた場所が不明のとき、N₂を場所を聞く疑問詞「どこ」に置き換えて、動作・作用がどこで行われたのかを聞く疑問文である。

3) 教え方のポイント:

- ・日常生活の動作・行為と場所とを関連させて発話させる。絵カードである物を見せ、「これをどこで買いますか」と質問し「～を・・・で買います」と言わせたり、場所の絵カードを見せ、「ここで何をしますか」と質問し「・・・で～をします」と言わせたりする。

Ⅲ. いっしょに 神戸へ いきませんか。

1) 基本文法事項:

- ・文型は「Vませんか」でVが否定疑問の形をとり、さらに動作・作用を表す場合「一緒にVましょう」という「勧誘」の意味を表現する。Vがこの形でも単に否定疑問文の意味だけの時がある(日常の習慣的行動の確認: いつもあそこのスーパーへ行きませんか。)が、ここではふれない。
- ・話し手の「勧誘・お誘い」の提案に対し話し手は相手の意向を聞いているので聞かれた側は通常の疑問文と同じく返事をしなければならない。提案を受ける場合は「はい」「ええ」になる。
- ・第5課で複数の人と、ある行動をする時「誰々と」という「と」の学習と「一人で」という言い方を学習したがここでは相手と共に「～する」という意味の「いっしょに」を学習する。文法的には名詞「一緒」に助詞「に」がついた形である。

2) 類型文:

いっしょに ビールを 飲みませんか。・・・ええ、飲みましょう。

- ・ここでは「誘い」の提案に対して、賛意を示す返事として「ええ、Vましょう」をあげている。「Vましょう」は次の文型のように話し手が相手に一方的な提案を出す時にも使われる言い方であるが、この例のように「誘い」に対して同意の返事をするときにも使われる。この他に同意の返事として「ええ、いいですね」「ええ、ご一緒します。」などを教えてもよい。問題は断わりの返事をする時でテキストにはこの時の返事の例が出ていないのは全くの片手落ちである。断る場合は相手の提案に対して「申し訳ないが受けることができない」という気持ちをこめて、最初に「すみません」で返事をすることを教え、後に続く答えは初級の学習事項でもずっと後になってしまうのでここでは「ちょっと・・・」と相手に答えを預けるような言い方を教える。

いっしょに ビールを 飲みませんか。・・・・すみません、ちょっと・・・(用事がありますので。)

3) 教え方のポイント:

- ・一緒に行くようなところ(買い物、デパート、映画・・・)一緒にするようなスポーツ(テニス、ゴルフ、キャッチボール・・・)イベント(お花見、パーティー、音楽会・・・)などを例に取りながら発話を進める。

Ⅳ. ちょっと 休みましょう。

1) 基本文法事項：

- ・文型は「Vましょう」で、一緒に「Vする」ことを提案する文である。前項で「Vませんか」を学んだが、「Vませんか」が「Vする」ことを提案して一応相手の意向を聞いているのに対し、「Vましょう」は相手に「Vする」ことを100%強要する気持ちで言うことが多い。あるいは相手の予定の行動に対し話し手が相手にその行動を促す時にも使われる。従ってこの言い方の場合話し手と聞き手の間に多少の上下関係があるか、あるいは全くの対等の立場であるかのどちらかである。
- ・第4課の動詞の新出事項のところで「ます形」の活用形を学習したが「ませんか」「ましょう」も「ます形」の活用形の一つであるから動詞の活用形は「ます形」の時と変わらないことを教える。

2) 教え方のポイント：

- ・上記の説明のように「Vましょう」は話し手、聞き手の力関係などから外国人が日本人に対してなかなか使い難い言い方のように思える。ここでは学習者にとってむしろ「Vましょう」と言われた時の返事が重要である。即ち「Vましょう」は100%の話し手の強要か、聞き手の行動の促しであるから、返事は単に「はい」だけか「はい、わかりました。」となる。

第 7 課

【この課の学習目標】

この課では助詞「で」を道具・言語・物などの名詞の後につけて、「ある方法・手段で何かをします。」という表現、また物の授受（やり、もらい）についての表現を学習する。さらに副詞「もう」「まだ」を使って動作の完了表現なども学習する。

I. わたしは ワープロで 手紙を 書きます。

1) 基本文法事項：

- ・文型は「 N_1 は N_2 で N_3 を V_t ます。」で N_2 が道具・言語・物を表す名詞のとき、その後に格助詞「で」をつけて、「その道具・言語・物を使って N_3 を V_t ます。」という表現である。助詞「で」についてこれまでに出了た機能をまとめると

- ① 乗り物などの名詞の後につけて 移動方法・手段を表す。(第5課)
- ② 場所などの名詞の後につけて 動作・行為の行われる場所を表す。(第6課)
- ③ 道具・言語・物の名詞の後につけて 動作・行為がどのように行われたか、その方法を表す。

2) 類型文：

- ① テレビで 日本語を 勉強しましたか。・・・いいえ、ラジオで 勉強しました。
- ② 日本語で レポートを 書きますか。・・・いいえ、英語で 書きます。
- ③ “G o o d b y e” は 日本語で 何ですか。・・・「さようなら」です。

- ・類型文①は「で」が物の名詞についた例でその物を使ってある行為をしたという表現である。
- ・類型文②は「で」を言語（～語）につけて、その言語を使ってある行為をしたことを表す文である。言葉を使うことも情報伝達の方法であるからこれも方法の「で」と言う事ができる。
- ・類型文③も言語方法の「で」の一種で正式に言えば「日本語で言うと」になる。

3) 教え方のポイント：

- ・身近な道具・物を使ってする日常行為を例に取りながら発話を進める。
日本人は 箸で 食事をします。 インド人は 手で 食事をします。 スプーンで 食べます。
洗濯機で 洗濯します。 電子レンジで 温めます。 ハンカチで 汗を 拭きます。・・・
- ・第5課で「何で」を使って移動方法を聞く事を学習したが、方法を聞く時も「何で」を使う事を教える。
何で 食事をしますか。 何で 手紙を 書きますか。 何で 掃除を しますか。
- ・「日本語で」を教える前に「国名」＋「語」で、その国で話されている言語（言葉）を言う事を教える。
韓国語、中国語、フランス語など「英語」の場合「イギリス語」と言わないことを教える。日本語として「国名」の学習がまだであれば、主な国についてこれも教えたい。(特に日本語独自の国名について)
アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、スペイン、ロシア
- ・類型文③を教える時には最初に既に知っている単語を使って、この文型の肯定文を作り、それから「～語でなんですか」を教えると教え易い。
“F a m i l y” は 日本語で 「家族」です。
→ “F a m i l y” は 日本語で 何ですか。
→ 「家族」です。
- ・この言い方は学生が知らない単語を先生に聞く言い方として有用であるから、これを使って先生にたくさん質問するよう指導する。

II. わたしは 木村さんに 花を あげます。

1) 基本文法事項：

- ・文型は「 N_1 は N_2 に N_3 を V_t ます」で V_t は「 N_2 に」と「 N_3 を」の二つの目的語をとる。「 N_2 」は人の名詞で「 N_3 」は物の名詞であり、「 N_1 が、誰それ N_2 に 品物 N_3 を V_t ます。」という意味

を表す。この二つの目的語をとる動詞として初級では他に

送ります、贈ります、(お金を)払います、教えます、習います、(電話を)かけます、貸します、借ります、及び各種授受動詞(あげます、やります、もらいます、くれます・・・)などがある。

- ・「あげます」はもともと「上げます」で第一義的な意味は物を低い方から高い方へ移すと言う意味であるが、ここから派生して、物を自分側から相手側に「上げる」即ち自分の物を相手に無償で「提供する」と言う意味に変化した。従って「あげます」には丁寧、尊敬の気持ちが含まれ、文法的には「与えます」「やります」の丁寧語として扱われる。
- ・二重目的語をとる動詞の中には「送ります」「電話をかけます」「お金を払います」のようにN₂に人だけでなく、場所の名詞をとる場合もある。(この場合、助詞「に」の代わりに「へ」を使うこともできる。)
- ・この文では二重目的語をとる動詞の学習と授受動詞の使い方の学習の二つの重要な指導事項が含まれているが、「みんなの日本語」では授受動詞の正式な学習については第24課で教えるようにしている。従ってここでは授受動詞は二重目的語をとる動詞の一つとして扱い、単語も「あげます」「もらいます」の二つだけを教えている。しかし実際にはこれだけでは授受動詞の重要項目を24課まで省くことになるし、その間、間違った日本語を使いかねない。(「あげます」を英語の“give”と受け取って「カリナさんはわたしに チョコレートを あげました。」というような誤り。)やはり多少の難しさはあるとしても教えなければならない所は教えるべきであると考え、この講座では少なくとも教える側として留意すべきことをテキストの範囲を越えて別に記す。
- ・人々が暮らしていく人間社会においてはいろいろな身分の上下関係が存在する。日本においてはこの上下関係を大切にしているので、このルールを円滑に進めるうえで日本語では特に敬語が重要視される。上下関係が存在する関係においての物のやりとりでは「あげます」「もらいます」だけではとても用がたりない。授受動詞(差し上げます、上げます、やります、くれます、もらいます、いただきます、頂戴する)を使うにあたっては、この意味から適切な動詞の使い分けが重要である。先述のように第24課で授受動詞及び初級Ⅱの最後の課(第49, 50課)で敬語の使い方を学習するが、ここでは第24課での学習事項を先取りして授受動詞における注意事項を「あげます」「もらいます」に関連して述べてみたい。

先に「上げます」について説明したが、物を与える動詞について、その言葉の使い分けを記すと

「差し上げます」：物を受け取る人をさらに尊敬して言う時・・・「お手紙をさしあげます」

「やります」：自分と同じかそれ以下の人、あるいは動植物に物を与える時・・・「猫に餌をやる」

- ・授受動詞は第24課の他に初級Ⅱ第41課において補助動詞としての使い方、即ち「利益行為の授受表現」を学習する。(～してあげます、～してもらいます、～していただきます、～してくださいます)「あげます」「もらいます」の意味自体は変わらないのでここでしっかりと「あげ、もらい」の概念を教えるおく。

2) 類型文：

だれに クリスマスカードを 書きますか。・・・家族と 友達に 書きます。

- ・人を表す間接目的語を疑問詞「だれ」に置き換えて「だれに～を・・・しますか」と聞く疑問文である。このバリエーションとして「～に、何を・・・しますか。」も教える。

3) 教え方のポイント：

- ・ここでは二重目的語をとる動詞の学習と授受表現の動詞の学習が一緒になってしまっていて指導しにくい。まずは二重目的語をとる動詞の学習をして、それから授受表現の学習というように分けて進めたい。二重目的の学習では文型Ⅱであげた二重目的をとる動詞を使って文を作らせてもよい。ここで気をつけることは「に」と「を」の使い分けであるのでこの点を学生に注意する。

母に 着物を 贈る。 敵に 塩を 送る。 先生に 日本語を 習う。

- ・「あげます」はあくまでも「物を与える」、「物をやる」の丁寧語であって尊敬語ではない。目上の人、上司に物を上げる場合は「差し上げる」を使っている。また日本人は本来、人に恩を与える行為に対し、堂々と自ら表現する習慣を持たない。さらに最近では本来「やる」という言葉で使っていたものが「あげる」

という言葉に変わってきているようである。(花に水をあげる。犬を散歩に連れて行ってあげる。)このようなことから文型Ⅱ. のような発話は改まった場ではあまり話されない。学生には家族同士、友達同士であまり大げさでない物のやりとりの時に使うということで教えたい。また上げる人を聞く質問文「～をだれにあげますか」などもまじえてあげる人を答えさせる練習もさせたい。

母の日に 母に カーネーションの花を あげました。

Ⅲ. わたしは カリナさんに (から) チョコレートを もらいました。

1) 基本文法事項：

- ・文型は 文型Ⅱと同じでV_tが「あげます」から「もらいます」に変わった文である。「あげます」は「与える、やる」の丁寧語であったが、「もらいます」は与えられたものを「受け取る」意味で「あげます」の反意語と言える。「もらいます」に関連する他の言葉について記すと

「いただきます」:「もらいます」の謙譲語で上記例文で「カリナさんからいただきました」となればより丁寧な表現となる。又「いただく」は「食べる」「飲む」の意味もあり同じく謙譲語である。

「頂戴します」:「いただきます」と全く同じで使う事ができ、謙譲語である。

- ・上記文型で「カリナさんに」のところを「カリナさんから」と言っても良い。この「から」は第4課で学習した「時間、場所の起点、始まり」を表す助詞と同じで、ある行為がある「人」から始まる事を表す。

- ・「もらいます」を「あげます」の反意語であると言う事から文型Ⅲ. の文を「あげます」を使って言い直して見ると「カリナさんは わたしに チョコレートを あげました。」となる。しかしこの文は何か変である。「カリナさんは 田中さんに チョコレートを あげました。」または「カリナさんは わたしに チョコレートを くれました。」の文であれば全く違和感を感じない。即ち相手または第3者が話し手自身(あるいは話し手の身内)に物を与える時「～は わたしに 物を あげます。」とは言わないで「～は わたしに 物を くれます。」と「くれます」を使わなければならないことがわかる。これは「わたしにあげます」と言う言い方自体「わたし」に対して丁寧の意味が含まれているためである。自分に「くれる」相手に対し敬意を表す時は尊敬語を使い「くださいます」になる。

「くれます」:相手または第3者が話し手、あるいは話し手の身内に物を与える時に使う。なお「くれます」には話し手が、自分より低い者に対して、物を与える時、単に「やる」というより、恩を売る気持ちをこめて「くれる」を使う場合もあるが初級では触れない。・・・私は弟に親の遺産をくれました。(くれてやりました。)

「下さいます」:「くれます」の尊敬語で「カリナさんは わたしに チョコレートを 下さいました。」といえより丁寧な表現となる。「下さい」は「下さる」の命令形「下され」の音便形である。「くれ」は「くれる」の命令形である。

- ・文型Ⅲ. においてN₁とN₂を逆にした文「カリナさんは わたしに (わたしから) チョコレートを もらいました。」はどうであろうか。「もらいます」は主題の人物N₁が物を受け取る側であるが、「もらいます」の言葉の中には下位の者が上位の者から物を戴いたというような響きがある。従って話し手を上位の者に置くような表現「～は わたしから・・・をもらいます」の表現は不適切である。この文意を言いたいときには「わたしは ～に・・・を あげます。」の言い方を採る。

× 「～は わたしから・・・を もらいます。」

- ・「わたしは カリナさんから チョコレートを もらいました。」と「カリナさんは わたしに チョコレートを くれました。」の二つの文で、「物をもらった」という相手に対する感謝の気持ちはどちらがよく表れているだろうか。物をくれた相手を主語にした方が感謝の気持の表現が大きい。従って「くれます」を使った方が感謝の念が強く現れる。これは補助動詞の場合も同じである。

○ 「わたしは おじさんに ディズニーランドへ 連れていってもらいました。」

◎ 「おじさんは わたしを ディズニーランドへ 連れて行ってくれました。」

2) 類型文：

それは 何ですか。・・・手帳です。山田さんに もらいました。

- ・上記の質問文は第2課で習った文で、その時、答えの「これは」は[]の中に入っていたが、ここでは完全に省略されている。日本語においては、話し手と相手の間で既に既知の物とされているものは主語でも目的語でも省略されることが多いことを学生に教える。

3) 教え方のポイント：

- ・「くれます」はまだテキストに載っていない学習項目であるが「あげます」のところで述べたように自分がもらう時「誰々はわたしに何々をあげます」と言う誤用が出かねないのでぜひ教えるようにしたい。(教え方の手引では「わたし」で始まる文を中心に教えるといっているが、全く教える側の勝手である。)
- ・「くれます」を教える時は上記「ディズニーランド」の文のように「わたしは～に・・・をもらいます」の文に対して主語を入れ替えた同意義の文「～はわたしに・・・をくれます」を作って、もらう側が「わたしに」となった場合は「あげます」が「くれます」になるというように教える。

佐藤さんは カリナさんに チョコレートを もらいました。

同意義文 カリナさんは 佐藤さんに チョコレートを あげました。

わたしは カリナさんに チョコレートを もらいました。

同意義文 カリナさんは わたしに チョコレートを くれました。

- ・また実際に生徒と先生の間で物のあげもらいをして教えれば教え易い。

IV. もう 新幹線の 切符は 買いましたか。・・・はい、もう 買いました。

1) 基本文法事項：

- ・第4課で動詞「ます形」の現在形と過去形を学習したが、英語の動詞における時制表現が未来形、現在形、過去形、完了形、進行形及びその複合形と複雑なのに対し日本語における時制の動詞変化は現在形と過去形だけである。それだからといって日本語には進行表現、完了表現がないのかと言うとそうではなく、時制を表す副詞(もう、既に、まもなく、すぐ、まだ、まだまだ、いまだに・・・)を修飾させて表現したり、他の動詞、名詞、副助詞等を組み合わせて(～するところです、～しています、～しているところです、～したところです、～したばかりです、・・・)表現している。ここでは既に動作が完了したことを表す副詞「もう」を動詞の過去形につけて、完了形を表現する文を学習する。即ち日本語では英語の完了形のような動詞の完了形を使って完了を表現するのではなく、「もう」＋「動詞の過去形」で動作が完了したことを表す。
- ・「もう」には現在形に伴って使われる時もあり、この時はその時間、場所が近い事を表す。

もう(そろそろ) 来ころです。 もう 東京はすぐそこです。

2) 類型文：

もう 昼ごはんを 食べましたか。・・・いいえ、まだです。 これから食べます。

- ・もう動作が完了したかどうかを質問している文に対し、まだ完了していないと答える例である。日本人であれば「もう～しましたか」の質問に対し、まだであれば「いいえ、まだ～していません。」と答えるのが普通である。しかしこの文型「て形＋いません」はまだ未学習項目であるので言えない。従ってここではこの未完了表現の簡略形である「まだです。」を教える。(文法的にこの「まだです」は「な形容詞」である「まだだ」の形容詞述語文の丁寧形であって、これも未学習項目であるが、ここでは文法的説明はぬきにして、話題となっている動作が未完了である表現だとして教える。)
- ・「これから」は代名詞「これ」に助詞「から」がついて一語になったもので現在の時間を起点としてある動作を始めようとする時に言う。「今から」と言い換えることができる。

3) 教え方のポイント：

- ・過去形は過去に、ある動作が行われたかどうかを単に述べているだけであるが、完了形はその動作が過去に行われたかどうか(動作の存在)でなく、既に終わったかどうか(動作の時間的存在)を主眼に述べる文である。従ってその文意には、その動作が思ったより早かったのか、遅いのが問題とされる。(ミラーさんはもう昼ごはんを食べました。)あるいはその動作が完了したかどうかの結果が現在の状況に影響を及ぼしているかを問題にする時にも完了形を使う。「もうご飯を食べましたか」と聞いている話し手の

心情は「あなたはごはんを食べてしまってこちらはそのことに対して心配しなくていいですね。」と言う確認か、「あなたと一緒に食べようと思ったが、食べてしまったのなら残念だ。」というような状況に完了形を使うことになる。

- ・ 類型文の質問の答えとして「いいえ、食べませんでした。」の返事がしばしば答えられるが、これは完了形の答えになっていない。「昼ごはんを 食べましたか。」と「もう 昼ごはんを 食べましたか。」の違いを時間の経過図を使って十分に分からせる。

第 8 課

【この課の学習目標】

この課の学習目標は身の回りの事物の様子、感想が言える。文法的には「い形容詞」「な形容詞」の使い方（形容詞の述語的用法及び名詞に対する修飾的用法）について学習する。

I. ① 桜（の花）は きれいです。

② 富士山は 高いです。

③ 桜（の花）は きれいな 花です。

④ 富士山は 高い 山です。

1) 基本文法事項：

- ・ ①の文型は「 N_1 は A_{na} です。」で、 A_{na} は“な形容詞”であることを示し、②の文型は「 N_1 は A_i です。」で A_i が“い形容詞”であることを示す。文意は①②とも N_1 が A_{na} または A_i の性質をもっている、あるいは A_{na} または A_i の状態であるということを表現する。このように人、事物がもっている性質あるいはその人、事物が現在どんな状態かを表す単語を形容詞という。
- ・ 日本語教育における形容詞には上記文例のように“い形容詞”と“な形容詞”の二つがある。前者は国語文法における形容詞と言っているもので、後者は形容動詞と言っているものである。“い形容詞”は辞書形の形がすべて“い”で終わり、“な形容詞”は名詞を修飾するとき“～なN”と“な”の形をとる。用法として、文の最後におかれて述語として使われる用法と名詞の前に来て名詞を修飾する二つの用法がある。この2種類の形容詞が述語として使われている文を形容詞文という。①の文例は“な形容詞”が、また②の文例は“い形容詞”が文の最後に置かれて述語として使われている例であることを教える。
- ・ 文例③では“な形容詞”が、また文例④では“い形容詞”が名詞の前に置かれてその名詞を修飾している名詞修飾用法の例である。即ち名詞修飾用法とは形容詞がその名詞の前に来て、その名詞がどんな性質をもっているか、どんな状態であるかを表す用法である。文の形自体は名詞文である。
- ・ “な形容詞”を丁寧形の述語として使う形「～です」を作る時は語幹（単語の活用変化しない部分）に「です」をつけること、“い形容詞”の場合は辞書形に「です」をつけることを教える。上記①の文例は「きれいです」と「きれい」に「です」がついていて、一見文例②と同じ“い形容詞”の述語文のように見えるが、「きれい」は“な形容詞”の語幹であることを学生に注意のこと。語幹が「い」で終わる紛らわしい“な形容詞”は他に「きらい（嫌い）」「ゆうめい（有名）」がある。“い形容詞”と“な形容詞”の混同は述語文の時は幸いにして間違いにならないが、「ない形」のとき“な形容詞”を“い形容詞”の規則で作ると間違いになる。（「きれくない」は初級の学生がしばしば犯すまちがいである。）その単語が“な形容詞”か名詞かは初級のうちは難しい。（日本人であれば語幹に「な」をつけておかしくなければ“な形容詞”だと教えられるが、初級者は「な」をつけた時おかしいか、おかしくないかがわからない。）従って“な形容詞”はひたする丸暗記をするということで指導する。
- ・ “な形容詞”が名詞を修飾するときは語幹に「な」をつけて「～なN」の形になることを教える。“い形容詞”のときは辞書形をそのまま名詞の前につけて修飾することを教える。なにもつけないことが学生にとって不安を与えるらしく「高いの山」も初級の学生にしばしばみられるまちがいである。

2) 類型文：

① 大阪は にぎやかですか。・・・・・・はい、にぎやかです。

- ② 琵琶湖の 水は きれいですか。・・・・・・いいえ、あまり きれいじゃ（では）ありません。
- ③ 北京は いま 寒いですか。・・・・・・はい、とても 寒いです。
上海も 寒いですか。・・・・・・いいえ、あまり 寒くないです。
- ④ その 辞書は いいですか。・・・・・・いいえ、あまり よくないです。
- ⑤ 東京の地下鉄は どうですか。・・・・・・きれいです。そして 便利です。
- ⑥ 昨日 映画を 見ました。・・・・・・△どんな 映画ですか。（○どんな 映画でしたか。）

△「7人の 侍」です。古いですが、とても おもしろい 映画です。（○とても面白い映画でした。）

- ・類型文の①、②の文は“な形容詞文”の疑問文とその答えである。“な形容詞文”の疑問文、肯定文、否定文の作り方は“名詞文”と全く同じで“な形容詞”の語幹の部分の名詞と考えて作ればよい。また否定文は文例では「～じゃありません」を例示しているが、③の“い形容詞文”の否定文のように「ない」を使って「～じゃないです」を教えてもよい。否定の名詞修飾句を作る場合は「じゃないN」「でないN」「ではないN」を使って作る。

琵琶湖の 水は きれいですか。・・・・・・いいえ、あまり きれいじゃないです。

あまり きれいじゃない水、 あまり きれいでない水、 あまり きれいではない水

- ・ここで「あまり」という副詞がでてくるので、「程度」を表す副詞について教える。「程度」を表す副詞（形容詞）は形容詞、動詞などを修飾して、その状態の程度を表す。程度の高い語から低い語へ例を並べてみると

たいへん、とても、非常に、ひどく、すごく、まあまあ、普通、少し、あまり、それほど、全然
ここで、「たいへん」から「すこし」は肯定文とともに使い、「あまり」「それほど」「全然」は否定文とともに使われて、否定の程度を表す。

- ・類型文の③、④の文は“い形容詞文”の疑問文とその答えである。文例の“い形容詞”の否定は語尾の「い」を「く」に変えて、否定を表す形容詞（もともととは存在しないことを表す形容詞）「ない」をつけて否定を表している。従って“い形容詞”が述語の場合、「ない」を使った否定文は「ない」の後に「です」をつけて「～くありません。」となる。「ない」を使わなければ文例②と同じく「～くありません」となる。否定の名詞修飾句でも作り方は同じである。（青くない海・・・）以上のことを表にまとめてみると

		丁寧形		普通形	
		肯定	否定	肯定	否定
い形容詞	現在形	白いです	白くないです 白くありません	白い	白くない
	過去形	白かったです	白くなかったです 白くありませんでした	白かった	白くなかった
な形容詞	現在形	静かです	静かじゃないです 静かじゃありません	静かだ	静かじゃない
	過去形	静かでした	静かじゃなかったです 静かじゃありませんでした	静かだった	静かじゃなかった

- ・上記の表で「です」の過去形「でした」、形容詞の過去形「白かった」その否定形「白くなかった」は未学習項目である。（第12課学習項目）⑥の類型文の例でも過去形を敢えて教えないようにしているように見えるが、このような表を使って教えるとそれほど無理なく教えられるのではないと思われる。また逆に表のように系統づけて理解させないといつまでたってもあやふやのまま過ぎてしまうことになる。

- ・文例④は事物が好ましい状態を表す“い形容詞”「良い」の読み方を問題にしている文で、「良い」の正しい読み方は「よい」である。しかし「よいです」「良い本」の場合のみ発音は「いい」が使われ、「いいです」「いい本」となる。従って「ない形」の場合は「よくない」となり「いくない」は間違いとなる。
- ・文例⑤及び⑥はある人、ある事物がどんな性質またはどんな状態であるかを聞くのに、それを聞く疑問詞「どう」「どんな」を使う文例である。テキストでは疑問の形容詞を述語用法で聞く場合は「どうですか」を使い、名詞修飾用法で聞く場合は「どんなNですか」と「どう」と「どんな」を分けて例示しているが、「どう」は今では主に「方法」を聞く疑問詞（球場へはどう行くのですか）か、相手の意向、感想を聞く疑問詞（コーヒーはどうですか、お仕事はどうですか）に使われる事が多い。事物の性質、状態を聞く時は「～は、どんなNですか」に一本化した方が自然でかつ容易かと思われる。

東京の 地下鉄は どんな 地下鉄ですか。・・・きれいです。そして便利です。

- ・文例⑤及び⑥では接続詞「そして」と「(～です) が、(・・・です)」の用例が提示されている。「そして」は、接続する前後の文においてその内容が同じ評価（+と+、-と-）の時に使われるのに対し、「が」は接続する前後の文の内容が逆の評価（+と-、-と+）の時に使われる。

富士山は きれいです。そして 立派です。

日本の家は 小さいです。そして 高いです。

日本の自動車は 高いです。が いいです。

あの先生は きびしいです。が 親切です。

3) 教え方のポイント：

- ・初級において学習する形容詞も決して少なくはない。他動詞の時と同じように、その表す内容によってグループに分け、そのグループ毎に覚えさせると覚えやすい。またほとんどの形容詞は反対語をもつので、反対語を対にして覚えさせるのも語彙を増やす上で有効かと思われる。

形状に関するもの 長い、短い、高い、低い、安い、丸い、四角い、大きい、小さい

視覚に関するもの きれい、美しい、きたない、ハンサム、

聴覚に関するもの 静か、うるさい、にぎやか、

味覚に関するもの おいしい、まずい、あまい、からい、にがい、すっぱい

温度に関するもの 熱い、暑い、温かい、暖かい、寒い、涼しい、冷たい、

時間に関するもの 早い、速い、遅い、新しい、古い、忙しい、ひま

感情に関するもの 嬉しい、楽しい、悲しい、さびしい、おもしろい、つまらない、ゆかい

性質に関するもの 親切、やさしい、げんき、良い、悪い、赤い、青い、黄色い、

- ・上記の形容詞が使えるものを身近なもの、絵カードから見つけ出して「～は・・・です」と言わせるか「～はどんなNですか」または「～はどんなですか」を質問しながら発話を進める。

II. ミラーさんの傘は どれですか。・・・あの 青い 傘です。

1) 基本文法事項：

- ・いくつかある物の中で、主題に相当するものがどれかを聞く疑問文である。文型としては「N₁は どれですか」となり「どれ」が複数個ある物の中でN₁はどれかをきく疑問詞である。これと同じ文意で「どれがN₁ですか」の言い方があるが、これは格助詞「が」の使い方の中で学習する項目である。

2) 教え方のポイント：

- ・何本かの傘を並べて、「あなたの傘は どれですか。」「それですか。」「あれですか。」と何回か違う傘を指し示しながら最後に「あなたの傘は どれですか。」と質問し「わたしの傘は・・・です。」と言わせる。慣れてきたら身近なものを使って「～は どれですか。」と品物あてクイズの形で質問しても面白い。

第 9 課

【この課の学習目標】

この課では好き、嫌い、上手、下手、わかります、ありますの単語を使う表現を学習する。文法的には「N₁はN₂がA_{na} (A_i) です」または、「N₁はN₂がV_iます」の文型を学習する。

I. わたしは イタリア料理が 好きです。

1) 基本文法事項：

- ・上記の文型は「N₁はN₂がA_{na}です」というもので、「A_{na}」は「A_i」でもよい。この文型をとる表現はいろいろの場合があり、上の文はその中のほんの一例である。

i) 上記の文において「N₁」(主に人の名詞)が“な形容詞”A_{na}、または“い形容詞”A_iで表現される特性、感情、嗜好を持っていて「N₂」がその特性、感情、嗜好の対象を表している。この時「N₁」は副助詞「は」を伴って文の主題を示し「N₂」は格助詞「が」を従えて形容詞の対象を示す。「あなたは 好きです。」と「あなたが 好きです」の文を比較してみると「は」と「が」でもって「あなた」の主格と目的格が全く入れ替わっているのか分かる。

わたしは 英語が 苦手です。

田中さんは 話が 達者です。

彼は 仕事が 早いです。

乃木さんは 態度が 立派です。

わたしは あなたが うらやましいです。

子供は にんじんが 嫌いです。

わたしは 車が ほしいです。

ひさしぶりに お寿司が 食べたいです。

ii) 「N₁」と「N₂」が全体と部分の関係、即ち「N₂」は「N₁」の中の一部の物という関係を持ち、「N₁」は「N₂がA_{na} (またはA_i) です」という性質を持つ(又は状態である)と言う事を表す。象は 鼻が 長いです。(わたしは) 頭が 痛いです。

iii) 「N₂がA_{na} (A_i) です」という叙述を主題 t o p i c 「N₁」に対して言っている時。この時「N₁」と「N₂」には特に関連性はない。

日本は 山が 多いです。 明日は 天気が 悪いです。

日本の経済は 今が 最悪です。

- ・ iii) の文において「N₁」は副助詞「は」を取り、「N₂」は格助詞「が」をとるのはなぜだろうか。文例①では「N₂」は後に続く形容詞の対象を表しているが、iii) では形容詞は「N₂」の性質、状態、状況を述べていると言える。即ち「天気が悪い」と言った場合「何が悪いのか」と問うたとなると「悪いのは天気」だと言える。この文型を形容詞による現象叙述文といい、形容詞が「N₂」の発話時の性質、状態を表す時「N₂」は助詞「が」に導かれる。この時「どこの」又は「いつの」天気かを言わないでただ「天気が悪いです」と言うだけではこの文の意味は完結しない。この「どこの」とか「いつの」は「天気が悪いです」という状態を叙述している文(節)の主体または主題 t o p i c と言う事が言える。これが「N₁」に相当するものでこの「N₁」は副助詞「は」を従える。

- ・ この課において初めて格助詞「が」が導入された。文の主語を表すのにこれまでは副助詞「は」だけであった。ここで「が」と「は」がどのように違うか簡単に考察してみよう。

i) 動詞文によって表現される様々な事象(「こと」)を表す文において、その動作の主体となっているものをその文の「主格」といい、ただ現象を叙述するだけの一般的な文では主格は格助詞「が」によって示される。

蛍が飛び始めました。 桜の花が咲きました。

ii) 「こと」の表現である文の中でその意味を完結するためにはなくてはならない単語を補語(英語における補語とは違う)と言う。i) で述べた格助詞「が」で示された主格も補語の一つで、他に格助詞「を」「に」によって示される目的語も補語である。その補語のどれかを話し手が特に話題に上げて述べようとする時その補語は文頭に持って来られ、それについていた助詞は「は」に変えられ

る。これを主題化変形という。

田中さんが 7時に 居間で テレビを 見ます。・・・無題文（主題がない文）

田中さんは 7時に 居間で テレビを 見ます。・・・田中さんが主題として上げられた。

7時には 田中さんが 居間で テレビを 見ます。・・・時間が ” 。

あの木の上に 猿が いる。 c f 猿は あの木の上に いる。

このパンは 母が 焼きました。

この手紙は 誰が 書きましたか。

- iii) 存在を表す動詞文において「ある所に、ある（不特定の）ものが存在している」と言う時には「どこに何がある」と言う形をとり、話し手がある特定のものについて、その場所とか数量を述べる時には「何はどこにどのくらいある」と言う形をとる。また話し手と聞き手の間で初めて話題に上げられた主語は「が」で示され、既知の主題は以降「は」で示される。

机の上に パソコンが あります。 c f パソコンは 机の上に あります。

昔々、ある所におじいさんとおばあさん（ ）いました。ある日、おじいさん（ ）山へ芝刈りに、おばあさん（ ）川へ洗濯に行きました。おばあさん（ ）洗濯していると川上から大きな桃（ ）流れてきました。

昨日、田中さんと言う人（ ）訪ねて来ました。・・・その人（ ）どんな人でしたか。

- iv) 主語が不特定のものは「が」で示され、特定の物は「は」で示される。従って疑問詞が主語になる時は必ず「が」をとる。

たんぼの中に 鶴（ ）三羽 立っています。

だれ（ ）そんな事を 言いましたか。

そんな事を言った人（ ） だれですか。

今、何（ ）問題なのですか。・・・問題（ ）そんなに 簡単なものではないのです。

- v) 名詞文では一般的に主語は「は」で示されることが多い。この時「は」で示される主語は話し手と聞き手の間の既知の共通認識事項であることが了解されている。主語に「が」がつく時はその主語に特別な意味（「述語で述べられている主体は他でもないこの～だ」という意味をもつ。即ちこの時述語の内容は話し手と聞き手の間の既知の共通認識事項であるが、その主体が不明であり、この名詞文によってその主体が初めて明らかにされる宣言文のような意味合いをもつ。

わたしは 医者です。 c f わたしが 医者です。

サントスさんは ブラジル人で I M Cの会社員です。

この本が 漱石全集の 初版本です。

誰が犯人ですか。・・・あの人が 犯人です。（あの人は 犯人では ありません）

失礼ですが、田中さんでいらっしゃいますか。・・・いいえ、わたし（ ）中田です。

あのめがねをかけた人（ ） 田中さんです。

田中さん（ ） あのめがねを かけた人です。

- vi) 形容詞文においても一般的に主語は「は」で示されることが多い。即ち主語が「は」で示される時「～は・・・の性質、状態です」という形で普遍的一般的事実を表現したり、話し手の意見を表す。（これを判断文という）これに対し主語が「が」で示される時は主語が現在一時的にそのような状態であるという一時的現象であることを表す。（これを判断文に対し現象文という）

また「が」は一般的判断に対比させて特にある物を取り出して強調する場合にも使われる。

空は 青い。 c f 空が 青い。 （判断文と現象文）

このカメラは いい。 c f このカメラが いい。 （他のカメラと対比させて）

この部屋は 静かだ。 c f この部屋が 静かだ。 （他の部屋と対比させて）

- vii) 上記の判断文と現象文の「は」と「が」の使い分けは名詞文や動詞文においても同様の傾向がみられる。即ち判断文は通常「～は・・・だ」と言う形をとり現象文は通常「～が・・・だ」と言う形

をとる。しかしその現象文が否定の形をとると「～は」の形をとる。これは現象の否定は一種の判断だと考えられるためである。

犬が吠えている。(現象文) 犬は吠えていない。(判断文)

たばこ屋は 文房具やの となりにある。(判断文)

文房具やの となりに たばこ屋が ある。(現象文)

vi) 文節(連体節、条件節など)の中の主語は一般的に「が」が使われ、主文の主語は「は」が使われる。これを構文的条件という。

私が 撮った写真を 先生は 大変 ほめてくれました。

戦争が 終わった時 わたしの 家族は 満州に いました。

中国は広いから 地方によって 春節の 祝い方が 違う。

2) 類型文：

① お酒が 好きですか。・・・はい、(お酒は) 好きです。(わたしはお酒が好きです。)

・・・いいえ、(お酒は) 好きじゃ ありません。

② どんな スポーツが 好きですか。・・・サッカーが 好きです。

③ カリナさんは 絵が 上手ですか。・・・はい、(カリナさんは) 絵が とても 上手です。

・①はI. の文型の疑問文で聞き手の主語「あなたは」が略されている。答えも聞き手の主語が略されていて且つ好きの対象も略されているが、この場合好きの対象のお酒を略せずに言うとなると「は」を使った方が自然である。

・②は第8課で学習した疑問詞「どんな」を使った疑問文である。たくさんの種類を持つ事物の中で何が好みを聞く時に便利な表現である。第2課で学習した疑問詞「何の」を使っても同じである。

・③は第8課で学習した程度を表す副詞「とても」を使った文例である。

3) 教え方のポイント

・I. の文法事項で述べたこの文型をとる形容詞(人の特性、感情、嗜好を表す)を例に、絵カードなどを使い「誰々は、何々が ～です。」の文を作らせてこの文型を習熟させる。

人の特性を表す形容詞 上手、下手、うまい、丈夫、強い、弱い、良い、悪い、速い、遅い
得意、不得意、苦手

人の感情を表す形容詞 ほしい、うらやましい、

人の嗜好を表す形容詞 好き、嫌い、

II. わたしは 日本語が 少し わかります。

1) 基本文法事項：

・I. の文型において A_{na} または A_i が自動詞 V_i に変わった文型である。テキストでは、「わかります」の一語を例にとって「わかります」の対象は助詞「が」になると説明しているが、これでは「が」をとる動詞は「わかります」だけだという教え方になってしまう。文型的に言えば「 N_1 は N_2 が V_i ます」で V_i が可能動詞のとき N_1 (主に人)は N_2 で表わされたある事を V_i することが できるという意味を表す。文例の「わかります」は自動詞で「 N_2 がわかります」は「 N_2 を理解することができます」という意味になる。従って「わかります」は可能動詞と言える。

ここでいう可能には二つの意味があり、一つは技術習得によりある事ができるという可能ともう一つは許可されてある事が出来ると言う可能である。中国語では表現のうえでこの二つは区別されているが、日本語においては特にこの二つを言い分けることはしない。可能動詞は第27課の学習項目であるが、ここで「わかります」を教えるとしたら少なくとも「わかります」は可能動詞であると教えておけば第27課での導入が楽になる。

わたしは 水泳が できます。(技術習得) このプールは 子供でも 水泳が できます。(許可)

・目的語をとる動詞が可能動詞になると「～を」は「～が」と変わる。その他の助詞については変化することはない。

英語の 新聞を 読みます。 → 英語の 新聞が 読めます。

その町まで 30分で 行きます。 → その町まで 30分で 行けます。

・ここでも程度を表す副詞「少し」が出てくる。ここで程度を表す副詞の度合いを表で表すと

たいへん (よく)	とても	非常に	すごく	まあまあ	普通に	少し	あまり	それほど	全く	全然
100%	100%	100%	100%	70%	50%	30%	20%	20%	0%	0%

2) 類型文：

田中さんは インドネシア語が わかりますか。・・・いいえ、全然わかりません。

- ・Ⅱ. の文例の疑問文である。ここでは0%ふんわからないと言うことで「全然」を使っている。
- ・学生の実力または学習意欲に応じて、程度を聞く疑問詞「どのくらい」「どの程度」を使って質問させるのも面白い。(第11課で期間を聞くのに「どのくらい」が提示される。)

あなたは 日本語が どのくらい わかりますか。・・・少し わかります。

3) 教え方のポイント：

- ・第9課では可能動詞として「わかります」の1語だけを提示しているので敢えて他の可能動詞を学習させることは必要ない。日本語の理解を確認する上で日本語に関する学習項目がわかるかを聞きながら発話を進めるのも有効である。

ひらがな(カタカナ、漢字)は よく わかりますか。・・・たいへん よく わかります。

上の文でも「わかる」の対象が、いくつかの種類の中から一つ取り上げるとすると「がわかる」より「はわかる」となることに注意。

Ⅲ. わたし(に)は 子供が あります。

1) 基本文法事項：

- ・第10課で「あります」を使って物がある場所に存在するという文型を学習するが、ここの文型は「あります」が「もっている」の意味で使われている。即ち「N₁(に)は N₂が あります。」という形で「N₁は N₂を 持っています。」という意味を表す。この時の「N₁は」は「N₁には」という存在文の「あります」の場所を表す感じがある。従ってこの場合「N₁は」というより「N₁には」と言った方が適切のように思われる。
- ・またよくこの文で存在文の時のように「子供」は「人」であるから「います」の方が良いのではないかという指摘があるが、この時の「あります」は「持っています」の意味を持つということであればそれにあまりこだわらなくてもいいように思える。

2) 類型文：

① 細かい お金が ありますか。・・・いいえ、ありません。

② 毎朝 新聞を 読みますか。・・・いいえ、時間が ありませんから、読みません。

- ・①の文例は「お金を持っているか」ということを「お金がありますか」と言う言い方で聞いている。
- ・②の文例は「時間がある」という言い方で「持っている」というより「～をする十分な時間がある」と言う意味で使われている。「～だから、・・・です」をいう理由を述べる言い方は次の文型Ⅳ. の学習事項である。

3) 教え方のポイント：

- ・学生の家庭状況(父、母、おじいさん、おばあさん、兄弟、姉妹)について、また日常生活において家にあるもの(車、テレビ、パソコン、電子レンジ・・・)について失礼にならない程度に「～がありますか」という質問をして発話を進める。時間については「～する時間がありますか」という質問は「～する時間」という言い方がまだ学習していないのでできない。この他によく教室で使う「～があります。」には「約束があります。」「用事があります。」などがある。

Ⅳ. きょうは 子どもの 誕生日ですから 早く 帰ります。

1) 基本文法事項：

- ・今までは一つの文の中に主語が一つ、述語が一つの文（単文）であったが、この文型は一つの文の中に主語が二つ（「今日」と「話し手の私」）、述語が二つ（「誕生日です」と「帰ります」）ある。即ち「今日は誕生日です」という文と「(わたしは) 早く帰ります」という二つの文が並立する形で、理由を示す接続助詞「から」によって結びつけられている。このような文を重文という。

この ボタンを 押すと お釣りが 出ます。 (第23課 学習事項)

雨が 降ったら 出かけません。 (第25課 学習事項)

- ・これに対し一つの文がもう一つの文の中の単語を修飾している関係の文を複文といい、修飾している文を従属節という。

日本語教室が 開かれている 伊東国際交流協会は 伊東市の 外郭団体です。

- ・「から」は「から」の前の文が、結果を表す後ろの文の原因、理由となることを述べている。後ろの文には、主張、命令、依頼、推量など話し手の気持ちが来ることが多い。同じような意味で「ので」があるが「から」の場合は後文の結果が話し手が前文で述べる理由のせいだと強く主張する時使われる。

電車が遅れたから会社を遅刻した。(わたしが遅刻したのは電車が遅れたからで私のせいではない。)
これに対し「ので」の場合は後文の結果が前文の原因、理由によるのだがそれは如何とも仕方がないことであつたと話し手の意思を強く出さない時に使われる。

電車が遅れたので会社を遅刻した。(電車が遅れたので私は会社を遅刻してしまった。)

- ・文型は「N₁は～です(ます) から、・・・ます」で「～」の部分は今までに学習した「名詞文」「動詞文」「形容詞文」の疑問文、勧誘文以外のすべての言い切りの形がくる。「・・・」は後文で話し手の気持ちを表すことが多いことは先述した通りである。
- ・上記の使われる傾向から見るとⅣ. の文例は如何にも話し手の主張が強く（自己都合で早く帰ることに対し、早く帰るのが当然だという言い方）不適切のように聞こえるが、なぜか「ので」より「から」を先に提示している。

2) 類型文：

① 毎朝 新聞を 読みますか。・・・いいえ、時間が ありませんから、読みません。

② どうして きのう 早く 帰りましたか。・・・用事が ありましたから。

- ・①、②の例文の答えにはⅢ. で学習した「時間がありません」を早速、前文に使って理由を述べている。このように学習したことをすぐに例文として使うのは学習項目を理解しているかを見るのに非常に有効な方法である。しかし実際②のやりとりが会社の中で話されたとしたら、答えをした方は即刻首になることは間違いない。(初級とはいえ、あまりにも例文がおそまつである。)
- ・後文の「結果」に対する「原因、理由」を前文の終わりに「から」つけて述べる文に対して②の例文では逆に疑問詞「どうして」を結果を表す文の文頭に持ってきてその「原因、理由」を問い質している。即ち相手の或る行動の結果に対して聞き手がその原因、理由を聞きたいとき疑問詞「どうして」を使って聞く。第5課で学習した手段、方法を聞く疑問詞「何で」も使う事ができる。

3) 教え方のポイント：

- ・因果関係のある二つの事象（原因と結果）を例にあげて、それを接続詞「だから」でつなぐ。それを接続助詞「から」を使って一つの文につなぐ練習をして「～ですから・・・ます」の形を習熟させる。

今日は妻の誕生日です。だから花を贈ります。→今日は妻の誕生日ですから、花を贈ります。

お金がありません。だからカメラを買いません。→お金がないから、カメラを買いません。

- ・「どうして」については疑問詞置き換え法で教える。

仕事が 忙しかったから、昨日の日曜日は 休みませんでした。

下線の部分がわからないので疑問詞「どうして」「何で」に置き換えて

どうして 昨日の日曜日は やすみませんでしたか。・・・仕事が忙しかったからです。

- ・上記例文のように接続助詞「から」も始点の「から」のように「からです」の言い方ができる。

第 10 課

[この課の学習目標]

この課では自分の国、町や現在住んでいる環境について、「存在文」を使って簡単な描写ができる。文法的には人、動物の存在文及び物、事の存在文について学習する。

- I. ① あそこに 佐藤さんが います。
② 机の上に 写真が あります。

1) 基本文法事項：

- ・上記 I の①の文型は「N₁ (場所の名詞) に、N₂ (人、動物) が います。」で、②の文型は「N₁ (場所の名詞) に、N₂ (物、事の名詞) が あります。」で二つの文とも「N₁という場所に N₂という人、動物、あるいは物、事が 存在する。」という意味を表す。上記の文型を見てわかる通り①では「N₂」は人、動物であり、②では「N₂」は物、事である。即ち存在するものが人、動物であるならば存在を表す動詞は「います」を使い、存在するものが物、事であればその動詞は「あります」を使う。
- ・第9課の「副助詞「は」と格助詞「が」の使い分け」の所で述べたように、存在文において話し手が特にある物に限定しないで存在を言う時（見えている物、事をそのまま述べる現象文の時）その存在する物は格助詞「が」をつけて表す。（①において話し手は「あそこに佐藤さんが見えます」、②においては「机の上に写真があるのが見える」というように単に見える風景を叙述しているに過ぎない。）
- ・第6課で場所を示す格助詞「で」を学習したが、この「で」はある場所で何かの動作、行為をする場所を示す「で」だった。第10課のように人、物が存在する場所を言う時は「に」を使う事を教える。「に」はこの他に日時の後につける「に」及び「あげ、もらい」の文で行為の対象者を言う時に使った。存在する場所を示す「に」を教えると同時に今まで習った「に」の復習を確認させたい。

2) 類型文：

- ① あそこに 男の 人が いますね。あの人は だれ（どなた）ですか。

・・・・・・ I MC の 松本さんです。

- ② この近くに 電話が ありますか。・・・・・・はい、（電話は）あそこに あります。

- ③ 庭に だれが（だれかが、だれか） いますか。・・・・・・だれも いません。 猫が います。

- ④ 箱の 中に 何が ありますか。・・・・・・古い 手紙や 写真（など）が あります。

- ・類型文①「あそこに 男の人が います。」は単なる人の存在叙述文である。文の最後の「ね」は終助詞と呼ぶものでここでは、話し手が自分の言っている事について、相手に同意を求める気持ちを表している。「あの人はだれですか。」は第1課で既に学習している。（「あの人が だれですか。」にならないことを考えてください。）
- ・類型文②は物の存在文の疑問文である。テキストでは答えの主語を省略しているが、主語をつけた方が自然であるし、「が」と「は」の使い分けの勉強にもなる。ここでは質問の電話について話し手が述べようとしているから「（質問されている）電話は」というように「は」で答えるのが正しい。
- ・類型文③は今まで何回も指摘しているように完全に間違っている日本語である。質問の答えから考えられることは質問者は庭に人がいるか、いないかを聞いているのであって、この場合「だれがいますか」ではなくて「だれかいますか」と質問しなければおかしい。しかも質問者は「だれが」と「人」を指して質問しているのに「猫がいます。」と答えているのは質問者を馬鹿にしているとしか思えない。（動物にも「います」を使うということを教えるにしてもこの例示は不適切である。）私たちの教室では不定のものを指す名詞「だれか」（だれだかわからない人を指す）、「なにか」（何かかわからない物を指す）、「どこか」（どこかわからない場所を指す）を使って教えたい。肯定の答えには不定名詞に代わって具体的な名詞で答える。また否定の答えには「～か」の「か」が「～も」と「も」に変わって全面的否定を表す。従って③の類型文は

庭に だれか いますか。・・・・・・はい、カリナさんが います。

・・・・・・いいえ、だれも いません。 となるのが正しい。

- ・類型文④は物の存在文で、ある場所に何があるかを聞いている疑問文である。(この場合話し手は既に箱になにかがあると言う事を知っていると解釈する。) 答えは「～が あります。」となる。
- ・答えで「など」が使われているが、表現する人、物が複数にわたる時「N₁やN₂など」といって「N₁」や「N₂」の他にも多数あるという意味を持たせる言い方を学ばせる。

3) 教え方のポイント:

- ・絵カードを使ったり、教室の中の物、人を指しながら「います」「あります」の使いわけを習熟させる。
- ・死んだ動物は「あります」になる時もあるが、「います」のままになるときもある。「あります」になるか「います」になるかは話し手のそれに対する意識次第で決まる。

この池に 魚が います。 c f 冷蔵庫に 魚が あります。

公園に 犬が います。 c f 道路に 車に 轢かれた 犬が いました。

冷蔵庫の魚は完全に物の扱いであるが、轢かれた犬はまだ動物として扱われていると考えられる。

- ・練習問題の中で「上」「下」「中」などの位置を表す言葉が出てくる。これは絵を描いた教材資料があるのでそれを使って教えると効果的である。

II. ① 家族は ニューヨークに います。

② 東京ディズニーランドは 千葉県に あります。

1) 基本学習事項:

- ・文型Ⅱ. も存在文であるが、ここでは話し手がある人または物を特に話題として取り上げて、その人または物が“どこに存在するか”を強く言おうとする時に使われる言い方である。文型Ⅰ. の場合は文頭に存在する場所がとりあげられ、存在する人、物は現象文として単に「～が」と言われているに過ぎないが、この文型では、存在する人または物が話題として取り上げられるために副助詞「は」が使われ、且つそれが文頭に持って来られる。この他の規則については文型Ⅰ. と何ら変わりにくく主題が「人、動物」であれば存在動詞は「います」になり「物、事」であれば「あります」になる。

2) 類型文:

① ミラーさんは どこに いますか。・・・・・・ミラーさんは 会議室に います。

② 郵便局は どこに ありますか。・・・・・・駅の 近くです。銀行の 前に あります。

- ・文型Ⅱ. がある人、物の存在する場所を強く主張する文に対して、類型文①、②ともその人、物がどこに存在するか場所がわからないのでその場所を聞く疑問文である。従って文型Ⅱ. の場所を言っている名詞が場所を聞く疑問詞「どこ」に置き換わって作られる。
- ・類型文②の答えの中の「近く」は「い形容詞」の「近い」の「く形」(国語文法における連用形)が名詞に変化したものである。他には「遠くからお出で下さいまして、ありがとうございます。」とか「早くから遅くまで働きます。」などがある。

3) 教え方のポイント:

- ・文型Ⅰ. はある場所に何が存在しているかが話題の中心の文であった。従ってその疑問文は「どこそこに、誰がいますか、または何がありますか」であったが、文型Ⅱ. ではある特定の人または物がどこに存在しているかが問題の文である。よってその疑問文は「誰々はどこにいますか。」又は「何々はどこにありますか。」と特定の人、物の場所を聞く疑問文となる。
- ・教室内の人、ものを主題にしてその場所を聞いたり、学生の国の有名な人が普段どこにいるのか、有名な名所、旧跡がどこにあるのか質問したり、させたりしながら発話を進める。また市街地の絵地図などを使って、店、駅、交番等がどこにあるか、あるいは猫と机の絵を使いながら「上」「下」等の位置を示す名詞の練習をさせる。

万里の 長城は どこに ありますか。・・・・・・北京の 近くに あります。

パンダは どこに いますか。・・・・・・四川省の 山の 中に います。

第 11 課

[この課の学習目標]

助数詞などを使って数量、人数、時間、期間などが言える。また疑問詞を使ってそれらの数を聞くことができる。

I. 会議室に テーブルが 7つ あります。

1) 基本文法事項：

- ・物の存在文において、その物がいくつあるかを表した文である。その物または人の員数を表す数字は普通「あります」「います」の動詞の直前に置かれることが多い。またこの時、員数の数字は副詞的な使われ方なので、「テーブル 7つがあります」とはならないことを学生に注意する。
- ・第1課で日本語では、ある物の数を言う時必ず助数詞をつけると言う事を学習したが、初級の学習者がだいぶ慣れてきたこのあたりで日常使う助数詞を一覧表（添付資料）を使って本格的に教えたい。
- ・文例の助数詞「つ」は辞書では和語の数そのものを表すと出ている。即ち「いち」「に」「さん」・・・は漢字の音から出てきた数字に対し「ひとつ」「ふたつ」・・・は本来の日本語の数の音である。それが小さな個体のもの、あるいは子どもの年齢を表す助数詞として使われるようになった。ほとんどの助数詞に使われる「いち」「に」「さん」・・・に対し、「ひとつ」「ふたつ」・・・は特別な数え方であるのでこれを教える時にはそのような背景を説明した方が学生に対しては納得がいくかもしれない。
- ・助数詞「ひとつ」「ふたつ」・・・に対応して「いっこ」「にこ」・・・が同じような物に対して使われることを併せて教えたい。ただし「いっこ」「にこ」には年齢を表す用例はない。
- ・「ひとつ」「ふたつ」・・・の簡略な言い方「ひい、ふう、みい、よう・・・」なども興味のある学生には教えるのもおもしろいかもしれない。

2) 類型文：

① りんごを いくつ 買いましたか。・・・ 4つ 買いました。

② 80円の 切手を 5枚と はがきを 2枚 ください。・・・はい。全部で 500円です。

③ 富士大学に 外国人の 先生が いますか。・・・はい、3人います。みんな アメリカ人です。

④ 家族は 何人ですか。・・・ 5人です。 両親と 姉と 兄が います。

- ・物、人の員数を聞く時には「何+助数詞」の疑問詞を使うことも第1課で学習したが、「ひとつ」「ふたつ」と数える物の員数を聞く時は類型文①のように疑問詞は「いくつ」である。置かれる場所は員数の数字と同じく動詞の直前が多い。
- ・類型文②は店で品物を複数個買う時の言い方である。「下さい」は動詞「くれる」の尊敬語「下さる」のます形「下さいます」の命令形「下さいませ」で、その「ませ」が省略されたものである。「下さい」は第3課の会話のなかで使われているが、そこで学習しなかった時はここで、「～を n個 下さい」が店で物を買う時の言い方である事を教える。
- ・類型文②の答えの中で「全部で」という言い方が出てくるが、ここの「で」は様態、条件を示す「で」で「全部で」は「全部を合計すると」の意味である。その他に「半分で」「n個で」の言い方がある。ひとつ、1個の場合は「で」を使わず「ひとつ（1個、1本・・・）～円です。」を教える。

この りんごは ひとつ 100円です。

- ・類型文③の答えの中の「みんな」は「みな」のくだけた言い方で主に人に対して全部、全員という意味で使われる。代名詞的用法と副詞的用法がある。

みんなは 学生として 節度ある態度で 行動した。

一同は みな 寝食を 共にして 働いた。

3) 教え方のポイント：

- ・絵カードなどを使って、数量と共にいう存在文を言わせたり、家族構成を言わせたりする。

公園に 犬が 何匹 いますか。・・・ 3匹 います。

ご家族は 何人 ですか。・・・主人と こども 二人 です。

この 公園に 人が 全部で 何人いますか。・・・全部で 9人 います。

II. わたしは 日本に 1年 います。

1) 基本文法事項：

- ・文型Ⅰ. では存在文において物、人の員数を言う時、その数を「あります」「います」の直前に添えて表したが、文型Ⅱは存在している時間を「います」の直前において「期間」を表す表現である。
- ・あるまとまった時間の長さである「期間」を表すには「～間」と言うのが正式であるが、時間の長さ「一時間」「二時間」・・・週の長さ「一週間」「2週間」・・・以外は「間」が略されることが多いようである。

2) 類型文：

① 1週間に 何回 テニスを しますか。・・・ 2回ぐらい します。

② 田中さんは どのくらい スペイン語を 勉強しましたか。

・・・ 3か月 勉強しました。

・・・ えっ、3か月だけですか。上手ですね。

③ 大阪から 東京まで 新幹線で どのくらい かかりますか。・・・ 2時間半 かかります。

・・・ 25、000円 かかります。

- ・類型文①は助数詞「回」を使った文で、「回」には「度数」を表す場合（アメリカには3回行きました。）と「順序」を表す場合（9回の表、バッター3番からです。）があるが、ここではある一定の期間 N_1 間にある事が N_2 回あるという言い方「 N_1 に N_2 回」で、度数を表している。

日本語教室は 一週間に 一回 あります。

- ・類型文①の答えで「2回ぐらい」が出てくるが、数字のあとの「くらい」はその数字が正確な数字でないこと（だいたい、おおよそ）を表す。「ぐらい」は「くらい」の音便形である。元々の「くらい」は副助詞で名詞などの後について、「その程度だ」という度合を表す。

このぐらいなら、 文句のないところだろう。

- ・類型文②は疑問詞「どのくらい」を使った文であって、「どのくらいVますか」で「V」する期間、時間を聞く表現である。「V」が存在を表す動詞「あります」「います」のときは「どのくらい」は存在する物、人のだいたいの員数、量を聞くことが多い。

昨晚は どのくらい 寝ましたか。・・・ 7時間 寝ました。

コンサートに 人が どのくらい 来ましたか。・・・ 200人ぐらい 来ました。

- ・類型文②の答えで「数字+だけ」の表現がある。ここではその数字がいかにも少ないという話し手の気持ちを表しているが、文脈によってはこれだけで十分だと言う意味にもなる。この「だけ」も「くらい」と同じ副助詞で名詞などについてその名詞の範囲に限定するという意味がある。

二人だけの話ですが、・・・

たった これだけでは とても 暮らして いけません。

これだけあれば 十分です。

- ・量の少ない言い方で「しか」があるが、この「しか」は「～しかない。」というように常に否定形と共に使われて「～の他にない。」という表現になる。

あと 10分しか ない。 c f あと 10分だけ ある。

これしか やりようがない。

- ・同じく類型文②の答えで「えっ」があるが、これは「感動詞」または「感嘆詞」と言われるもので、話し手の感情や呼びかけ、応答を表す。今まで学習してきた、「はい」「いいえ」なども品詞的にはここに入る。ここの「えっ」は話し手の軽い驚きを表している。このような「感動詞」は会話の中で適度に使えば、それだけ感情の入った生きた会話になるので、機会をとらえて教えていきたい。

- ・類型文③は「どのくらいVますか」の文の中で「V」に「かかります」という自動詞を使った例である。「掛かります」には多くの意味があるが、ここでの「かかります」は「時間がかかります」「お金がかかります」と言う言い方で、「(何かをするために) それだけの時間またはお金を必要とします。」という意味を表す。「時間が」「お金が」というところを具体的な数字に置き換えて「1時間かかります」「10万円かかります」ということもできる。その他「必要とする」と言う意味が転じて「負わなければならない、負担しなければならない」と言う意味も出てくる。(荷がかかる。責任がかかる。手間がかかる。)
- ・その必要とする時間、お金が不明でそれを聞く時は、期間、時間を聞く疑問詞と同じ「どのくらい」を使って聞く。
- ・類型文③(テキストの例文7.)の質問文は本来は不完全の文で「どのくらい かかりますか」では「かかる」のが時間であるのか、お金であるのか わからない。時間を聞くのであれば「時間はどのくらいかかりますか」と聞かなければおかしい。

3) 教え方のポイント:

- ・第11課で数量、時間の表現などができると、学生の身の回りのことについてかなり会話らしい会話ができるようになる。できるだけ学生の毎日の生活にそった話題を拾い上げて会話を進めていくようにしたい。

どのくらい 日本に いますか。

北京から 成田まで (時間は) どのくらい かかりましたか。

- ・「期間」を表す時間、日数なども添付一覧表を使って指導する。

第 12 課

【この課の学習目標】

過去の出来事や経験について、簡単な感想や印象を述べられる。また身近なものや、自国と日本などに関する簡単な比較ができる。文法的には名詞文、形容詞文(～です)の過去形及び形容詞文における比較文を学習する。

- I. ① きのは 雨でしたか。・・・いいえ、雨じゃ ありませんでした。
 ② 京都は 静かでしたか。・・・いいえ、静かじゃ ありませんでした。

1) 基本文法事項:

- ・動詞文「～は・・・Vます」の時制については第4課で学習したが、ここでは名詞文、「な形容詞文」の過去形を学習する。名詞文、形容詞文の過去形は主題あるいは主格の過去が何であったか、どういう状態であったかを述べる時に使う。文型は「N₁は N₂(またはA_{na}の語幹)でした。」で、否定形は「N₁は N₂(またはA_{na}の語幹)じゃありませんでした。」である。
- 「です」の現在形を含めた活用形は以下の表の通り。

	「で す」(例: 静かです)		
	肯 定 形	疑 問 形	否 定 形
現 在 形	で す 「静かです」	で す か 「静かですか」	じゃありません 「静かじゃありません」
過 去 形	で し た 「静かでした」	で し た か 「静かでしたか」	じゃありませんでした 「静かじゃありませんでした」

2) 類型文:

- ① わたしは 以前 会社員でした。今は 公務員です。
- ② 今 ここは スーパーです。以前は 映画館でした。
- ・名詞文の過去形は過去を表す語が主題となるか、過去を表す語を伴って作られることが多い。復習しながら過去を表す単語についても教えたい。

おととい(一昨日) きのう(昨日) 今日(本日) あした(明日) あさって(明後日)
 先々月 先月 今月 来月 再来月

おとし (一昨年) 去年 (昨年) ことし 来年 再来年

～前 (三日前、一週間前、10年前・・・)、以前、昔、～ (過去に関する名詞) の時、の頃

3) 教え方のポイント:

- 過去に関してのこと (天気、仕事、遊び・・・) などを話材に発話を進める。

きのうは 雨でした。おとといも 雨でした。この季節は 雨が多いです。

きのうは ひまでした。おとといは ひまじゃありませんでした。

II. きんうは 寒かったです。

1) 基本文法事項:

- 文型Ⅰ. が名詞文、「な形容詞文」の過去形に対し、文型Ⅱ. は「い形容詞」文の過去形である。文型Ⅰ. と大きく変わるところは、文型Ⅰ. では「です」が過去形「でした」に変化するのに対して、文型Ⅱ. では「です」は変化せずに「い形容詞」が過去形に変わることである。これはなぜかというところ「い形容詞文」では普通体 (丁寧文ではない文体: きんうは 寒かった。cf 京都は静かだった。) の時「です」を使わないで「い形容詞」のみで表現されるので、「い形容詞」の活用が優先されるためと思われる。第20課で普通体の学習をするが、上記の説明の上から、また普段友達同士の会話では普通体が話されることから若干「普通体」について話しておくことも必要かもしれない。

以下に「い形容詞」の活用表を示す。

	い形容詞の活用「～ い です」 (例: 寒いです)		
	肯定形	疑問形	否定形
現在形	～ <u>い</u> です 「寒いです」	～ <u>い</u> ですか 「寒いですか」	～ <u>くない</u> です 「寒くないです」
過去形	～ <u>かった</u> です 「寒かったです」	～ <u>かった</u> ですか 「寒かったですか」	～ <u>くなかった</u> です 「寒くなかったです」

- 上記、表において「～」は「語幹」を表すが、「語幹」および「活用語尾」についても理解できる学生には教えておくのが望ましい。

2) 類型文:

① 旅行は 楽しかったですか。・・・・・・はい、とても 楽しかったです。

② 天気は よかったですか。・・・・・・いいえ、あまり よくありませんでした。

③ きんうの パーティーは どうでしたか。

・・・・・・とても にぎやかでした。いろいろな 人に 会いました。

- 第8課で状態、性質を聞く疑問詞の学習として「東京の地下鉄はどうですか」を学んだが、そこでは「どう」より「どんな」の方が自然で覚えやすいということを書いた。しかし類型文③のように過去形で聞く場合は「どんなでしたか」より「どうでしたか」の方がよく使われているようである。「どう」と「どんな」を現在形と過去形で使い分けるのは煩雑であり勧められないが、使い分けた方がより実際に近いと思われる。

3) 教え方のポイント:

- 「寒いでした」も初級の学生にしばしば見られる間違いである。この間違いを避けるには品詞の確認 (名詞、な形容詞、い形容詞の区別)、それに対する正しい文法の適用を確実に教えることのみである。

III. 北海道は 九州より 大きいです。

1) 基本文法事項:

- 文型は「N₁は N₂より A_i (またはA_n) です」で、主題のN₁と対照のN₂を比較して、主題のN₁がN₂に対してどうなのかその状態を述べる文である。比較の対照となるN₂は格助詞「より」を後ろにつけて示される。

2) 類型文:

① 東京は ニューヨークより 人が 多いですか。・・・・・・はい、ずっと 多いです。

② 空港まで バスと 電車と どちらが 速いですか。・・・電車の ほうが 速いです。

③ 海と 山と どちらが 好きですか。・・・どちらも 好きです。

・類型文①は「 N_1 は N_2 より N_3 が A_i (または A_{na}) です」で、主題 N_1 と比較の対照 N_2 は文型 I. と同じであるが、比較している内容が「 N_3 が」で表わされる。比較している内容が文脈等で自明の場合は「 N_3 」は略される。文型 I. では比較している内容「面積」あるいは「大きさ」が略されている。

・類型文①の答えで副詞「ずっと」が出てくるが、この「ずっと」は比較した二つの物 (または人) の状態の「差」の程度をあらわす副詞である。その程度の大きなものから並べると

「ずっと」「はるかに」「ずいぶん」・・・「わずか」「少し」「ちょっとだけ」

・類型文②は、並列の助詞「と」(第4課の既学習項目) を使って比較するものを二つ並べて、より A_i (または A_{na}) のものが、二つのうちのどれかを疑問詞「どちら」を使って聞く文である。第3課で場所または方向を聞く疑問詞として「～はどちらですか。」を学習したが、ここでは複数の物 (または人) からひとつ、どれを選ぶかを聞く時に使う「どちら」で、文型としては「 N_1 と N_2 と (では) どちらが A_i (または A_{na}) ですか」になる。

・「どちら」は疑問詞であるから、これが主語になる時は「は」ではなく「が」になる。(「は」と「が」の使い分けを参照のこと。)

・類型文②で「 N_1 と N_2 とどちらが～ですか」と聞かれた時の答え方の学習である。即ち回答者がかりに N_1 を選んだとしたらただ「 N_1 が～です。」と答えるのではなく、「 N_2 より N_1 が～です。」という意味をこめて「 N_1 のほうが～です。」と言う答え方をする。即ち「のほう」には「二つを比較すれば、こちらだ」というような意味が含まれる。

・類型文③で疑問文は類型文②と同じであるが、答えとしてどちらか一つを選ぶことができない、両方同じ程度の「状態です」「好きです」「嫌いです」と言う場合で、この時は「二つとも～です。」という意味で「どちらも～です。」と答える。

てんぷらと すきやきと どちらが 好きですか。・・・どちらも 好きです。

3) 教え方のポイント:

・スポーツ、音楽、映画などを通して好きなチームの比較、好きな音楽ジャンルの比較、映画ジャンル、俳優の好み等学生の興味に合わせて比較文を作り答えさせていくようにする。

ジャズと クラシックと どちらが 好きですか。

野球と サッカーと どちらが おもしろいですか。

IV. 1年 (の中) で いつが いちばん 好きですか。・・・夏が いちばん 好きです。

1) 基本文法事項:

・比較する物が二つだけの場合は、「～と～と、どちらが・・・ですか。」の文型で言えるが、比較する物が3つ以上の場合はこの文型では使えない。一般的に比較するもの、事が多数ある時、それらのものはある一つのグループの中に入る。そこでその中から一つを取り上げようとする時は、最初にそのグループの名称 N_1 をあげて、「 N_1 の中でどれが、なにが、だれが、いつが・・・ですか。」と聞く。疑問詞はグループの種類によって適切な疑問詞を使わなければならない。文型IV. では「一年の中で」と「時」がグループ名であるから疑問詞は時を聞く疑問詞「いつ」になる。

・いくつかある物を比較して一つを選ぶと言うことは、その中の一番のものを選ぶと言うことになる。そこで最上を表す名詞「いちばん」を副詞として使って「何がいちばん～ですか」の言い方になる。「ばん」は元々序列、順番を表す助数詞で名詞であるが、「いちばん」のみ副詞としても使われる。

男子の中で だれが いちばん 速いですか。・・・田中君が いちばん 速いです。

・最上級を表す副詞は「いちばん」の他に「もっとも」があるが、「いちばん」よりは文語的である。

2) 類型文:

① 日本料理 [の 中] で 何が いちばん 好きですか。・・・てんぷらが いちばん 好きです。

3) 教え方のポイント:

この文型の学習で大事なことは文型そのことの他に適切な疑問詞が使えているかも重要なポイントとなる。従ってその疑問詞の所を伏せて学生に言わせるのも学生の実力を見極めるのに有効である。

友達で（ ）が 歌が いちばん 上手ですか。

日本の 観光地で（ ）が いちばん 良かったですか。

[日本語教室メモ]

I. 敬語に関して（「日本語を反省してみませんか」 金田一春彦著 より抜粋

1. 「ご住所をおっしゃってください」という言い方は、相手に対する尊敬を表している言葉だろうか。
2. 「ジュースのほうは袋に入れましょうか」「ご注文のほうはいかが致しますしょうか」というような言い方は敬語と言えるだろうか。

II. 日本語の仮名遣いと送り仮名、漢字の熟語の問題

1. 次の各文の中に、送り仮名が間違っているものがあれば一文節を抜き出して正しく書きなおし、無ければ○を書いてください。

- ① 報告は手短かに行え。 ()
- ② 仕事の合い間に語り合う。 ()
- ③ 二人が組になって担ぐ。 ()
- ④ 惨めな気持ちを味わわせる。 ()
- ⑤ 失政で人々の暮らしが脅やかされている。 ()
- ⑥ 情ない話だが、迷子になってしまいました。 ()
- ⑦ 最寄の駅まで、人の波に逆らって急ぎ足で歩いた。 ()
- ⑧ 新しいパソコンに慣れるのは、並み大抵のことではない。 ()
- ⑨ この私小説は、彼の心の憂いを鮮かに描き切っている。 ()
- ⑩ 折からの雨で、祭りの客たちは慌てて家に帰った。 ()

2. 次の塾語では、「下」はどんな意味を表していますか。それぞれ後のア～コから選んで、記号を書いてください。

- ① 下見 () ② 下手人 () ③ 沈下 () ④ 下心 ()
⑤ 門下 () ⑥ 殿下 () ⑦ 下旬 () ⑧ 階下 ()
ア. 身分が低い イ. 高いところから低いところへ移る ウ. 敬う気持ちをあらわす
エ. 前もって準備をする オ. ある点より低いところ カ. 表に出ないで心で思う
キ. 実際に手を下す ク. 支配・影響を受ける地位 ケ. 都から離れていく
コ. 順序が後ろのほう

3. 次の二字熟語の構成は、後のA～Fのどれに当てはまりますか。それぞれ記号を記してください。

- ① 美辞 () ② 日照 () ③ 経緯 () ④ 無論 () ⑤ 棄権 ()
⑥ 打撲 () ⑦ 年長 () ⑧ 出納 () ⑨ 執務 () ⑩ 駆逐 ()
⑪ 巧拙 () ⑫ 晩秋 () ⑬ 非常 () ⑭ 起伏 () ⑮ 拘束 ()
A. 意味の似た漢字を重ねたもの
B. 反対の意味の漢字を重ねたもの
C. 上の漢字が下の漢字を修飾しているもの
D. 下の漢字が上の漢字の目的・対象を示すもの
E. 主語と述語の関係になっているもの

第 13 課

[この課の学習目標]

この課では手に入れたいもの（物、人、時間など）やしたいことを言える。また移動の動詞文においてその移動の目的を言う事が出来る。文法的には感情形容詞の一種である「ほしい」を使った「～がほしい」の文型と「～が（を）したい」「（動詞の「ます形」の新しい用法）を使った文型の学習をする。また「ます形」のもう一つの新しい用法である「～しに行きます」の文型を学習する。

I. わたしは パソコンが 欲しいです。

1) 基本文法事項：

- ・第9課の文型 I. で「 N_1 は N_2 が A_i です」を学んだ。そこでは N_1 が A_i (A_{na}) で表現される特性、感情、嗜好をもって N_2 がその特性、感情、嗜好の対象を表していることを記したが、上記の文型もこれと全く同じである。「ほしい」は自分のものにしたい、自分の所有物にしたいという欲望、希望の感情を表す「い形容詞」であり、 N_2 はその所有したい対象物を表している。また「ほしい」はこの他に、て形の動詞をとまって「～してもらいたい」という意味を表す補助形容詞の働きももつ。

もう少し わかるように 話してほしい。

- ・この文型（叙述形現在）で重要なことは N_1 は必ず1人称に限られるということである。この法則は「ほしい」に限らず A_i , A_{na} が感情を表す形容詞のときは N_1 は1人称に制限される。

× 彼は パソコンが ほしいです。 c f ○ 彼は パソコンを 欲しがっています。

○ 彼は パソコンが ほしいと言っています。(引用文の中)

△ あなたは 車が ほしいですか。 c f × あなたは 車が ほしいです。

× 彼は 車が ほしいですか。

2) 類型文：

今 何が いちばん 欲しいですか。

- ・ほしい対象物を聞く疑問文で文型 I. において N_2 を物を聞く疑問詞「何」に置き換えた文である。

3) 教え方のポイント：

- ・現在、無くて不便な思いをしていること、今、手に入れるために貯金している物などを話材に取り上げながら進める。

「・・・私は自動車がほしいです。

自動車がありませんから電車で伊東に来ている。1時間かかります。大変です。

私はカメラが好きです。今、小さいカメラがあります。・・・もっと良いカメラがほしいです。

II. わたしは てんぷらが（を）食べたいです。

1) 基本文法事項：

- ・文型的には文型 I. と全く同じであるが、ここで学習することは「食べたい」という語の成り立ちについてである。即ち動詞の「ます形」に助動詞「たい」をつけてその動作・行為を希望する、「～したい」という意味を作るということである。日本語教育の中では助動詞の概念がないので「ます形+たい」のかたちを動詞の「たい形」と呼んでいる。しかし動詞の「たい形」と言っても「ます形+たい」は品詞としては「い形容詞」（感情形容詞）になるので注意のこと。

わたしは 東京へ 行きたいです。 わたしは 東京へ 行きたくないです。

- ・動詞の活用とは動詞の活用語尾が変化してそれに助詞、国語文法における助動詞などがその動詞にいろいろな意味を付加することをいうが、「ます形+たい」も「ます形」が持つ機能の一つである。

「ます形+ます」 話し手の丁寧の気持ちを表す。

「ます形+たい」 その動作をしたいという願望を表す。

「ます形+に」 後に続く移動動詞の目的を表す。(次項学習項目)

- ・「ます形」は国語文法における連用形と言われるものである。「ます形」の用法の中で上記のほかに「ま

す形＋て」「ます形＋た」があるがこの形は動詞がⅠグループの動詞である時「ます形」が音便の変化を起こし「ます形」にならないので、日本語教育では「て形」「た形」として「ます形」とは別のものとして扱っている。

Ⅰグループの動詞の「て形」「た形」 「書いて」「読んで」「走って」「書いた」「読んだ」「走った」

Ⅱグループの動詞の「て形」「た形」 「起きて」「食べて」「寝て」「起きた」「食べた」「寝た」

- ・「ます形＋たい」が感情形容詞になることからN₁の人称についての規則は「ほしい」の場合と同じ。
- ・今までは動詞の活用形において「～ます」の形を「ます形」と呼んでいたが、正式には「～ます」の形の「ます」をとったものを「ます形」という。「行きます」であれば「行き」の形が「ます形」である。
- ・「ます形＋たい」が形容詞に変わってもそれに先行する助詞は動詞の場合と同じ助詞をとる。但し動詞が他動詞の場合テキストでは「N₂を」という言い方を取っているが「N₂が」の方が一般的である。

△ わたしは てんぷらを 食べたいです。

わたしは 母に 会いたいです。 公園を 散歩したいです。

2) 類型文：

① 夏休みに どこへ 行きたいですか。・・・・・・沖縄へ 行きたいです。

② きょうは 疲れましたから 何も したくないです。

・・・・・・そうですね。きょうの 会議は 大変でしたね。

- ・類型文①②のように「ます形＋たい」の活用変化は「い形容詞」と全く同じである。
- ・類型文①は相手に対して相手の希望を聞いているが「～たいですか。」はあまりにも相手の心情に対して直接的な聞き方で、特に目上の人に対しては失礼になる。この聞き方はあくまでも友達同士か目下の相手に限ることを指導したい。
- ・類型文②で副詞「何も」が出てきている。この「何も」は「疑問詞＋も」の形で否定形とともに使われると「全否定」、「全く～ない、何一つ～ない」の意味を表す。

何も 知りません。 何も 知りたくないです。

また「疑問詞＋も」は不定名詞で聞かれた時の否定の答えにおいても使われる。

何か 食べませんか。・・・・・・すみません、今は 何も 食べたくないです。

3) 教え方のポイント：

- ・今まで動詞の「ます形」は必ず「ます」または「ます」の変化形がついていたがここでは「ます形」といっても「ます」がつかない。しかし活用語尾は変化している。(カリキュラム的には学生はまだ「ます形」しか知らないで活用語尾が「ます形」になっていることは知らない。)力のある学生には活用語尾が変化することを他の活用形を示しながら教えた方が今後の活用形に対する理解が早いかもしれない。
- ・動作・行為の願望を例にとり発話を進める。また類型文②のように「～だから・・・・・・たいです」のような因果関係の文を作らせるとかなり日本語らしい日本語を話せるようになる。

日本の中で どんな ところへ 行きたいですか。・・・・・・日本の 古い町へ 行きたいです。

きょうは 暑いですから ビールが 飲みたいです。

Ⅲ. わたしは フランスへ 料理を 習いに 行きます。

1) 基本文法事項：

- ・ここでは「ます形」のもう一つの用法の学習をする。基本文型は「動作を表す名詞または動詞のます形＋格助詞に＋移動を表す動詞」で「動作を表す名詞または動詞のます形」が後の移動動詞の移動の目的を表す、ということである。即ち「買い物に行きます」は「買い物のために出かけます」の意味になり、「映画を見にいきます」は「映画を見るためにでかけます」の意味となる。

おばあさんは川へ洗濯に、おじいさんは山へ芝刈りに行きました。

昼食に家へ帰りました。 事務所へ仕事に行きます。 日本へ勉強に来ました。

上記は格助詞「に」の前が動作を表す名詞であったが、「に」の前が動詞の「ます形」の時には動詞の機能をそのまま残してその動詞が他動詞であれば目的語を取ることもできるし、自動詞であれば種々の修

飾語をつけることもできる。文法的に言えば「動作を表すN、又は動詞のます形＋に」が文末の移動を表す動詞の副詞句となる。

2) 類型文：

- ① この 週末 何を しますか。・・・・・・(日曜日に) 子どもと 神戸へ 船を 見に 行きます。
- ② 冬休み どこか 行きましたか。・・・・ええ、行きました。(いいえ、どこも 行きませんでした。) どこへ 行きましたか。・・・・北海道へ スキーに 行きました。

- ・今までは動詞を修飾する句は多くて二つくらいであったが、類型文①の答えでは「行きます」を修飾する語ないし句は「日曜日に」を入れると4つにもなる。そしてそれぞれの語ないし句をつないでいるのが、助詞であって一つ一つその働きを異にする。学生の理解、実力を知る上にもそれらの助詞が正しく使われるかどうか伏字にして入れさせてみるのも面白い。
- ・類型文②においてようやく不定名詞の疑問文が提出された。例文では2回に分けて質問をしているが、初めの質問に対し2番目の答えをしても何ら差し支えない。ただしその場合不定名詞は疑問詞ではないので答えには「はい」「いいえ」が必要となる。また否定のこたえには「どこか」の質問に対しては「どこも・・・ません」となる。

3) 教え方のポイント：

- ・文型Ⅲ. は初級者の学習する文型としてはかなり複雑である。そこで文を意味の区分毎に区切り会話形式でその区分区分を理解させるとわかりやすい。

- ① あなたは どこへ 行きますか。
- ② わたしは フランスへ 行きます。
- ③ あなたは フランスで 何を しますか。
- ④ わたしは フランスで 料理を 習います。
- ⑤ わたしは フランスへ 料理を 習いに 行きます。

上記の順序に従って次の文を学生に作らせる。

山田さんは 日曜日 ビックカメラへ カメラを 買いに 行きます。

- ・構造の複雑な文に対しては修飾、被修飾の関係を矢印で示してやる方法も有効である。

わたしは フランスへ 料理を 習いに 行きます。

第 14 課

【この課の学習目標】

簡単な依頼、指示、申し出ができ、またそれに答えることできる。さらに今、何をしているのかが言える。文法的には動詞の活用形の一つである「て形」を学習する。

I. ちょっと 待って ください。

1) 基本文法事項：

- ・上記文例の中の「待って」は新しい言葉である。今までは動詞の活用形のなかで「ます形」だけを学習してきたが、ここで初めて活用形の次の学習項目である「て形」を学習する。「待って」は「待ちます」の「て形」である。前課でも書いたように「て形」といっても国語文法では同じ活用類型である「連用形」に入る。従って「ます形」と同じ活用語尾をとるが、I. グループの動詞のみ活用語尾が音便形をとるため「ます形」と同じにならないので「て形」として別の形として扱っている。
- ・「て形」の作り方：
 - ① II. グループの動詞及びⅢ. グループの動詞は「ます」に変えて「て」をつければそれだけで「て形」ができる。

起きます → 起きて 食べます → 食べて 来ます → 来て します → して

- ② 「い音便」を取る I. グループの動詞：「ます」の手前の活用語尾が「き、ぎ」であるもの。これらの動詞は「き、ぎ」を「い」に変えて「て」をつける。ただし活用語尾が「ぎ」の場合「て」は「で」になる。

書きます → 書いて 働きます → 働いて 急ぎます → 急いで 泳ぎます → 泳いで
その他 聞きます 炊きます

- ③ 「撥音便」を取る I. グループの動詞：「ます」の手前の活用語尾が「み、び、に」であるもの。これらの動詞は「み、び、に」を「ん」に変えて「で」をつける。撥音便を取る時は「て」は「で」になる。

読みます → 読んで 呼びます → 呼んで 遊びます → 遊んで 死にます → 死んで
その他 飲みます 休みます

- ④ 「促音便」を取る I. グループの動詞：「ます」の手前の活用語尾が「り、い、ち」であるもの。これらの動詞は「り、い、ち」を「っ」（促音）に変えて「て」をつける。

切ります → 切って 入ります → 入って 会います → 会って 待ちます → 待って
行きます → 行って （例外）

その他 取ります 曲がります わかります 送ります 終わります 帰ります 持ちます

- ⑤ 「ます」の手前が「し」のときにはI. グループであっても音便をとらずそのまま「して」となる。

貸します → 貸して 消します → 消して 出します → 出して 話します → 話して

- ・「て形」の動詞のあとにつく「て」（で）は接続助詞の「て」で、動詞のて形として種々の意味を表す。
ここではまず第一にI. の文例のように後ろに「ください」を従えて、次の意味を表す。

- ① 「て形」で示された動作を相手に依頼する

- ② 相手が目下の時には「て形」で示された動作を相手に対し軽く指示、命令する。

そのの セイコーの 腕時計を 見せて ください。

もう 少し 大きい 声で 話して ください。

2) 類型文：

- ① ここに 住所と 名前を 書いて ください。・・・・・・はい、わかりました。

- ② あの シャツを 見せて ください。・・・・・・はい、どうぞ。

もう 少し 大きいのは ありませんか。・・・・・・はい、この シャツは いかがですか。

- ③ すみませんが、この 漢字の 読み方を 教えて ください。・・・それは 「かきとめ」ですよ。

- ・「～してください」は相手に依頼する言い方ではあるが、敬語の度合いからみると「～してくれ」よりいくらかましの程度位である。相手が目下の場合は依頼よりむしろ指示の傾向が強くなりほとんど命令と同じになる。従ってこの言い方はそのままでは目上の人に対しては使えないことを教える。

- ・「～してください」を学習するにはまず上記のことを説明する。特に③のように丁寧語を付加しない言い方は①のような公的な手続きをする時、あるいは②のような客と店員の間の会話のなかで買い手が売り側に対してなにか依頼する時に限ることを言う。目上の人（先生、上司等）に何かを依頼しなければならない時は③のように「すみませんが」「申し訳ありませんが」を必ず文頭に付加して「～してください」を言わせる。

- ・類型文②の答えに「いかが」という新出語が出てくる。これは相手の気持ち、意向を尋ねる疑問詞で丁寧な語感をもつ。また相手の意向を尋ねることから転じて相手に物を勧める時にも使われる。

おひとつ いかがですか。・・・・・・ありがとうございます。いただきます。

- ・類型文③に「漢字の読み方」という言葉が出てくるが、新しい漢字が出てくるとに授業の中で使わせたい言葉である。わからない漢字が出てきたら学生に積極的に聞かせるよう指導したい。できれば漢字の意味も教えるようにすれば、さらに漢字に対する興味を持たせることもできる。

3) 教え方のポイント：

- ・「て形」の作り方を実際に学習させる前に活用形の法則で分けられる動詞のグループについてもう一度

復習させたい。即ち

Ⅲグループは「します」（勉強します、掃除します、買い物します、食事します・・・）及び「来ます」の2語だけであるので簡単である。

Ⅱグループは「ます」の一つ手前の音が「え段」か「い段」である。ただし「い段」の動詞はⅠグループの全ての動詞が同じく「い段」になるので区別がつかない。「ます」の手前が「い段」になるⅡグループの方が数が少ないので覚えるしかない。

「え段」の動詞 寝ます 始めます 教えます 開けます 閉めます 出ます 食べます

「い段」の動詞 居ます 起きます 借ります 見ます 降ります できます 着ます

Ⅰグループは上記以外の全ての動詞ということになるが前項にも書いたように「ます」の手前が全て「い段」になる。ただしⅡグループの動詞の「い段」は語幹が「い段」であるのに対しⅠグループの動詞の「い段」は活用語尾が「い段」であるという違いがある。

「い音便」の動詞 書きます 聞きます 働きます 急ぎます 泳ぎます

「撥音便」の動詞 飲みます 読みます 休みます 呼びます 遊びます 死にます

「促音便」の動詞 切ります 取ります 入ります 待ちます 持ちます 会います 買います

・上記のグループ分けが理解できたところで「て形」の作り方を学習する。即ちⅢ、Ⅱ、グループとも「ます」を「て」に変えれば「て形」ができることを教える。最後にⅠグループの動詞について説明する。即ちⅠグループの動詞は「ます」の手前が「し」の動詞以外は音便形を取ることを教え、1)の基本文法事項で記したように各音便形のグループにそって教えて行く。

・「て形」を使った用法はこれからいろいろ学習するがまずは「～して下さい」の用法である。これは教室の中で実際にしている行為であるからこの言い方を使って授業を進めていけばよい。

この文を 読んで ください。 この言葉を カタカナで 書いて ください。

この問題に 答えて ください。

Ⅱ. ミラーさんは いま 電話を かけています。

1) 基本文法項目：

・ここで学習する項目は、「て形」の二番目の用法である「て形＋います」の言い方である。

「て形＋います」の意味は「て形」をとる動詞の種類によって若干異なる。即ち動作、行為をあらわす言葉が動詞であるが、その動作、行為を時間的経過で見た場合、その動作を敢えてやめない限り継続した動作になるものと、ある限られた時間の中だけで動作が完了してしまうものとの二つに分かれる。前者の動作を表す動詞を継続動詞、後者の動作を表す動詞を瞬間動詞という。今、ここで継続動詞の一つである「読みます」の「て形」、「読んで」に「います」を付けて見ると「読んでいます」となり、今まさにその動作の最中であるという「進行形」の意味を表すことがわかる。次に瞬間動詞「立ちます」について考えて見る。「立ちます」は座っているところから立つとすると立った時点でその動作は完了するから瞬間動詞である。それに「います」とつけると「立っています」となりこれは「立つ」動作が進行中であるとは言えない。即ち「立っています」は「立つ」動作が行われてその結果の状態を表しているといえる。その意味から瞬間動詞を結果動詞とも呼んでいる。以上のことから次の事が言える。

① 継続動詞の「て形＋います」はその動作が現在進行していることを表す。

今 手紙を書いています 雨が 降っています 火が燃えています

主な継続動詞： 読みます 書きます 話します 聞きます 見ます 食べます 飲みます

働きます 遊びます 売ります 買います 歌います おどります 泣きます 笑います

② 結果動詞の「て形＋います」はその動作が行われた結果の状態を表す。

部屋の窓が 開いています 社長は ふとっています 子どもは なんでも 知っています

主な瞬間動詞： 開く 閉まる 付く 消える 折れる 壊れる 倒れる ふとる やせる

結婚します 行きます 来ます 乗ります 知ります 着ます 寝ます

・「て形＋います」には以上の意味を表す他に次のような用法もある。

- ③ あるものが永続的な状態であることを表す。

北に 富士山が そびえている 南には 駿河湾が 広がっている

- ④ 過去を表す単語とともに経験を表す

学生時代に ここに 遊びに 来ている その話は 既に 聞いている

- ⑤ ルーチン的な動作、繰り返される動作

毎日 日記を 書いている その場所で 何回も 交通事故が おきている

- ・「て形+います」はアスペクト表現の一種である。「アスペクト」は aspect であって直訳的には物、事の
外観、様子、状況、顔の表情などの事を言うが、文法的には動詞の表す動作、状態の多様な様態を表
す表現形式全般をいう。「食べます」を例に取ってみれば

食べている 食べてある 食べてしまう 食べ始める 食べ終わる 食べようとする

食べているところです 食べつつある

は全てアスペクト表現である。

- ・第10課で「います」「あります」をセットで学習したが、理屈っぽい学生は「て形+あります」もある
のではないかと、あるとすれば「て形+います」とどう違うかと質問するかもしれない。テキストでは
第30課で「て形+あります」を学習するが、第10課でセットで「います」「あります」を学習した
のであるから「て形+あります」もセットで学習した方がいいと思われるがどうであろうか。

黒板に 字が 書いてあります その事は もう 話して あります。

「て形+います」と「て形+あります」の違いをどう教えるか考えてみてください。

2) 類型文：

佐藤さんは どこですか。・・・今 会議室で 松本さんと 話して います。

- ・第3課で学習した「山田さんはどこですか。」「会議室です。」から比べたらはるかに実際に近い日本語
表現になってきたといえる。過去との日本語表現の違いを比べさせてその進み方を実感させるのも日本
語の学習意欲をあげる方法のひとつかもしれない。

3) 教え方のポイント：

- ・「て形+います」は文法事項のところでも用例をあげたように初級者にとっては若干複雑である。
また①～⑤の用法のうち②、⑤は第15課の学習事項であるのでここでは①に限って進行形の形になる
ことを教える。実際には絵カードなどを使いながら自動車が橋を渡っているところを示し
自動車が 橋を 渡ります。→ 自動車が 橋を 渡っています。→自動車が 橋を 渡りました。
と時間の経過をたどりながら教えるとわかりやすい。

III. 暑いですね、窓を開けましょうか。

1) 基本文法事項：

- ・第6課で「Vませんか」「Vましょう」の言い方を学習したが、ここでは「Vましょうか」と「まし
ょう」に疑問を表す終助詞「か」をつけている。「Vましょう」は第6課で話し手のやや強要的な提案と説
明したが「Vましょうか」では、この表現が話し手と共に「何かをしましょう」という提案の表現の時に
は相手の意向を確認する形となっているので「Vましょう」よりかは少しやわらかい表現となっている。
ここでの「Vましょうか」は相手と一緒に何かをしましょうという提案ではなく話し手が率先して「何か
をやりましょうか」という申し出の表現でこれに対しむしろ相手の許可を求めている言い方である。

2) 類型文：

駅まで 迎えに 行きましょうか。・・・いいえ、けっこうです。タクシーで行きますから。

- ・相手の好意的な申し出に対し受け入れる場合は「はい、お願いします。」「はい、迎えに 来てくださ
い」で比較的簡単であるが、断る場合の方が難しい。「いいえ、けっこうです。」だけではあまりにもビジネ
スライクで失礼な感じで、むしろ「ありがとうございます。～しますからけっこうです。」の方が自然
である。「けっこうです。」は相手の申し出を断るときに使う言葉として教えたい。

3) 教え方のポイント：

- ・学生になにかできることの申し出を言わせる。
「お手伝い しましょうか」「ご案内しましょうか」等。

第 15 課

【この課の学習目標】

許可を求めることができ、禁止されていることがわかる。また動作の状態の述べることができる。文法的には第 14 課に続いて「て形」の用法を学習する。

I. 写真を 撮っても いいですか。

1) 基本文法事項：

- ・文型は「て形＋も（副助詞）＋いいです」のかたちで、「て形」で表されている動作をすることが許されている、または許可しますの意味を表す。
- ・副助詞「も」は第 1 課で学習した「サントスさんも会社員です」と同じ並立を表す「も」でこの文形の場合許可されていることが一つに限られているわけではないということを表し許可の文意をやわらげる効果をしている。
- ・「いいです」は「よい」のくだけた言い方で言い切りの形か、名詞を修飾するときにだけ使われる。「よい」は「良い・善い・好い・佳い」などいろいろな意味があるが、この文では「適している」「好ましい」の意味から派生して「差し支えない」「構わない」という許可を表す意味を表している。
- ・「て形＋も＋いいですか」は相手に許可を確認する疑問文の形で実際は相手に許可を求めるときに使う。

2) 類型文：

① この カatalogを もらっても いいですか。・・・・ええ、いいですよ。 どうぞ。

② この 辞書を 借りても いいですか。・・・・すみません、ちょっと・・・・。今 使っています。

- ・類型文①は許可を求める相手に対し、許可を与える例で「はい、どうぞ」ぐらいいでも十分である。「どうぞ」は副詞で①相手にものを頼む時、自分の希望をかなえてほしい気持ちを表したり②相手にものを勧めたり、許しを与えたりするときに使うという二つの用法がある。
- ・類型文②は許可を求める相手に対してそれを拒否、断る例である。個人的な依頼に関してそれを断るときは相手の意に添えないのでその気持ちを表すために「すみません」を使い、それが一時的であるという意味から「ちょっと」をそえている。「今、使っています。」を「今 使っていますので」といった方がなお丁寧である。公共的ルールに関しての質問の場合は次項の文例を用いる。

3) 教え方のポイント：

- ・最初に学生がしてもいいことを例にとり、「～してもいいです」の言い方を学習する。
(会社で働いている例) 5時になりました。帰ってもいいです。
(試験の時の例) 試験を 全部 回答しました。 教室から 出ても いいです。
- ・次に許可を求める疑問形を練習する。
(外出先で) 雨が 降ってきました。この傘を 借りても いいですか。
(喫茶店で) たばこを 吸っても いいですか。

II. ここで 遊んでは いけません。

1) 基本文法事項：

- ・文型は「て形＋は（副助詞）＋いけません」のかたちで「て形」で表されている動作をしてはいけない、許されていない、禁止されている、の意味を表す。「～してもいいです」が許可を与える文に対して許可の反対の禁止を与える文ということができる。
- ・「～してもいいですか」の質問に対して否定の答えをする（禁止の答えをする）時、それが公共的ルールの質問であればこの文型を使って「いいえ、～してはいけません」と答える。
- ・「いけません」は可能動詞「行ける」の「ます形」「行けます」の否定形「行けません」である。文法的には「いけません」は「いけます」の一つの活用形であるからこの形で辞書に載ることはないが「いけません」（いけない）だけで元の「行ける」の意味を逸脱してしまっている。「いけない」を独立した一つの単語

として扱われている。このように構成上からは二単語以上で構成されているが、一つの単語として扱う単語を「連語」という。「なりません」(ならない) も連語である。

- ・「いけない」は性質・品質・状態がよくない事を表したり、望ましくない事を表したりする(「体の調子が悪くてね」「それはいけないね」)が、文例の用法は「て形+は+いけません」で禁止の動作を表す。
- ・副助詞「は」は取り立ての「は」で特にその動作をしてはいけないという強調を表す。

2) 教え方のポイント:

- ・公共の場所で禁止されている行為などを例にあげながら教える。これと同時に日本におけるルール、マナーと学生の本国におけるルール、マナーなどを比較しながら例にとるのも面白いと思われる。

(図書館で) 図書館のなかで 大きな 声で 話しては いけません。

(美術館で) ここで 写真を撮ってもいいですか。・・・いいえ、写真を撮ってはいけません。

(昔の日本の家庭) 食事中に 話を しては いけません。

III. サントスさんは パソコンを 持っています。

1) 基本文法事項:

- ・前課、第14課の「て形+います」の学習項目の中で結果動詞の「て形+います」はその動作が行われた結果の状態を表すと説明したが、文例がこの例である。即ち「持ちます」は一時的な動作で直ぐその動作が完了してしまう瞬間動詞である。その動作が終わったあとでは「持ちました」ではなく「持っています」という「持ちます」の動作が行われた後の結果の状態を表す表現となる。継続動詞の動作の表現が

読みます → 読んでいます → 読みました の動作の順序になるのに対して結果動詞では

持ちます → 持ちました → 持っています の順序になる。

2) 類型文:

- ① 市役所の 電話番号を 知って いますか。・・・いいえ、知りません。
- ② マリアさんは どこに 住んで いますか。・・・大阪に 住んで います。
- ③ ワンさんは 独身ですか。・・・いいえ、結婚して います。

- ・上記類型文を見てわかるとおり、我々の日常会話の中で結果動詞を使うときはほとんどの場合「て形+います」の形で使われる。結果動詞がそのままの形(結婚します、結婚しました)で使われるのはその動作が未来に関する時(私は今年10月に結婚します)か、その動作が過去の一時点を問題にしている時(私は去年10月に結婚しました)だけであって現在に関して、あるいは過去のある時期の状態を問題にするときは、全て「て形+います」か「て形+いました」の言い方にしなければならない。

○ わたしは 現在 結婚しています。 × わたしは 現在 結婚します。

○ わたしは その時には 結婚していました。 × わたしは その時には 結婚しました。

- ・上記の意味から学生はその動詞が継続動詞か結果動詞かを覚えていなければ正しい日本語が使えないということになる。従って使う動詞が継続動詞か結果動詞かを認識することは動詞の活用グループを知ることと同じくらい重要である。

- ・「～していますか」の質問に対して、否定の答えをするときは「～していません」になるが「知っていますか」の否定の答えだけは「知りません」となるので注意すること。

3) 教え方のポイント:

- ・結果動詞の概念は初級の学生にとってはかなり分かりづらいと思われる。これを教えるのに効果的な方法としては時間の流れを一本の線で表し線上の一点においてその動作が行われそれ以降はその動作の結果の状態「～しています」「～してました」の領域になると教えるとわかりやすい。

- ・日常よく使う結果動詞を使って発話を進め、「～しています」の言い方を慣れさせる。

今朝 北海道で 大きな 地震が ありました。ニュースで 知りました。あなたは 知っていますか。

きのう 11時から おもしろい テレビが ありました。あなたは 見ましたか。

・・・・・・ 11時には もう 寝ていました。

IV. お仕事は 何ですか。・・・・・・ 教師です。 富士大学で 教えています。

1) 基本文法事項：

- ・上の文例は第14課で説明した「て形＋います」の用法の⑤の例で、日常の定型的な動作、繰り返される動作を表現するものである。
- ・継続動詞、結果動詞両方にこの表現があるが、継続動詞の方にこの使われ方が多い。

朝 5時には 起きて 新聞を読んでいます。(起きての「て形」は未学習項目)

朝は いつも ごはんと 味噌汁 納豆を 食べています。

2) 教え方のポイント：

- ・学生のルーチン的な動作を話題に発話させる。

朝は いつも 何時に 起きていますか。 (「朝は 何時に 起きますか」と比較させる。)

日曜日は 何を していますか。

会社では どんな 仕事を していますか。

この工場では 毎日 自動車を 1000台 生産しています。

第 16 課

【この課の学習目標】

この課では日常生活の行動を順を追って話せる。文法的には「て形」の用法「～して、～する」を学習する。また「い形容詞」「な形容詞」の「て形」を使って、人、物の描写説明ができるようにする。

I. 朝 ジョギングを して、シャワーを 浴びて、会社へ 行きます。

1) 基本文法事項：

- ・本課より形容詞の「て形」が入ってくるので動詞の「て形」を「Vて形」とし、形容詞の「て形」を「A_iて形」または「A_{na}て形」とするが、上記文型は「Vて形」をいくつか並べて連続した動作を順を追ってすることを表す。
- ・て形の動詞は並べ過ぎると締りのない文となって小学生の作文のようになってしまうから多くて2つ以内にするのが、聞き苦しくない。
- ・第6課で二つの連続した動作を表現するのに二つの文を順を追って書き、それを接続詞「それから」でつないだ文型を学習したが、二つの「Vて形」の間に「それから」を入れると締まった文にすることができる。

朝 ジョギングを して、それから シャワーを 浴びて、会社へ 行きます。

- ・テキストにはないが、同じ「Vて形」の形を重複して並べることを嫌い、「ます形」＋「Vて形」またはその逆順序の「Vて形」＋「ます形」と並べる形もある。

朝 ジョギングを し、それから シャワーを 浴びて、会社へ 行きます。

朝 ジョギングを して、それから シャワーを浴び、会社へ 行きます。

- ・この文型の時制は最後の動詞の時制で文全体の時制を決定する。文末の動詞が過去であれば途中の「Vて形」の時制も過去である。

2) 類型文：

① きのう 何を しましたか。・・・・図書館へ 行って、本を 借りて、それから 友達に あいました。

② 大学まで どうやって 行きますか。・・・・京都駅から 16番の バスに 乗って、大学前で 降ります。

- ・類型文①は「Vて形」を二つ並べ、最後に「それから」を使って最後の動詞をつなげているが、ここで「それから」がないと冗漫なメリハリのない文になってしまう。いずれにしても連続した動作といっても3つぐらいを並べるのが限度と言える。

3) 教え方のポイント：

- ・連続した順序のある動作というのは一日のルーチン的な行動から、類型文②のようなある目的地まで行く行程、あるものを作る方法と順序とか思っている以上に私たちの行動は順序に従って動いている。そのような例を取りながら、初めは一つの文を作らせ、それを「Vて形」を使って一つにする練習をする。

朝 7時に 朝食を 食べます。 歯を 磨きます。 会社へ 行きます。

→ 朝 7時に 朝食を 食べて、歯を 磨いて 会社へ 行きます。

II. コンサートが 終わってから、レストランで 食事を しました。

1) 基本文法事項：

- ・ここでは「Nが＋Vて形＋格助詞から」の文型を学習する。文例Ⅰ. がいくつかの連続した動作を順序に従って並べて表現した文に対し、文例Ⅱ. はある一つの動作が終わった後、次に何をするか（または何をしたか）を表す文である。即ち最初の動作をV₁、次の動作をV₂とすると、「V₁て形＋格助詞から＋V₂ます」の形で、V₁の動作が終わってからV₂をしますという意味を表す。
- ・Nは最初の動作V₁の「動作の主体」で「Nが～してから」の部分が、全体の文の従属節となっている。従って従属節の中の動作の主体Nは格助詞「が」がつく。上の例文では主文の主語「わたし」は略されているが、あれば「わたしは」となる。(第9課「は」と「が」の使い方参照)
- ・ここで使われている格助詞「から」は第4課で学習した時間、場所の起点を表す「から」と若干ことなり「順序のから」というものである。今まで学習した「から」を整理すると
 - ① 時間・場所の起点を表す (第4課)
 - ② 理由を表す (第9課)
 - ③ 順序を表す (第16課) の 3つとなる。
- ・この文型の時制もⅠ. の文型と同じく文末の動詞の時制が全体の文の時制を決定する。
- ・この文型は二つの動作の前後関係を示すだけで3つ以上並べることはない。またその二つの動作の前後をあえて強調したい(V₂をするのはV₁が終わってからだ) 時にもこの文形が使われる。

夫が 帰ってから、 食事を 作ります。

2) 類型文：

国へ 帰ってから 何を しますか。・・・・父の 会社で 働きます。

3) 教え方のポイント：

- ・本文型を練習する前に今までの「から」の用法について復習させ、混同させないように注意する。
- ・日常の行動の中で前後関係が問題になるようなこと、あるいはある動作が終わった後次に何をするのか、また二つの動作のうち、どちらを先にするのかというようなことを話題にあげて発話を進める。

日本語は いつ(ごろ) から 勉強しましたか。・・・・日本に 来てから 勉強しました。

自動券売機は 最初に お金を 入れます。それから 行き先の ボタンを 押します。

自動券売機は 最初に お金を入れてから 行き先の ボタンを 押します。

お風呂に入ってから、食事にしますか。食事をしてから、お風呂にしますか。

III. 大阪は 食べ物が おいしいです。

1) 基本文法事項：

- ・第9課において「N₁はN₂がAです」という文型を学習し、そこでこの文型をとる表現について3種類の文例をあげて説明したが、これはその文例のうちの③にあたる用法である。即ち話の主題であるN₁を副助詞「は」を使って「N₁は」でとりあげ、その述部が形容詞の現象叙述文「N₂がAです」になっている構造である。

2) 教え方のポイント：

- ・第9課の上記文型の説明の中で、この文型の用法が3種類あると説明したが、テキストではこれを特に分けずに提出している。即ち「カリナさんは 背が 高いです」の文は、本説明の中ではN₁とN₂が全体と部分の関係にあるということで文例②として別に説明したがテキストでは特に分けていない。初級の学生に教える時はこれに従ってあえて分けて教えるなくてもいいと思われる。

- ・ なにか主題（物、事、人、動物）をあげてその特徴を学生に言わせる。

日本について 日本は 人口が 多いです。 日本は 面積が 小さいです。

中国について 中国は 国が 広いです。

IV. この パソコンは 軽くて 便利です。

1) 基本文法事項：

- ・ 文型Ⅰ. では連続した動作を順をおって表現する時、「Vて形」を使って、動詞を並べ一つの文としたが、文型Ⅳ. は形容詞文においても、動詞文と同じく形容詞の「て形」を使って、形容詞を並べて一つの文とする文型である。文型は「Nは A_iて形（～く＋接続助詞「て」）またはA_{na}て形（A_{na}語幹＋接続助詞「で」＋Aです」となる。

この すいかは 大きいです。 甘いです。 → この すいかは おおきくて 甘いです。

霧ヶ峰高原は 静かです。涼しいです。 → 霧ヶ峰高原は 静かで 涼しいです。

- ・ 名詞叙述文においても述語の名詞のあとの「です」を接続助詞「で」に変えてつなげることができる。

カリナさんは インドネシア人です。富士大学の学生です。

→ カリナさんは インドネシア人で 富士大学の 学生です。

- ・ ここでは述語の形容詞を同じ重さで並列的に並べる例を提出しているが、最初の形容詞が後ろの形容詞の原因、理由を表す時にもこの文型となる。Ⅳ. の文例は受け取り方によってはこの意味を表現しているともとれる。（このパソコンは軽いので便利だ。）

新幹線は早くて、安全で、便利な乗り物です。（新幹線は早くて、安全なので、便利な乗り物です。）

- ・ 第14課の動詞の「て形」のところで「て形」の動詞のあとに続く「て」は接続助詞であると言ったが、形容詞の「て形」についても同じである。ただし日本語教育のうえでは「A_i語幹＋くて」「A_{na}語幹＋で」をそれぞれ「い形容詞」「な形容詞」の「て形」または「ての形」と呼びそれ以上深く詮索しない。
- ・ 形容詞の活用については第8課で否定形「～くありません」「～じゃありません」を通して「ない形」を、また第12課で過去形「～かったです」「～じゃありませんでした」を通して「た形」を学習した。ここで今まで学習した活用形を表にすると

い 形 容 詞		丁 寧 形		普 通 形	
		肯 定	否 定	肯 定	否 定
叙述形	現在形	白いです	白くありません 白くありません	白 い	白くない
	過去形	白かったです	白くありませんでした 白くありませんでした	白かった	白くありませんでした
連体形 (未学習)	現在形	白 い	白くない	丁寧形に同じ	丁寧形に同じ
	過去形	白かった	白くありませんでした	〃	〃
て形、他 (連用形)		白くて 白く色づく	白くなくて 白くなくなる	丁寧形に同じ	丁寧形に同じ

な 形 容 詞		丁 寧 形		普 通 形	
		肯 定	否 定	肯 定	否 定
叙述形	現在形	静かです	静かじゃありません 静かじゃありません	静かだ	静かじゃない
	過去形	静かでした	静かじゃありませんでした 静かじゃありませんでした	静かだった	静かじゃありませんでした
連体形 (未学習)	現在形	静かな	静かじゃない	丁寧形に同じ	丁寧形に同じ
	過去形	静かだった	静かじゃありませんでした	〃	〃

て形、他 (連用形)		静かで 静かになる	静かじゃなくて	丁寧形に同じ	丁寧形に同じ
---------------	--	--------------	---------	--------	--------

- ・この文型の時制は動詞文の時と同じで文末の形容詞の時制が全体の時制を決める。

2) 類型文：

- ① サントスさんは どの 人ですか。・・・・・・あの 背が 高く、髪が 黒い 人です。
- ② 奈良は どんな 町ですか。・・・・・・静かで きれいな 町です。
- ③ あの 人は だれですか。・・・・・・カリナさんです。インドネシア人で 富士大学の 学生です。

- ・類型文①の答えは「N₁はN₂がAです」の文型の2つの文をAの「て形」を使って1つにした文である。
この文形により一つの主題について複数の特徴を表現することができる。

東京は 人が 多くて、車も 多い ところです。

- ・類型文②は「な形容詞」を、類型文③は述部の名詞を二つ並べた文である。
- ・類型文①で疑問詞「どの」が出てきている。第8課で疑問詞「どれ」を学習した。「どれ」は複数個ある同じ物のなかである特定のもの「N₁」を人に聞いて選び出したいとき、「N₁は どれですか」または「どれが N₁ですか」と聞きながら、「N₁」に相当するものを聞く疑問詞であった。ここで「N₁」が「N」という名前のグループに属しているとしたら「どれ」を「どのN」と言い換えてもいい。(ただし人を選び出す時は「どれ」は使わず「どなた」を使う。)

ミラーさんの 傘は どれですか。→ ミラーさんの 傘は どの傘ですか。

どれが ミラーさんの 傘ですか。→ どの傘が ミラーさんの (傘) ですか。

ミラーさんは どなたですか。→ ミラーさんは どの人 (どの方) ですか。

どなたが ミラーさんですか。→ どの人 (どの方) が ミラーさんですか。

- ・ここで今まで出てきた疑問詞をまとめて表にしてみると以下のようなになる。

		不定疑問詞	不定名詞	全否定 (全肯定)	不特定
「ど～」の 疑問詞	物	ど れ	ど れ か	ど れ も	どれでも
	名詞修飾	ど の (傘)		どの (傘) も	どの (傘) でも
	場 所	ど こ	ど こ か	ど こ も	どこでも
	方 向	ど ち ら	どちらか	どちらも	どちらでも
	方 法	ど う	ど う か	ど う も	どうでも
	状 態	ど ん な	どんなか		どんなでも
その他の 疑問詞	物	な に	な に か	な に も	なんでも
	人	だ れ	だ れ か	だ れ も	だれでも
	時	い つ	い つ か	い つ も	いつでも
	理由	な ぜ	な ぜ か		

3) 教え方のポイント：

- ・文型Ⅲ. の教え方のポイントで上げた例のように、ある事についての形容詞文をふたつあげてそれをひとつにまとめる練習をする。この時ふたつの文の内容が「プラス+プラス」になるか「マイナス+マイナス」でなければならないことを気をつける。

伊東は 海が きれいです。魚が おいしいです。→ 伊東は 海が きれいで、魚が おいしいです。

伊東は 坂が 多いです。散歩が 大変です。→ 伊東は 坂が 多くて、散歩が 大変です。

第 17 課

【この課の学習目標】

動詞の「ない形」を使って禁止の表現を理解できる。また「ない形」の他の用法である義務の表現「しなければなりません」その逆の表現「しなくてもいいです」などを学習する。

I. ここで 写真を 撮らないで ください。

1) 基本文法事項：

- ・第14課で「Vて形＋てください」の文型でVで表された行為、動作を相手にするように依頼する表現を学習したが、ここでは逆に「Vない形＋ないでください」でVで表された行為、動作を相手にしないように依頼するか、または「してはいけない」と禁止を与える表現を学習する。
- ・第15課で「Vて形＋てはいけません」で禁止を与える文型を学習したが、「Vない形＋ないでください」も禁止を与える文型でほとんど同じ表現である。ただし前者の場合は公共的、社会的規則の禁止を与える場合が多いのに対し後者の方は個人的理由の禁止を与える場合が多くその意味で依頼の形をとって、気持ち的に、やわらかい表現としている。
- ・「Vない形」は動詞の活用形の中の新しい活用形で「Vない形＋ない」でその動作の否定、打ち消しを表す。「Vます」の否定形「Vます形＋ません」は丁寧形の否定に対し、「Vない形＋ない」は普通形の否定で両者は相互に置き換えて使うことはできない。「普通形」は第20課で学習する項目で普段日本人が同輩、または話し手が自分より下の人と話すときはこの普通形を使う。
- ・国語文法で「Vない形」はVの未然形で「ない」は否定を表す形容詞型の助動詞であるが、日本語教育のうえでは「Vない形＋ない」を一まとめてにして動詞の普通形の否定形として教える。
- ・「Vない形＋ない」の作り方

Ⅲグループ：「来（き）ます」→「来（こ）ない」 「します」→「しない」

Ⅱグループ：「ます形」の「ます」の代わりに「ない」をつける。

寝ます→寝ない 始めます→始めない 教えます→教えない 開けます→開けない

起きます→起きない 借ります→借りない 見ます→見ない 着ます→着ない

Iグループ：「ます形＋ます」の「ます」の一つ手前の「い段」の活用語尾を「あ段」に変えて「ない」をつける。ただし活用語尾が「い」の時は「あ」ではなく「わ」に変える。逆に正しい「ない形」を知っていると「ない」の手前が「あ段」の時、その動詞はIグループに属する事がわかる。

書きます→書かない 聞きます→聞かない 働きます→働かない 飲みます→飲まない

切ります→切らない 取ります→取らない 待ちます→待たない 会います→会わない

また「あります」の否定形「ありません」は存在するが、「あらない」はなく、この時は単に形容詞「ない」をそのまま使う。

2) 類型文：

① そこに 車を 止めないで ください。・・・・・・すみません。

② 先生、お酒を 飲んでも いいですか。・・・・・・いいえ、2, 3日 飲まないで ください。
・・・・・・はい、わかりました。

- ・類型文①もどちらかというと個人的理由の禁止の依頼である。相手が「すみません」と答えたところを見ると相手がなにか違法をしたのかもしれないが、そうでなければ普通は「わかりました」で答える。
- ・類型文②は第15課で学習した許可を求める質問に対し、禁止を与える答えで「飲んではいけません」より柔らかい印象をあたえる。

3) 教え方のポイント：

- ・学生にとって動詞の否定形として「Vません」と「Vない形＋ない」の二つの形がでてきて混乱するかもし

れない。「Vません」は主に丁寧表現の文末の否定に使われるのみで他の場合は「Vない形+ない」の方が使われることを説明する。

- ・動詞の各グループについて「ない形」の作り方を説明したのち、各グループにわたりランダムに動詞を与え「ない形」を作らせる。
- ・公共の場所、施設（図書館、駅、美術館）などで働いている人になってもらい、そこで決められているルールなどを守らない人に注意する練習をする。（ロールプレイング）

図書館の中で 大きな声で 話さないで ください。

駅の構内で たばこを 吸わないで ください。

美術館の中で 写真を 撮らないで ください。

II. パスポートを 見せなければなりません。（パスポートを 見せないと いけません。）

1) 基本文法事項：

- ・文型としては「Vない形+なければなりません」または「Vない形+ないといけません」のかたちで、行為者の「したい」「したくない」という意志にかかわらず、Vをする義務、必要性があるという表現である。社会的規則によってしなければならない義務、個人的な理由、必要性による義務、道徳的な意味からの義務等すべてこの文型で表される。
- ・文法的には否定を表す助動詞「ない」の假定形「なけれ」に接続助詞「ば」がつき、それに「なります」の否定形の「なりません」が続いた形である。即ち二重否定の構造で「Vをしないということは許されていません」の意味を表す。ここで接続助詞「ば」は假定条件を示す助詞で「ば」の手前の事柄が成立すると「ば」の後で示されたことがおきるという意味を表す。「なりません」（ならない）は第15課「いけません」（いけない）のところで説明したように連語と言われるもので、否定の形容詞、助動詞に続いて、義務を表す。「～しなければなりません」「～なければいけません」「～しないといけません」「～しなくてはなりません」「～ねばならない」などいろいろな言い方がある。

2) 類型文：

① 今晚 飲みに 行きませんか。・・・すみません。きょうは 妻と 約束が あります。
ですから、早く 帰らなければ なりません。

② レポートは いつまでに 出さなければ なりませんか。
・・・金曜日までに 出して ください。

- ・類型文①は誘いの言葉に対し、個人的な理由による義務があつて、誘いを受けることができないと断る例である。「～ですから、・・・しなければなりません」と、原因、理由を表す従属節と義務を表す文がセットになった形と言える。
- ・類型文②はその義務をいつまでに果たさなければならないかという、義務を実行する期限を聞いている疑問文である。ここで「いつまで」ではなく「いつまでに」という表現が使われているが、「まで」は「～から～まで」というようにある時間の範囲の終わりの時間を示すだけなのに対し「までに」は行為をする時間がある長さで与えられているが、その与えられている時間の最終の期限を示している。即ち「までに」で表された時間を超えて、その行為がなされてもその行為は無効であるということである。

いつまで そちらに 滞在される 予定ですか。・・・5月末までには 帰る つもりです。

3) 教え方のポイント：

- ・「～しなければなりません」は初級の学生にとって、文法的にはかなりむずかしい説明になってしまう。少し長いが連語的用法でこの言い方が義務を表すと教えるほかない。
- ・第15課で「しては いけません」という文型で「してはいけない」と禁止を与える表現を学習したがここでは逆に「しなくては いけない」という義務を示す表現である。学生に義務を教える場合も「してはいけない」ことを先にあげ、その逆表現で義務を示すように教えると教えやすい。

信号が赤です。赤信号で 渡っては いけません。→ 青で 渡らなければ なりません。

ここは 制限速度が 50 kmの 道路です。50 kmを 超えて 走っては いけません。

→ 50 km以下で 走らなければなりません。

- ・テキストでは「なりません」と「いけません」を特に区別しない扱いをしているが、我々はこの二つの表現を区別して使っているようである。即ち「なりません」は人為的な事情から「そうせざるを得ない」という場合あるいは心情的にしたくないのだけれど（規則等により）しなければならない時に「なりません」を使い、法的な規制、道徳的なルールの遵守を相手に伝える時は「いけません」というのが自然のようである。

この先は バスが 走っていないので、歩かなければなりません。

税関では パスポートを 見せなければなりません。（めんどうなことで、したくないのだけれど法的規制により、しなくてはならない）

税関では パスポートを 見せなければいけません。（法的にそう決められている）

- ・ある時間のうちにあることをしなければならないことを例にあげて「～までにしなければならない」の練習をさせる。

先週の金曜日 図書館から 2週間の 間 本を 借りました。来週の 木曜日までに 本を 返さなければなりません。

このホテルの チェックアウトは 10時です。10時までに ホテルを 出なければなりません。

III. レポートは 出さなくても いいです。

1) 基本文法事項：

- ・II. の文例では、ある動作、行為をしなければならないという義務の表現を学習したが、ここではその義務の拘束がない、あえてその動作をする必要がないという表現である。この表現状況の中には「しなければならないのか」という義務に対する疑念が既に暗黙のうちに存在していて、それに対する答えとして「あえてする必要がない」と確認を与える文である。
- ・第15課で「してもいいです」とある動作、行為にに対し単に許可を与える表現を学習したが、その疑問文「～してもいいですか」では「許可」か「禁止」の選択が問題とされた。ここでは「しなければなりませんか」という疑問文に対し「しなければなりません」という「義務」か「しなくてもいい、する必要がない」という「否義務」の選択が問題とされる。従って「しなければなりませんか」の質問に対し肯定の場合は「はい、しなければなりません」であり、否定の場合は本文型の「いいえ、しなくてもいいです」の答えとなる。
- ・文型は「Vない形+なくてもいいです」で国語文法的に解釈すると『V未然形+助動詞「ない」の連用形「なく」+逆接の条件を示す接続助詞「ても」+いいです』となり、Vしなくても構わない、差し支えない、の意味となる。同意で「Vない形+ないでもいいです」の形もある。
- ・本文例の主題は「レポートは」で示されているが、これは本来は他動詞「出します」の目的語であった。（レポートを出さなくてもいいです。）これが文の主題として文頭に出された時は主題の文意を強める働きをし、また「を」は「は」に変わる。既出第9課「主題化変形」参照。

2) 類型文：

子どもも お金を 払わなければ なりませんか。

・・・・・・いいえ、払わなくても いいです。

- ・「～しなければなりませんか」と「義務」の存在を確認した疑問に対し、その必要がないと答える文である。この文意の裏には「大人はお金を払わなければなりません」という意味が含まれている。

3) 教え方のポイント：

- ・基本文法事項でも説明したように、この言い方は義務の逆の意味、しなければならないのでなく、する必要がないということで教えると教えやすく、また正確に教えられる。
- ・従って義務がある場合とない場合を対比させて例をあげる。

普通一般の日本の家庭では家の中に入る時、履物を脱いで家に上がる。しかし ホテルでは 靴を 脱ぎません。

日本では 靴を 脱いで、家に 上がります。→日本の 家では 靴を 脱がなければ なりません。

ホテルでは 靴を 脱がなくて いいです。

日本の道路は ふつう 60 km以下で 走らなければ なりません。
高速道路では 100 kmで 走っても いいです。

第 18 課

【この課の学習目標】

この課では動詞の新しい活用形である「辞書形」を使って、できること、できないこと、趣味などについて簡単にはなせるようにする。

I. ミラーさんは 漢字を 読む ことが できます。

1) 基本文法事項：

- ・第9課の文型Ⅱ. で「N₁は N₂が V_iます」の文型を学習した。即ち「V_i」が可能動詞のとき「N₁」は「N₂」で表された動作、あるいは物、事が「できる」または「わかる」ということであった。ここで上げられた文型Ⅰ. も基本的には第9課の文型と同じであるが、ここでは「N₂」が一つの単語ではなく、複数の単語からなる「句」となっているのが第9課の文型と違っている。
- ・即ち第9課の文型Ⅱ. の「N₂」に相当するものは文型Ⅰ. では「漢字を 読む こと」と複数の単語からできている。このように複数の単語から成り立って、一つの単語のような機能をもつものを「句」という。(この「句」がさらに発展し一つの文が一つの単語として機能するものを「節」という。) 前記Ⅰ. の「句」の中の「読む」は動詞の新しい活用形で「辞書形」というものである。
- ・「辞書形」はもっとも基本的な動詞の活用形で、この形が国語辞書に出ているので辞書形と言われている。「辞書形」は最後の「音」は全て「う段」で終わる。「みんなの日本語」のテキストでは最初に「ます形」が出てきて、「て形」「ない形」が続きここで本来の動詞の形である「辞書形」がその後に出てくるということで、なにか順序が逆のようである。やはり、まず「辞書形」を提出してからその活用形を発展させていくのが自然のようであるが、とにかくここでは「ます形」から「辞書形」の作り方を、活用グループに分けて説明する。

Ⅲグループ： 来ます → 来る（くる） します → する

Ⅱグループ：「ます形+ます」の「ます」の代わりに「る」をつける。(Ⅱ. グループの動詞はすべて「る」で終わる。)

寝ます → 寝る 始めます → 始める 教えます → 教える

見ます → 見る 起きます → 起きる 着ます → 着る

Ⅰグループ：「ます形+ます」の「ます」の一つ手前の活用語尾を「う段」に変えて「ます」を取る。

書きます → 書く 働きます → 働く 泳ぎます → 泳ぐ

飲みます → 飲む 読みます → 読む 休みます → 休む

切ります → 切る 買います → 買う 入ります → 入る

- ・辞書形にはいくつかの用法があるが、この文型の用法は名詞を修飾する用法で、国語文法における「連体形」の用法である。即ち「V辞書形+N」の形で名詞に動作的な説明を与える。この動詞にいろいろな修飾語(副詞句、目的語等)がついていれば、その動詞は、そのままの形で名詞に修飾することができる。「V辞書形+名詞」の形を名詞句と呼び、文の中で一つの名詞として働く。

「働く人」 「家へ 帰る 子ども」 「日本語を 勉強する 学生」

この名詞句に主語がつくと「名詞節」になる。

「母親が 働く家庭」 「観光と 漁業が 主な 産業である 伊東市」

- ・Ⅰ. の文型の中で「V辞書形」は「こと」という名詞を修飾している。「こと」は「事」で人がしたり、思ったり、考えたりすること全般を指す言葉で、はっきりと見える形の対象物があるわけではない。これ自体特に意味がなく常に実質的な内容を示す連体修飾語を必要とする。このような名詞を「形式名詞」と呼んでいるが、この「形式名詞」には「こと」の他「もの」「はず」「ため」「わけ」「とき」「ところ」「うち」「あいだ」などがある。

2) 類型文：

- ① スキーができますか。・・・・・・はい、できます。でも、あまり 上手じゃ ありません。
- ② マリアさんは パソコンを 使う ことが できますか。・・・・・・いいえ、できません。
- ③ カードで 払う ことが できますか。・・・・・・すみませんが、現金で お願いします。

・類型文①は「N₁は N₂が Vます」の可能文のN₂が 名詞になっている例であり、第9課で説明済みである。「でも」は逆接の「接続詞」で前文と反対の内容を述べようとするとき、その文の文頭において、後文を続ける。

自民党は 与党です。でも 今は 苦戦して います。

・類型文②は相手の持っている「何かができる能力」を聞く文である。「できない」時は「できません」と答える。

・類型文③は人の能力の「できる」ではなくて、いろいろの事情である事をする事が可能か不可能かを聞く文である。場合によっては許可されているか、いないかの時も「できる」「できない」で聞くことがある。この時は第15課で学習した「してもいいですか」と同じ意味になる。

ここで 写真を 撮ることは できますか。・・・・・・いいえ、できません。

ここで 写真を 撮っても いいですか。・・・・・・いいえ、よくないです。

3) 教え方のポイント：

・「～することができます」を教えるまえに「Nができます」を教えて「できます」の理解を促す。

英語が できます。 自動車の 運転が できます。 劉さんは 中華料理が できます。

・次に上記の例文のNの部分で動詞のます形を含む文に変える練習をする。

英語を 話します。 自動車を 運転します。 中華料理を 作ります。

・その次に上記の動詞文の動詞「ます形」を辞書形に直し「こと」をつけて、「名詞句」を作る練習をする。

英語を 話すこと。 自動車を 運転すること。 中華料理を 作ること。

・そこで初めて「V辞書形+ことができます」を作らせる。

英語を 話すことが できます。 自動車を 運転することが できます。

劉さんは 中華料理を 作ることが できます。

・上記類型文③で、許可を求める場合「しても いいですか」と「することが できますか」とふたつの言い方があることを説明した。このように同じことを表現するのに違う言い方があることをそれが提出された時点で系統つけて説明することは学生が混乱しないためにも、また表現力を豊かにするためにも大切である。

II. わたしの 趣味は 映画を 見る ことです。

1) 基本文型次項：

・上記II. の文型は基本的に第1課の文型「N₁はN₂です」と同じである。違うところは、N₁に「わたしの」という修飾語がついているのと、N₂が単なる名詞ではなくI. と同じく「ことの名詞句」になっているところである。即ちI. と同じように動詞を含む文を名詞に直すために、その動詞を辞書形に直し、後ろに「こと」をつけて、「ことの名詞句」を作っている。

・「趣味」は人が働く必要がないとき、自ら固執して、習慣化したあることを好んでするもの。

2) 類型文：

趣味は 何ですか。・・・・・・古い 時計を 集める ことです。

・「趣味」という言葉がはっきりまだわからない時は上記の文を下のように直すとわかりやすい。

あなたは 何を することが 好きですか。

あなたが 好きな ことは 何ですか。

3) 教え方のポイント：

・I. の時と同じく自分の趣味、好きなことを名詞で言わせ、それを名詞句に直させて上記文型を作らせる。

読書 → 本を読むこと → わたしの 趣味は 本を 読むことです。

音楽 → 音楽を聴くこと → わたしの 趣味は 音楽を 聴くことです。

絵画 → 絵を観ること、絵を描くこと → わたしの 趣味は 絵を 観ることです。

旅行 → 旅をすること 食事 → ごはんを たべる

- ・上記のように名詞を動詞を含む文に直すことも日本語のイメージを広げるのに有効である。

Ⅲ. 寝る まえに、日記を 書きます。

1) 基本文法事項：

- ・文型は「V辞書形、またはNの、または期間+まえに」で「まえに」の前の動作の前に何をするか、または何ををしたかが「まえに」の後の文で表される。時制は「まえに」の後の文の時制で決まる。「まえに」の前が期間を表す言葉の時は現在から期間で表された時間を遡った過去に後文で表されたことがあったことを言う。従ってこの場合、後文は過去形となる。将来おこると予想されるある時点を基準にそのある期間前にあることをするという未来表現もある。(東海地震がおこる一週間前に気象庁から地震直前予報が出される。)
- ・第16課で「～してから、～します」の文型で順序動作の表現を学習したが、ここのⅢ. の文型も順序動作の表現である。第16課の表現は後ろの動作は、前の動作が終わってからするということを強調する時使い、ここのⅢ. の表現は前文の動作をするまえに、後ろの動作をするということが強調される。「～してから、～します」では動作の順序は文の順序通りであるが、Ⅲ. の文は後の動作が前の動作より早く行われる。

2) 類型文：

① 日本の 子どもは 学校に 入る まえに、ひらがなを 覚えなければ なりませんか。

・・・・・・いいえ、覚えなくても いいです。

② 食事の まえに この 薬を 飲んで ください。・・・・・・はい、わかりました。

③ いつ 結婚しましたか。・・・・・・3年まえに 結婚しました。

- ・類型文①は文の主題 t o p i c が最初に提示された文で、その主題が辞書形の動詞の主語にもなっている文である。

欧米の 家庭は 食事をする 前に お祈りを します。

- ・類型文③は「まえに」が期間を表す語のあとについた例で特に断りがない時は基準となる時点は現在である。

3か月前に 自動車を 買いました。

わたしが 帰国する 1か月前に 父は 亡くなりました。

3) 教え方のポイント：

- ・第10課の「存在文」の学習のなかで「Nのまえに」と場所を表す「まえ」を学習したが、ここの「まえ」は時間の前後を表す「まえ」であることを学生に説明する。即ち基準となる時点の過去の方が「まえ」で未来の方が「あと」である。「あとで」は第14課で「あとで 来ます」と単に未来を表す副詞的用法として出てきている。
- ・同じ順序動作を表す文、「～してから、～します」の文と「～する前に、～します」の文を相互に作り替えさせる練習をしてふたつの文の違い、理解度を深める。ただし単純に相互作り替えができない場合もあるので注意のこと。(単なる順序動作の現象叙述文は「～する前に、～します」の文にはなりにくい。)

食事の まえに この薬を 飲んでください。 → この薬を 飲んでから 食事を して下さい。

最初に お金を 入してから 行き先の ボタンを 押します。

→ 行き先の ボタンを 押す前に お金を 入れます。

コンサートが 終わってから、レストランで 食事を しました。

→ × レストランで 食事をする 前に コンサートが 終わりました。

- ・「期間+まえに」を練習するのに実際あった出来事を話題にするとわかりやすい。

2008年に 北京オリンピックが ありました。 それから1年 経ちました。

→ 1年前に 北京オリンピックが ありました。

第 19 課

[この課の学習目標]

「Vた形」を使って、経験したことについて話すことができる。また「なります」の動詞を使って物事や状況の変化を言うことができる。

I. 相撲を 見た ことが あります。

1) 基本文法事項：

- ・第18課で「V辞書形+こと」を学習したが、ここでは「こと」が「Vた形」で修飾された形「Vた形+こと」を学習する。
- ・「Vた形」の基本的な用法はその動作・行為が過去に行われたことを表すいわゆる過去形表現である。「ない形」のところでも出たように「ます形」の過去形「ました」との比較が出てくるが、ここでも「ない形」の時と同様「ました」は丁寧の言い方で主に文末に使われるのに対し、「Vた形」は普通体の言い方で文末に使われる他に、ここでの学習事項である経験、複数動作の表現などに使われる。
- ・第10課で「N₁に N₂が あります」という物の存在表現について学習したが、文型I. も第10課の存在文と同じ形である。ただ、ここではN₂が単に物の名詞ではなくて第18課と同じく「こと」の名詞句になっている。即ちこの名詞句「Vた形+こと」で過去にした動作を名詞化している。それに「があります」と続くとその事をした経験があるという経験の表現になり「がありません」になるとその経験がないという表現になる。
- ・「Vた形」の活用形は「Vて形」の「て」又は「で」を単純に「た」又は「だ」に置き換えて作ることができる。I グループの動詞については「て形」において音便形が入ってきたが、この音便変化も「て形」と「た形」では全く同じである。

Ⅲグループ： 来て → 来た して → した

Ⅱグループ： 起きて → 起きた 食べて → 食べた 教えて → 教えた

Iグループ： い音便 書いて → 書いた 働いて → 働いた 急いで → 急いだ
撥音便 飲んで → 飲んだ 読んで → 読んだ 休んで → 休んだ
促音便 切って → 切った 取って → 取った 待って → 待った

2) 類型文：

① 北海道へ 行った ことが ありますか。

・・・・・・はい、一度 あります。2年前に 友達と 行きました。

② 馬に 乗った ことが ありますか。

・・・・・・いいえ、一度も ありません。ぜひ 乗りたいです。

- ・類型文①は相手にあることについての経験を聞いている文である。経験があれば「はい、あります。」になり経験の度数を表す助数詞「回」、「度」をつければなお良い答えとなる。
- ・類型文②は同じく相手に経験を聞く質問に対し、答えが否定の文である。この時の度数を表す言葉をつける時は全否定の助詞「も」がつくことに注意する。これは今までしばしば出てきた「何も」「どこも」「だれも」と同じ「も」である。
- ・類型文②の答えのなかの「ぜひ」は副詞で強い願望を表し、願望を表す形容詞と共に使われる。「ぜひ」にはこの他名詞の「是非」がある。(ことの是非を問う。)

3) 教え方のポイント：

- ・基本文法事項のところで第10課の存在文と対比させて説明したが、似たような文型は学生にも必ず対比させて学習させるようにしたい。対比させることによって同じ単語、文型でも違う用法があることを知り、また系統だてて教えることにより、学習したことを整理させ、混乱を防ぐ効果もある。

- ・度数を表す助数詞「回」「度」は今まで学習の中で実際例がなかったので、ここでその使い方を練習させたい。また否定形と共に使う言い方も一緒に練習させたい。

一度も 見たことが ありません。

真夜中の 通りには 人が 一人も いませんでした。(人っ子 一人 いませんでした。)

その日は 一匹も 釣れませんでした。

- ・経験をいう文を作らせるまえ、最初に日常的でない過去にした行為・動作を表した「ます形」の文から「Vた形+こと」の形を作らせる(名詞化の作業)。それから「～したことがあります」を作らせる。

富士山へ 登りました。→ 富士山へ 登ったこと。→ 富士山へ 登ったことが あります。

ディズニーランドへ 行きました。→ ディズニーランドへ 行ったこと。

→ ディズニーランドへ 行ったことが あります。

新幹線に 乗りました。→ 新幹線に 乗ったこと。→ 新幹線に 乗ったことが あります。

Ⅱ. 休みの日は テニスを したり、散歩に 行ったり します。

1) 基本文法事項：

- ・文型は「Vた形+り、Vた形+ります」で、ある時間の間にする複数の動作を2つぐらい代表にあげてそのようなことをするという表現である。
- ・国語文法的には「たり」を助詞として扱っている。(日本語教育では「～した」と「た」までを入れて「た形」とし、「て形」についても「～して」と「て」までをいれて「て形」としている。しかし「ます形」および「ない形」はそれぞれ「ます」「ない」を入れない形、「書く」を例にとれば「書き」がます形、「書か」までが「ない形」で、それぞれ「ます形」「ない形」としている。分類的に矛盾していないだろうか。)日本語教育における「Vた形+り」の考え方は「り」の扱いが不明確で、実際辞書を見ても「り」など単語として出ていない。日本語を専門に学習しようとする学生が辞書を見て「り」がないことを発見したら日本語教育の文法に疑問を抱くことはまちがいない。教師の方としても国語文法と日本語教育における文法が違っている事を学生に説明のしようがない。文法の統一化は日本語教育における緊急の課題と思われる。
- ・第10課で格助詞「や」(N₁やN₂があります)を使って名詞を二つぐらい代表にあげて併記する学習をしたが、「たり」はこの「や」と同じで動詞を代表の形で併記するときを使う。

2) 類型文：

① 冬休みは 何を しましたか。

・・・・・・京都の お寺や 神社を 見たり、友達と パーティーを したりしました。

② 日本で 何を したいですか。・・・・・・旅行を したり、お茶を ならったり したいです。

- ・類型文①の答えの文末は「する」の動詞が二つ並んで学生にとっては少しおかしい気がするのではないかとと思われる。(日本人にとっては全く気付かないと思われるが。)
「Vた形+りしました」がいろいろな事をしたという意味の連語的な感じを与えて特に違和感を感じさせないようである。
- ・類型文②は動詞文「します」の会話ではなく、形容詞文「したいですか」「したいです」の会話である。学生は第13課の学習項目「N₁が したいです」しか学習していないはずで、本来なら文型で学習する項目のように思える。それはとにかく複数のしたいことを列挙するとき「～したり、～したり したいです」の文型があることを学習させる。

3) 教え方のポイント：

- ・この文型における動詞はあくまで代表の動作であってその他に同じような動作がいくつかある事、それを全てあげることはあまり意味がないので、二つぐらいにとどめることを学生に教える。
- ・第16課で「～して、～して、それから～します。」の順序動作の言い方を学習したが、ここでは同じ動詞の併記であるが順序は問われていないことを学生に教える。
- ・学生のあるまとまった行動(一日の行動、どこかに行った時の行動など)を例に上げさせて複数の行動を取り上げ、この文型を言わせる。

昨日の 休みは 買い物に 行ったり、友達に 電話したり しました。

鈴木さんの 誕生会で ケーキを 食べたり 歌を 歌ったり しました。

- ・この文型を使って表現するのは特に取り上げて言いたい行為だけに限る事を学生に教えたい。

× 朝 起きたり ごはんを 食べたり しました。

○ 病院では 毎日 ごはんを 食べたり 本を 読んだり して、単調な 毎日でした。

III. これから だんだん 暑く なります。

1) 基本文法事項：

- ・学習する文型は「名詞＋に 又は い形容詞のく形 又は な形容詞のに形＋なります」である。形容詞は人、物の性質、状態を表す単語であるが、この文型ではその性質、状態がだんだん変化し、文型で表された形容詞の性質、状態に近づく、あるいはすでにその性質、状態になったことを表す言い方である。「なります」と時制が現在形の場合は近づいている状態で、「なりました」と時制が過去形の場合はすでにその状態になった事を表す。「名詞＋格助詞に＋なります」はその名詞そのものに変化することを表現する。

あの時の 学生さんは 今は 中国で 日本語の 先生に なりました。

- ・「い形容詞」の「く形」は「い形容詞」の活用語尾「い」を「く」に変えて作ることができる。

暑い → 暑く 寒い → 寒く うれしい → うれしく 面白い → 面白く

- ・「な形容詞」の「に形」は 語幹に 「に」をつけて作ることができる。

静か → 静かに 元気 → 元気に きれい → きれいに にぎやか → にぎやかに

- ・「なります」の辞書形「なる」は「成る」で「できあがる」（新装なったデパート）とか「組み立てられて」（3つの部品からなる）などの意味があるが、ここでは「ある状態に変わる」という意味である。
- ・「だんだん」は物事が少しずつ変化する様子を表す副詞である。変化する割合の大きいものからあげると「急に」「だんだん」「少しずつ」「わずかつつ」などがある。
- ・変わらない事を強調する時は「全然、なかなか＋く形またはに形＋なりません」と言う事を教える。

日本語が 全然 上手に なりません。

今年の 夏は なかなか 暑く ありませんでした。

2) 類型文：

① 体の 調子は どうですか。・・・・・・おかげさまで よく なりました。

② 日本語が 上手に なりましたね。・・・・・・ありがたう ございます。でも まだまだです。

③ テレサちゃんは 何に なりたいですか。・・・・・・医者に なりたいです。

- ・類型文①は話し手の方に前は体の調子が悪かったことがわかっていて、それで今の状態を相手に聞いている文である。それで聞き手がよくなったと答えている。そのような状況を説明しないと学生はなぜよくなったと答えたのかわからない。
- ・「おかげさまで」はそのまま受け取ると、相手に何かしてもらってそのおかげで良い結果が得られたという意味になるが、普通はそういう意味で使っていない。心配してくれる人全てに対してごく儀礼的に言っているに過ぎない。そのような意味を学生に説明し単に「心配してもらってありがたう」と言う時の決まり文句であることを教えたい。
- ・類型文②は「(あなたは) ～が上手になりました」と相手を褒める文である。聞き手は褒めてもらったので「ありがたう」と答えていることを説明する。
- ・第7課で「もうご飯を食べましたか」の質問に対し「まだです」という答えを学習したが、ある動作が終わっていない事をいうときは「まだ」がひとつである。この例のようにある事を終わらせるのに長い時間が掛かり、それがまだ終わらない時は「まだまだです」となる。学生には、「ありがたうございます。でもまだまだ上手になりません」と同意義であることを教え、「まだまだ」を理解させる。

まだ 東京に 着きませんか。・・・・・・ええ、ここは 熱海ですから、まだまだです。

- ・類型文③は、人などが将来ある職業人、地位、身分に到達する言い方「～になる」の動詞の「ます形」に「たい」をつけて、その職業人、地位、身分に到達したいという願望表現「～になりたい」を使った例文である。(第13課で既に学習済み)

3) 教え方のポイント：

- ・季節の変化、人の成長の変化などを話題に発話させる。

季節は すっかり 秋になって、朝晩も ずいぶん 涼しく くなりました。

テレサちゃんも 10歳に なって、背が ずいぶん 高く くなりました。

第 20 課

[この課の学習目標]

普通体を使って親しい友達と会話ができる。

I. サントスさんは パーティーに 来なかった。

1) 基本文法事項：

- ・第18課で「辞書形」、第19課で「た形」を使って、名詞句を作り可能文の表現、経験の有無を言い表す文型を学習したが、ここではその「辞書形」「た形」を文末の述語に使った文型を学習する。動詞の「辞書形」「た形」だけでなく形容詞の「終止形」を含めて、これらを「丁寧形」に対し「普通形」と言い、この「普通形」を文末の述語に使った文を「丁寧体」に対して「普通体」の文と言う。
- ・「丁寧体」の文は名詞文、形容詞文においては「です」あるいはその変化形で終わり、動詞文では「ます」あるいはその変化形で終わる。否定形においては混合する場合もある。(白くないです、白くありません、読みませんでした、×よみませんです)
- ・「普通体」の文は名詞文、「な」形容詞文では「だ」あるいはその変化形、「い」形容詞文、動詞文においては「辞書形」あるいはその変化形で終わる。「い形容詞」「な形容詞」の普通形については第8課の活用形一覧表を参照の事。
- ・日本語教育における動詞の活用形について表にまとめると以下のようである。

		普 通 形		丁 寧 形	
		肯 定 形	否 定 形	肯 定 形	否 定 形
叙述形	現在形	読 む	読まない	読みます	読みません
	過去形	読んだ	読まなかった	読みました	読みませんでした
連体形	現在形	読 む	読まない		
	過去形	読んだ	読まなかった		
意志形		読もう		読みましょう	
命令形		読 め	読むな		
て形		読んで	読まないで 読まなくて	読みまして	読みませんで
たらの形		読んだら	読まなかったら	読みましたら	読みませんでしたら
ばの形		読めば	読まなければ		
接続の形		読み			

- ・普通体はこの課で学習するように、同輩同志、家庭内というような親しい間の中の会話で使われる。この他前述の通り丁寧体の文の中でも「句」または「節」の中の動詞、形容詞は普通形の形になる。上記の表で連体形にあたる用法である。
- ・丁寧体は普通形の逆の場合で、家庭外の上下関係のある者同士あるいは話し相手が不特定多数の公式の場で話される。
- ・書き言葉においても丁寧体と普通体があるが、書き言葉の多くの場合は普通体が使われる。これは文章を簡略にし、作者の気持ちを率直に伝えるのに普通体の方が適しているためと思われる。書き言葉が丁寧体を使う場合は解り易く解説する必要がある“how to もの”とか女性向け、子ども向けの本に限られるようである。(新聞、小説はほとんどが普通体で、丁寧体で書かれている本は教養書、各種解説書、絵

本などである。)

- ・普通体の会話の特徴として、「を」「が」などの助詞を省略したり、逆に文末では「よ」「わ」などの終助詞を多くつかったり、縮約形を取ったりする。疑問文では時に、疑問の終助詞「か」が省略され、上昇のイントネーションのみが使われる。名詞文、「な形容詞文」の時の疑問文は「だ」？または「～だか」ではなく「N+か」「な形容詞の語幹+か」であって、この時の「か」が省略される。この場合書いた文では終助詞「か」の代わりに“？”が使われる。(類型文参照)
- ・普通体の疑問文で「か」が省略されるといっても現在の会話の中では、普通体の疑問文に「か」をつける場合は上の人が下の人に言う時くらいでほとんど使われないのであえて強く断る必要もないかもしれない。

2) 類型文：

- ① アイスcream [を] 食べる?・・・うん、食べる。
- ② そこに はさみ [が] ある?・・・ううん、ない。
- ③ きの中 木村さんに 会った?・・・ううん、会わなかった。
- ④ あした みんなで 京都 [へ] 行かない?・・・うん、いいね。
- ⑤ 辞書 [を] 持って [い] る?・・・ううん、持って [い] ない。

- ・類型文①②④では文中の格助詞が省略されている。
- ・普通体の疑問文の答えで、肯定の場合「うん」否定の場合「ううん」が例に上げられている。実際は話し手どうしのいろいろな関係、男女差によってこれだけに限らないし、省略される場合も多い。家族内においても「うん」「ううん」は行儀が悪いと言葉として避けられた傾向もあるから、例としてふさわしいかは疑問が残る。
- ・類型文⑤は縮約形の例で普通体では「～している」は「～してる」になることが多い。その他の縮約形としては「しなければ」が「しなくちゃ」、「～では」が「～じゃ」、「～けれど」が「～けど」などがある。

II. 日本は 物価が 高い。

- ① そのカレーライス [は] おいしい?・・・うん、辛いけど、おいしい。

III. 沖縄の 海は きれいだった。

- ① 今 暇?・・・うん、暇。 何?・・・ちょっと 手伝って [くれない?], [よ]。

IV. きょうは 僕の 誕生日だ。

- ① あの 英語の 先生は アメリカ人?・・・ううん、イギリス人。
- ② きの中は 休んだの?・・・うん、ちょっと 熱が あったものだから。

1) 基本文法事項：

- ・文型Ⅱ. は「い形容詞文」の普通体、文型Ⅲ. は「な形容詞文」の普通体、文型Ⅳ. は名詞文の普通体の例である。
- ・文型Ⅲ. の依頼文は丁寧形では「～してくれませんか」だが普通体では「くれないか」「くれない？」である。この辺も男女差でいろいろ言い方が違うところである。

2) 教え方のポイント：

- ・基本的に学生に対してはあえて普通体で話す事を教える必要はない。日本人の親しい者同士の中で話されている文体で、かつどういう文体であるかを理解できればよい。さしあたっては次の第21課で普通体を使う学習に入るので、それができる事を目指す。普通体を話す事については日本人と慣れ親しむうちに各人それぞれに自然と身につくものであることを教える。
- ・そのようなことで学習内容も最初は文法的理解を主に丁寧体を普通体に、普通体を丁寧体に変換することで、普通形、普通体と丁寧形、丁寧体の関係を理解させる。あるいは目上の人との会話と友達同士の会話を同じ内容で較べさせる。

名詞文の変換： ミラーさんは アメリカ人です。 → ミラーさんは アメリカ人だ。

形容詞文の変換： サントスさんは 歌が 上手です。 → サントスさんは 歌が 上手だ。

動詞文の変換： わたしは カリナさんから チョコレートを もらいました。

→ わたしは カリナさんから チョコレートを もらった。

サントスさんと山田さんの会話： サントスさん、もう 昼ご飯は 食べましたか。

山田さんと友達の中田さんの会話： 中田、もう 昼ごはん 食べた？

【練習問題】

I. 日本語の語彙に関する問題

- 次のうち「基本語」の説明として正しいのはどれですか。
 - 使用度数はあまり高くないが、使用範囲が極めて広い語
 - 使用度数は高いが、使用範囲は広くない語
 - 使用度数が高くて、使用範囲も広い語
 - 日本特有の事物を指す語を重点的に選んで作った語彙表
- 次の「漢語」についての説明のうち、適当でないものはどれですか。
 - 硬い感じを与えるものが少なくない。
 - 命名に際して事物を具体的に限定しやすいので、専門分野でよく用いられる。
 - 延べ語数では一番よく用いられている語種である。
 - 通常、漢字で書かれ、漢字の音で読まれる語である。
- 次の4語は A. 和語 B. 漢語 C. 外来語 D. 混種語 のうちのどれに属しますか。
 - 1) 国際連合教育科学文化機構
 - 2) 望遠付き全自動カメラ
 - 3) 空梅雨
 - 4) えび入りフワフワたまご

II. 日本人の言語行動に関する問題

- 外国人が日本人と日本語で話している時、ファーストネームで相手の名前を呼びました。この事についてはどう指導すべきですか。
 - その外国人の母語での習慣がそうならかまわないと指導する。
 - 相手に関係なくファーストネームで呼んでよいと指導する。
 - 日本語では自分の家族の者に対してだけファーストネームで呼んでよいと指導する。
 - 日本語では親族内で目下の者あるいはごく親しい関係にある者だけに対してファーストネームで呼んでよいと指導する。
- 日本人が「否定嫌い」である理由について述べた次の文章のうち、最もふさわしくないものを一つ選びなさい。
 - 相手の言う事をはっきり否定することは、良くない事だと思っているから。
 - 自分ではなく相手に否定させるようにすることが礼儀だと思っているから。
 - はっきり否定しなくとも相手がそれを察してくれることを期待しているから。
 - 相手にYesかNoかをはっきり言わせるのはよくないことだと思っているから。
- 次の文は日本語教育にあたってデス・マス体から入ることへの批判について述べたものです。正しくないものをひとつ選びなさい。
 - デス・マス体は日本人の普通の話し言葉では多数形ではないから。
 - デス・マス体から入るといつまでも規範的な言い方しかできないから。
 - デス・マス体が先に定着してしまうと、後で常体を教える時の妨げとなるから。
 - デス・マス体は日本人の実生活の場面ではあまり使われないものだから。
- 書きことば・話しことばの関係について述べた次の文章のうち、正しくないものを一つ選びなさい。
 - 書きことばの方が漢語が多く格調高いので話しことばより優れている。
 - 話しことばの方が書きことばより「場面依存度」が高い。
 - 話しことばは「意志の伝達性」という面で書きことばより優れている。
 - 書きことばは書くモノや書かれるモノにより付加価値が生まれる。

第 21 課

【この課の学習目標】

「思います」の動詞を使って自分の意見・感想・予想が言える。また「言います」の動詞を使って人の発言、意見を他の人に伝える事ができる。

I. あした 雨が 降ると 思います。

1) 基本文法事項：

- ・文型は「普通体の文＋と思います」で、普通体の文が話し手が思っている、あるいは考えている事でそれを「＋と思います」という形で受けて、話し手の意見、感想、予想を表現する文型である。
- ・初級では「～と思います」「～と思いました」は概ね話し手の考え、判断を言う時に限定しているが、第3者の考え、判断を言うときは「～は・・・思っています／思っていました」になる。
- ・「と」は格助詞で発話「言う、話す」あるいは認識「思う、考える」などの動詞を伴い、「と」の前の文の内容を引用して、その内容の事を「言ったり、思ったり」していると表現している。このためこの「と」を「引用のと」とも言い、この文体を引用文という。
- ・「思う」に準じる動詞で「考える」「感じる」などがあるが、初級では「考える」が25課で出てくる。(但し25課での「考える」は引用文の「～と考える」ではない。)
「思う」と「考える」は意味が同じ場合もある(将来先生になりたいと思っている／考えている)が、「常日頃思っている」「常日頃考えている」のように「考える」という方がより組織だった内容について言う事が多い。(英語では両方とも「t h i n k」を使い、日本語のように「思う」「考える」を厳密に区別していないようである。)

2) 類型文：

- ① 仕事と 家族と どちらが 大切ですか。・・・・・・どちらも 大切だと 思います。
 - ② 日本に ついて どう 思いますか。・・・・・・物価が 高いと 思います。
 - ③ ミラーさんは どこですか。・・・・・・会議室に いると 思います。
 - ④ ミラーさんは この ニュースを 知って いますか。
・・・・・・いいえ、たぶん 知らないと 思います。ミラーさんは 出張して いましたから。
 - ⑤ テレサちゃんは もう 寝ましたか。・・・・・・はい、もう 寝たと 思います。
- ・類型文①は第12課で学習した形容詞文の比較の疑問文である。(空港まで、バスと電車とどちらが早いですか。)ここで「大切だ」は人の思考・意見を表す「な形容詞」であるし、せっかく「と思う」という文型を学習したのであるから「どちらが大切だと思いますか。」と聞くのが、本来の正しい聞き方である。
 - ・類型文②は「Nに ついて どう 思いますか。」という文型でNに関しての相手の感想、意見を聞いている文である。ここでNは興味の対象となっている事物で具体的な物から抽象的なものまで入る。「ついて」は漢字で書くと「就いて」で「～に関して」の意味を表す。「どう」は第8課で方法、相手の意向を聞く疑問詞と説明したがここでは「どう 思いますか」で相手の意向・意見を聞く使われ方である。
 - ・類型文①②が、ある事に関しての個人の意見を聞くという若干硬い公式的な会話に比べて、③④⑤の文は日常会話に頻繁に出てくる自分の意見を推量を含めて軽く言う文である。
 - ・類型文④のように、自分の考えが不確かな時でも、「思います」と言えばあくまでも自分の意見として主張することができる。あまりはっきり言えない時は「たぶん」という推量の副詞を付け加えるようにすれば相手に対して親切である。
 - ・「と思います」が推量を含めて言える表現方法だということから「断定」の言い方を避ける日本人にとって、この言い方は便利な言い方である。しかし多用すると歯切れの悪い、態度がはっきりしない、にえきらない言い方になってしまう。「断定」できる場合には「と思います」の言い方は避けたい。

3) 教え方のポイント：

- ・上記に記したように「思う」は主に感情・感覚表現、主観的判断、想像について言うのに使われるのに対し、「考える」は知的な思考による主張表現に使われるという違いがある。初級の学生についてはまだ複雑な思考表現を言う段階ではないので単に自分の考えを主張する時は「思う」を使うと指導する。「思う」と「考える」との違いは第25課で「考える」が出てきた時点で簡単に教える程度とする。

将来 国に 帰って 日本語教師に なろうと 思っています。

c f. 将来 国に 帰って 日本語教師に なろうと 考えています。

- ・「思う」の第3者表現「～は・・・と思っている」については力のある学生には教えたい。「て形+いる」は第15課で既に学習済みであるし、次の文型Ⅱ. では第3者表現をしている。

将来 国に 帰って 日本語教師に なろうと 思います。／思っています。

×劉さんは 将来 国に 帰って 日本語教師に なろうと 思います。

○劉さんは 将来 国に 帰って 日本語教師に なろうと 思っています。

- ・相手の考え、意見を聞く場合はできるだけ「どう 思いますか。」「～と 思いますか」を使って聞くように指導したい。

△ 経済対策と 福祉と どちらが 重要ですか。

○ 経済対策と 福祉と どちらが 重要だと 思いますか。

- ・「どう 思いますか」を導入する時は、その前に2、3の「～と 思いますか」をならべて、それをまとめる意味で「どう 思いますか」を導入するとわかりやすい。

日本の鉄道はきれいだと思いますか。便利だと思いますか。安いと思いますか。

→ 日本の 鉄道について どう 思いますか。

- ・文例には出ていないが、「～と 思いますか」の質問に対して否定の答えをする時は「いいえ、～と 思いません」「いいえ、～ないと思います。」の二つがあることを教える。

ジャイアンツは優勝すると思いますか。・・・いいえ、優勝すると（は） 思いません。

いいえ、優勝しないと思います。

Ⅱ. 首相は 来月 アメリカへ 行くと 言いました。

1) 基本文法事項：

- ・文型は「N₁は “普通体の文” と 言います／言いました」または「(N₁は)『文』 と 言います／言いました」で、N₁は“普通体の文”または『文』で述べられている事を「言う」「言った」という意味を表す。N₁は「言う」「言った」の主語である。ここで“普通体の文”を引用する言い方は、N₁が言った内容を話し手が言い直して言っているので間接引用、『文』を引用する言い方はN₁が言った事をその通りに引用しているので直接引用という。文例は間接引用である。
- ・間接引用の時はその引用文は普通体にならなければいけないが、直接引用のときはその規則はない。
- ・この文型の「と」は文型Ⅰ. の「と」と全く同じである。
- ・Ⅱ. の文例は、「～と言いました」は過去の時制になっているのに対し、引用文の中の時制は現在形である。即ち引用文の中の時制は主文の時制に従わず、発言した時の時制をそのまま残す。

犯人は そこには 行かなかったと 言っている。

- ・「言う」は発音は「ゆう」であるが、標記上は「いう」と書く。「言います」の発音は「いいます」である。
- ・「言う」の類語に「話す」（第14課で学習済み。佐藤さんは松本さんと話しています。）があるが、「話す」は具体的にあるテーマについて述べたり、（～について話す）会話している状況（～と話す）の時「話す」を使うのに対し「言う」は「話す」を含めてもっと広範囲の発言、発話行為について言うときに使う。

もっとゆっくり言って下さい。 言ったからには、責任をとらなければなりません。

なんて言ったか覚えていません。 c f 何の事について 話したのか 覚えていません。

- ・この他「言う」の類語で「おしゃべりする」がある。「おしゃべり」は特に親しい友達の間で交わされる雑談的な会話のことである。日常頻繁に使われる語のわりには、初級のレベルでは出てこない。
- ・ここでは第三者の言った内容を他の人に伝える場合に「～は・・・と言います／言っています／言いました」

の文型を使っているが、この文型は他に違う意味で使われる場合がある。

夏目漱石は本名を金之助という。 エベレスト山は 中国では チョモランマと いう。(名前の紹介)
この不景気は まだ 2, 3年は 続くという。(伝聞)

2) 類型文：

① 日本では 食事の まえに、お祈りを しますか。

・・・・・・いいえ、しませんが、「いただきます」と 言います。

② 会議で 何か 意見を 言いましたか。・・・・・・はい、むだな コピーが 多いと 言いました。

- ・類型文①の答えは直接引用の引用文で、主語は特定の人ではなく、一般の人々が、礼儀、挨拶の形で習慣的に「言う」と言っている文である。直接引用の文は通常「 」の中に入れる。

午前10時ごろまでは「お早うございます」と言います。

日本に 来る前に 両親は 何と 言いましたか。・・・・・・「体に気をつけて」と言いました。

- ・「お祈り」は宗教的な習慣のない学生にはわかりにくい言葉であるので、神様に感謝を表すことだと教える。
- ・「いただきます」は「もらう」の謙譲語で食事を作ってくれた人、あるいは食事ができることにに対してなんとなく感謝する挨拶的な言葉である。
- ・類型文②は主文の時制と引用文の時制が違っている例である。引用する文はその時発言した時制がそのまま使われるという例である。

3) 教え方のポイント：

- ・先生が学生に対し日本語の学習についての心構え、方法をいくつか話し、そのあと学生に「先生は何と言いましたか。」と言って質問し、「先生は～と言いました。」を導く。

毎日 休まないで 少しずつ 勉強しましょう。

毎日 近くの 日本人と 話しましょう。

Ⅲ. 7月に 京都で お祭りが あるでしょう？・・・・・・ええ、あります。

1) 基本文法事項：

- ・学習事項は普通形の使い方の一つである、「普通形+でしょう？」の言い方である。この場合の「でしょう？」は相手に対する事実の確認、同意を求める時に使われる言い方である。この言い方に使われる普通形は動詞、い形容詞、な形容詞、名詞がある。

あした 歓迎会に 出る でしょう？ 富士山は 美しい でしょう？

パーティーは にぎやかだった でしょう？ あしたは 休み でしょう？

- ・「ある」は第10課の存在文の時学習したが、ここでは「行事」「催しもの」「出来事」などが行われることを意味する。(きのうの夜 八幡野で 火事が あった。)
- ・この時文末は上昇イントネーションとなる。「でしょう」はこの他に平滑イントネーションの時の推量を表す言い方がある。

明日は 雨が 降る でしょう。

2) 教え方のポイント：

- ・この言い方は、初級の外国人が日本人に対してまず発話しない文型だと思われる。同じ日本人同士でも、友達同士の間で使われても、目下の人から目上の人には決して使われない文型である。(敬語体で言う場合を除いてだが、初級の学生は敬語体は未学習である。)従ってこの文型は日本人が外国人に話したときに、外国人が理解できるというレベルでいいかと思われる。

ミラーさん、いい カメラを お持ちですね。 高かったです。

日本人でも 納豆を 食べない 人は たくさんいます。 納豆は お嫌いでしょう。

- ・外国人がそれほど親しくない日本人に話すとしたら敬語体で話す事が必須と思われる。

きのうは お疲れでしたでしょう。

これは 国で よく 食べる お菓子ですが、お口に 合わないでしょう。

第 22 課

【この課の学習目標】

連体修飾を使って、人や物のより詳しい描写、説明ができる。

I. これは ミラーさんが 作った ケーキです。

1) 基本文法事項：

- ・第18課、第19課でそれぞれ「辞書形＋こと」、「た形＋こと」の形で名詞句を作る学習をしたが、ここでは形式名詞である「こと」以外の名詞の前に、「文」又は「動詞の普通形」を置いてその名詞に説明を加える（修飾する）名詞句を含んだ文を学習する。修飾される名詞には人、物、場所などの名前がくる。
- ・ここで、名詞について今一度復習すると、名詞は人、事物の名称概念を表し、自立語（それ自体に言葉としての意味・概念を持ち、文の中で文節を作ることができる単語）で、活用がなく、助詞を伴って主語や目的語になる語である。普通名詞、固有名詞、実質名詞、形式名詞に分けられる。名詞は代名詞、数詞を含めて、用言に対して、体言と呼ぶ。
- ・名詞を修飾する事を、名詞が体言のひとつなので、連体修飾という。
- ・名詞句においても、文法上は名詞と全く同じ機能を持ち、助詞を伴って主語、目的語になったり、名詞文において述語になることができる。
- ・名詞句の中の時制は主文の時制に拘束されず、名詞句の中の時制をそのまま残す。
- ・文型 I. は名詞句が名詞文の述語として使われている例である。

2) 類型文：

これは 万里の 長城で 撮った 写真です。・・・・・・そうですか。すごいですね。

- ・この類型文も名詞句が名詞文の述語になっている例である。

3) 教え方のポイント：

- ・今まで学習した名詞を修飾する形は「N₁のN₂」「い形容詞の連体形＋N」「な形容詞の連体形＋N」「動詞の“辞書形”または“た形”＋こと」などがあったが、これらの形を通して修飾するという概念を習得させる。
- ・学生には、名詞句を含む文を最初から教えるのではなく、二つの文を一つにする形で練習する。文型 I. を例にあげるとすると、まず

これは ケーキです。 ミラーさんが この ケーキを 作りました。

と二つの文を提示し、第2の文を名詞句に直す練習をさせる。→「ミラーさんが作ったケーキ」

この名詞句をそのまま第一の文のケーキに置き換える。→「これは ミラーさんが作ったケーキ です。」

- ・この課での一番の学習目標は名詞句を作る事という事で、形容詞文、動詞文から主題となる名詞を取り上げ一つの名詞句を作る練習をさせる。

万里の 長城で 写真を 撮りました。(写真) → 万里の 長城で 撮った 写真。

あそこに 人が います。(人) → あそこに いる 人。

わたしは 家族と 日本へ 来ました。(家族) → わたしと 一緒に 日本へ 来た 家族

田中さんは クラスで 一番 背が 高いです。(田中) → クラスで 一番 背が 高い 田中さん。

II. あそこに いる 人は ミラーさんです。

1) 基本文法事項：

- ・名詞句が主文の主題になっている例である。

2) 類型文：

① カリナさんが 描いた 絵は どれですか。・・・・・・あれです。あの 海の 絵です。

② あの 着物を きている 人は だれですか。・・・・・・木村さんです。

3) 教え方のポイント：

- ・名詞句が主題になるような二つの文を提出し、学生に一つにさせる。

田中さんは どなたですか。 田中さんは 黒い セーターを 着ています。

→ 田中さんは どなたですか。・・・・・・あの 黒い セーターを 着ている 人が 田中さんです。

富士山は 静岡県と 山梨県の 境に あります。 富士山は 日本で 一番 高い 山です。

→ 日本で 一番 高い 富士山は 静岡県と 山梨県の さかいに あります。

Ⅲ. きのう 習った ことばを 忘れました。

- 1) 名詞句が主文の目的語となっているれいである。

- 2) 類型文：

どう しましたか。・・・・・・きのう 買った 傘を なくしました。

- 3) 練習文：

妹は チョコレートを 食べています。 妹は 誕生日に チョコレートを もらいました。

→ 妹は 誕生日に もらった チョコレートを 食べています。

カメラ店を 知っていますか。 そのカメラ店は 安い カメラを 売っています。

→ 安い カメラを 売っている カメラ店を 知っていますか。

Ⅳ. 買い物に 行く 時間が ありません。

- 1) ある事をする時間、何かをする約束、用事を言うときはその修飾語は動詞の辞書形を使うという例である。

- 2) 類型文：

今晚 飲みに 行きませんか。・・・・・・すみません。今晚は ちょっと 友達に 会う 約束が あります。

- 3) 練習文：

「～する時間がありません」「～する約束／用事があります」の文型を使って練習させる。

- ・わたしは 仕事が 忙しいです。毎晩 残業して、帰りは 遅いです。

→ わたしは こどもと 遊ぶ 時間が ありません。

- ・6時から 会議が あります。 五時半までに 伊東に 帰らなければ なりません。

→ お茶を 飲んでいる 時間が ありません。

- ・今日は 母の 誕生日です。ホテルの レストランで 家族と 一緒に 食事を します。

→ 今日は 母の 誕生日ですから、ホテルの レストランで 食事を する 約束が あります。

第 23 課

[この課の学習目標]

引き続いて普通形の学習で、「～とき、・・・・」という文型を使って、「～」で示された「時」に、それに伴っておこるいろいろな状況を表現する言い方ができる。また「～すると、・・・・」という文型で「～する」という条件のとき「・・・・」という結果になるという「因果関係」を表す言い方ができる。

I. 図書館で 本を 借りる とき、カードが 要ります。

- 1) 基本文法事項：

- ・文型は“動詞普通形”または“い形容詞の連体形”または“な形容詞の連体形”または“名詞＋の”＋とき、主文」で「とき」の前で示された「動作、行為」あるいは「状態」あるいは「時、頃、時代」に対して、主文で示されたことが、おこる、おこった、必要となる、あるいは主文の内容をするという表現である。
- ・ここの「とき」は形式名詞で常に連体修飾語を必要とし、意味は上記の通りである。文の構造的には「とき」の後ろの主文に対して、「とき」の前の文は従属節といい、主文が成立する前提条件を示す。

- 2) 類型文：

① よく テレビを 見ますか。・・・・・・そうですね。野球の 試合が ある とき、見ます。

② 冷蔵庫に 何も ないとき、どう しますか。・・・・・・近くの レストランへ 食べに 行きます。

③ 会議室を 出るとき、エアコンを 消しましたか。・・・・・・すみません。忘れました。

④ サントスさんは どこで 服や 靴を 買いますか。

・・・・・・夏休みや お正月に 国へ 帰った とき、買います。

- ⑥ それは 何ですか。・・・「元気茶」です。体の 調子が 悪い とき、飲みます。
- ⑦ ひまな とき、うちへ 遊びに 来ませんか。・・・ええ、ありがとう ございます。
- ⑧ 学生の とき、アルバイトを しましたか。・・・ええ、時々 しました。

・類型文①は質問の文が日常の習慣的動作について聞いている。従って時制も現在形で聞いている。それに対する答えも現在形で答えているが、この時の「とき」は「時間」の概念でなく「場合」の概念である。この例文のように日常動作のある例を取り上げて、それに対して主文を表現する分は、時制は現在形となり、例として取り上げた「とき」は「場合」に置き換えられる。類型文②④⑥⑦はこの例である。

わたしは いつも 新聞を 読むとき、めがねを かけます。

・これに対し類型文③は過去の一時点をとらえて、その時どうしたかを聞いている文である。過去の事について言及するときには主文は過去形になるが、「とき」に導かれる従属節の時制は現在形でも過去形でも良いようである。類型文③では「会議室を出たとき、エアコンを消しましたか。」になるが過去形の方が自然である。類型文⑧もこの例であるが、名詞の連体修飾形であるので時制は関係ない。ただ普通体の文にしたときは「学生だったとき、アルバイトをしましたか」となり過去形となる。

3) 教え方のポイント：

・過去のある時点を取りあげた「とき」と「場合」の概念とが、初級の学生には難しいかもしれない。それぞれ例をあげながら理解を促す。

食料品は いつも やおはんで 買います。→ 食料品を 買うとき、いつも やおはんで 買います。
 日本語教室へ いつも バスで 行きます。→ 日本語教室へ 行くとき、いつも バスで 行きます。
 きのう 市役所へ 行きました。途中で 田中さんに あいました。
 → きのう 市役所へ 行く／行った とき、田中さんに あいました。

II. この ボタンを 押すと、お釣りが できます。

1) 基本文法事項：

・文型は「V辞書形＋と、文」で、「と」の前に述べられた事が起こったり、動作が行われると、必然的に「と」の後ろに述べられた事が続いて起こる事を表現する文である。テキストでは主に前文と後文で因果関係のある場合のみ取り上げているが、単に時間的に前文の後、後文が起こった時にも使われる。

例文は因果関係を表す場合であるが、単純に時間的順序を表す文としては次のような例がある。

本を読んでいると、電話がかかってきた。 国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった。

・「と」は接続助詞で今まで学習した並列助詞(N₁とN₂)、格助詞(N₁と～する)と用法が異なる。またこの接続助詞の「と」には文例のように順節の仮定条件を表す場合(早く行かないと、遅れる。)の他、逆接の仮定条件(何と言われようと、信念を貫く。)などがあり、また前記例のように接続するのは「V辞書形」に限らないが、ここでは扱わない。(寒いと、なかなか起きられない。天気がいいと、気分が晴れ晴れする。)

2) 類型文：

- ① 音が小さいですね。・・・この つまみを 右へ 回すと、大きくなります。
- ② すみません。市役所は どこですか。・・・この 道を まっすぐ 行くと、左に あります。

・類型文①は機械操作の説明である。機械操作は必然的な順序動作であり、この言い方の練習には適している。

・類型文②は道案内で、やはり初級のこの文型の練習に必ず出てきて、練習にも実践にも好適な例である。

3) 教え方のポイント：

・条件を表す仕方として「と」の他に同じく接続助詞の「ば」、国語文法における助動詞「た」の仮定形「たら」助動詞「だ」の仮定形「なら」などがある。これらは後の学習で出てくるものであるが、使い方が異なるところもあり、日本語学習者として混乱するところである。この「と」に関しては上記文例のように、人の意志に無関係な必然的順序(機械操作順序、道案内等)を表すものに限って例を取り上げる。

・自動販売機、自動券売機、ATMなどを例にとりあげ、この文型を使って操作を説明する。

最初に 料金を 入れます。欲しい物の ボタンを 押します。それが 出てきます。
 → 最初に お金を 入れて、欲しい物の ボタンを 押すと、それが 出てきます。

- ・目標物がある簡単な市街地図を作って、そこに行く順序を言わせる。

この道をまっすぐ行きます。それから二つ目の角を右に曲がります。50 m先の右に銀行があります。

→この道をまっすぐ行って、それから二つ目の角を右に曲がると、50 m先の右に銀行があります。

第 24 課

[この課の学習目標]

「あげます、もらいます、くれます」の動詞を適切に使え、またこれらを補助動詞として使って利益の授受表現ができる。

I. 佐藤さんは わたしに クリスマスカードを くれました。

1) 基本文法事項：

- ・第7課で二重目的語をとる動詞の文型を学習したが、その動詞の例として「あげます、もらいます」のもののやり取りを表現する動詞（授受動詞）の学習をした。「みんなの日本語」のテキストでは「あげます」「もらいます」しか提出されていなかったが、本講習テキストではその他に「やります」「くれます」又、敬語表現の「差し上げます」「いただきます」「頂戴します」なども合わせて説明した。授受動詞についての文法事項を復習する意味で次の文のおかしい点、おかしい理由を学生に説明し、又正しい文に言い換えてください。

- ① カリナさんは わたしに チョコレートを あげました。
- ② 卒業式の日に わたしは 先生に 万年筆を あげました。
- ③ わたしは カリナさんに チョコレートを くれました。
- ④ カリナさんは わたしから チョコレートを もらいました。

下記の二つの文のうち、どちらが適切か。

- ⑤ わたしは カリナさんから チョコレートを もらいました。
カリナさんは わたしに チョコレートを くれました。

- ・①は「あげます」が物を人に与えるという動作の丁寧語であるが、「わたしにあげます」という言い方自体が自分に対する丁寧語になってしまうので、誤用となる。正しい文は「カリナさんはわたしにチョコレートをくれました」である。
- ・②は「あげます」が確かに丁寧語であるが、目上の人に対して物を上げるときには不適切である。（もともと日本人の習慣として自分の無償の行為をはっきり言わないのが、美德とされる。）ここでは単なる丁寧語ではなく敬語である「差し上げる」を使うのが正しい。正しい文は「卒業式の日に わたしは 先生に 万年筆を 差し上げました。」である。
- ・③の「くれます」の第1義的な意味は他人が話し手あるいは話し手側の人（親、兄弟姉妹、話し手の子ども）に物を与えるときに使う語で、その時は必ず「～は、わたしに（又はわたしの～に）・・・をくれます」になる。「くれます」の第2義的な意味で話し手が他人に恩を売るか、他人に暴力的な動作を与えるときに使う言い方もある。（弟に財産をくれる、平手打ちをくれる）③は「くれます」を「あげます」の意味で使ったと思われるが、話し手が「あげます」の意味で「くれます」を使うと第2の意味になってしまい誤用となる。正しくは「わたしは カリナさんに チョコレートを あげました」である。
- ・④の「もらいます」は話し手が他人から物を無償で与えられる、受け取る時に、使う語で若干謙譲的な意味がある。従って第3者を主語として「～は わたしから・・・をもらいました」は自分を上にして、相手を下げる言い方になってしまう。正しい言い方は「わたしはカリナさんにチョコレートをあげました。」である。
- ・⑤は上も下も同じ意味の文で、話し手がカリナさんからチョコレートをもらった、感謝を表す文である。同じ感謝を表す文であるとき、その行為をした人を主語にした方が感謝の意が強い。従って下の文の方が感謝の意が強い。

2) 類型文：

- ① 太郎君は おばあちゃんが 好きですか。
・・・・・・はい、好きです。おばあちゃんは いつも お菓子を くれます。
- ② おいしい ワインですね。・・・・・・ええ、佐藤さんが くれました。フランスの ワインです。

- ・類型文①②とも話者が誰かから「もらった」事実を「与えた人」を主語にして言う言い方である。その時は文型としては「～さんは わたしに・・・を くれます」の文型になる。

3) 教え方のポイント：

- ・授受動詞の学習は左図のような図と文型を合わせて丸暗記させる形で憶えさせたい。この時上記のように悪い文型を例示し何が悪いのか、理由を説明する事も重要である。文型としては

「あげます」

わたしは カリナさんに (チョコレート) を 上げます。(差し上げます。)

カリナさんは 佐藤さんに チョコレートを 上げます。

- ※ 「あげます」は「～は わたしに・・・を あげます」とは言わない。

「もらいます」

わたしは カリナさんに (チョコレート) を もらいます。

カリナさんは 佐藤さんに チョコレートを もらいます。

- ※ 「もらいます」は「～は わたしに・・・を もらいます」とは言わない。

「くれます」

カリナさんは わたしに チョコレートを くれます。

カリナさんは 妹に チョコレートを くれます。

- ※ 「くれます」は「わたしに」または「わたしのだれか」に「くれます」しか言わない。

- ・能力のある学生については敬語表現もあわせて教えるようにしたい。

「あげます」の尊敬語 「差し上げます」

「もらいます」の謙譲語 「いただきます」

Ⅱ. わたしは 木村さんに 本を 貸して あげました。

1) 基本文法事項：

- ・文型は「N₁はN₂にN₃をVて形+あげます」で「N₁」が「N₂」に「Vて形」で表された行為を「N₂」のために「してあげる」という事を表現する。これまでは「物品」の授受表現であったが、「Vて形+あげます／もらいます／くれます」はVで表された行為の授受表現で、その行為によって利益を受けるか与えるかになるので、これを利益の授受表現とも言う。
- ・この時の「あげます／もらいます／くれます」は行為の授受を表す動詞で補助動詞と言い、物品の授受の時の「やり、もらい」と意味は変わらない。従って文例Ⅱは話し手が木村さんに貸すという行為を通して利益を与えたという意味になる。
- ・文例Ⅱで木村さんが目上に当たる人であれば「差し上げました」と尊敬語を使えばより丁寧な文となる。

2) 類型文：

太郎君は 母の日に お母さんに 何を して あげますか。

・・・・・・ピアノを 弾いて あげます。

- ・話し相手にある人のためにどんな行為をしてあげるかを聞いている疑問文である。同じような意味で「どんな事をしてあげますか」などがある。
- ・ここで「弾きます」が出てきているが、第23課の練習のところで「引きます」が出てる。初級のうちででる同音異義語をいくつか例示し、漢字で区別していることを教えたい。

物を取ります、写真を撮ります。 起きます、置きます。 送ります、贈ります。 降ります、居ります。

電話をかけます、めがねをかけます。 先生に聞きます、音楽を聞きます。 着ます、来ます。

3) 教え方のポイント：

- ・学生が日常している行為で、今まで授受表現ができなかった、他人にしてあげた行為を例にあげ、授受表現

の練習する。

わたしは 給料前 王さんに お金を 貸しました。

→ わたしは 給料前 王さんに お金を 貸して あげました。

わたしは 王さんに 先生の 手紙を 中国語に 訳して 読みました。

→ わたしは 王さんに 先生の 手紙を 中国語に 訳して 読んで あげました。

Ⅲ. わたしは 山田さんに 病院の 電話番号を 教えて もらいました。

1) 基本文法事項：

- ・「N₁」が「N₂」に行為の利益を受けたという表現である。「N₁」が話し手で「N₂」が話し手より目上の人であれば「もらいます」より「いただきます」と言えばより丁寧な文になる。

2) 類型文：

ミラーさん、きのうの パーティーの 料理は 全部 自分で 作りましたか。

・・・・・・いいえ、ワンさんに 手伝って もらいました。

3) 教え方のポイント：

- ・学生が人から受けた親切なことを言わせる。

東京に 転勤に なり、きのう 引っ越しを しました。ワンさんが 一緒に 手伝いました。

→ きんのう ワンさんに 引っ越しの 手伝いを して もらいました。

市役所が よく わかりません。 劉さんは 市役所へ よく 行きます。

→ 劉さんに 市役所の 行き方を 教えて もらいました。

Ⅳ. 母は わたしに セーターを 送って くれました。

1) 基本文法事項：

- ・「～は、わたしに・・・をくれます」は「わたしは、～に・・・をもらいます」と全く同じ意になる。従って「もらいます」「くれます」は反意語の関係にあると言える。

2) 類型文：

電車で 行きましたか。・・・・・・いいえ、山田さんが 車で 送って くれました。

3) 教え方のポイント：

- ・「もらいます」「くれます」は両方とも話し手が利益を受ける場合に使われるが、主語が逆になる。即ち「もらいます」は話し手が主語になるのに対し「くれます」では利益を与えた方が主語になる。その関係を利用して、片方の文から片方の文に作り替える練習をするのも授受表現の習熟に役立つと思われる。

きのう ワンさんに 引っ越しの 手伝いを して もらいました。

→ きんのう ワンさんは 引っ越しの 手伝いを して くれました。

劉さんは 市役所の 行き方を 教えて くれました。

→ 劉さんに 市役所の 行き方を 教えて もらいました。

第 25 課

【この課の学習目標】

「たら」を使って、ある事柄を仮定し、その条件の下での判断、決定などが言える。

Ⅰ. 雨が 降ったら、出かけません。

1) 基本文法事項：

- ・第23課で「～すると、・・・」という「と」を使った条件文を学習したが、ここで提出されているのは「たら」を使った条件文である。条件文をつくるものとしてこの他に接続助詞の「ば」及び断定の助動詞「だ」の仮定形「なら」がある。「ば」及び「なら」については第35課での学習項目である。このように条件文を作るものとして「と」「ば」「たら」「なら」があるが、これらは同じ条件を表す語でありながら、それぞれに共用できる時があったり、意味の違い、用法の違いがある。それらを比較しながら概略説明したい。
- ・条件を表す表現として基本的に次の4つがある。

① 既定条件：ある行為を「する」「した」またはある状態に「ある」「あった」という条件の時に後文で表現された事が起こる、または成立するという条件文を言う。

② 発見：前文で表現した事によって、後文で表現された事がわかった、発見したという事をいう。

③ 過去の習慣：前文で示された過去のある行為、状態の時、いつも習慣的なことをしたと後文でいう表現。

④ 反実仮想：実際に起こってない事を起こったと仮定して、それに対してどうなるかを後文に示す事を言う。

以上4つの条件文にたいして「と」「たら」「ば」「なら」について考えて見る。

・「と」については第23課で説明したとおりで前文の後に後文が起こる、起こったという表現で、この時、前後の動作関係には単純な順序動作の場合もあるし、必然的な因果関係の場合もあり両方に使える。

・「と」は前文のあとに後文の事が無意志的（話し手の意志にかかわらず）に起こる場合のみに使われる。従って後文に意志的な意味が入る文には「と」は使えない。（「と」の文末制限の規則）

① × あした 晴れだと ドライブに 行きましょう。

○ あした 晴れたら（晴れば／晴れなら）ドライブに 行きましょう。

② × 雨が 降ると 出かけません。

○ 雨が 降ったら（降れば／降るなら）出かけません。

・「と」は4つの条件表現のうち原則として全てについて言えるが、反実仮想では「ば」の方が多い。

このボタンを 押すと お釣りが できます。

太郎が 故郷に 帰ると、知っている人は 誰も いませんでした。

夏休みに なると いつも 海に 泳ぎに 行きました。

△宝くじに 当たると 遊んで 暮らせます。 ○宝くじに 当たれば 遊んで 暮らせます。

・「たら」は国語文法的に言えば、過去、完了を表す助動詞「た」の假定形であるが、日本語教育のうえでは“Vた形”または“Aた形”または“です”の普通形過去“だった”＋ら」の形で假定条件を表す。即ち「たら」はほぼ達成されるだろう、起こるだろうことについて、そのの成就を条件（「た形」が使われていることは成就したことを表している。）に後文で示されたことが起こる事を表現する。従って後文は前文のあとの動作となる。“Aた形”＋「ら」または“N”＋「ら」の場合は、AまたはNの状態だったらという意味になる。

・「たら」は完了を表す「た形」と共に、「なら」は普通形現在と共に使われるが、この二つを時制の点で比べて見る。

① 伊東に 行ったら、干物を 買ってきて ください。

② 伊東に 行くなら、干物を 買ってきて ください。

③ 伊東に行くなら、「踊り子号」が 便利で 安いですよ。

④ ×伊東に行ったら、「踊り子号」が 便利で 安いですよ。

例文①では前文が既に起こったとして、②では前文でその行為を実施すると仮定して言っているが、後文はそのどちらの時でも論理的に意味が成り立つので「たら」「なら」が共用で使えるということになる。しかし③では「たら」を使うと既に「行った」という過去の事を仮定しているから、その前の事を問題にしている後文の文は意味がなくなってしまう。即ち後文が起こる前の事を前文で仮定するときは「なら」しか使えないという事が言える。また前文のことが起こった事を仮定して、そのあとのことを後文にする場合は「たら」しか使えない。まとめて言えば、「たら」は前文が既に成就したと仮定して、後文が続くが、「なら」は前文が成就するとしたらという意味で仮定する時間が若干違うという事が言える。

① 車を 買ったら 家族で 旅行が したい。

② ×車を 買うなら 家族で 旅行が したい。

・「たら」も原則的に4つの条件表現全てに使える。

このボタンを 押したら お釣りが できます。

太郎が 故郷に 帰ったら 知っている 人は 誰も いませんでした。

夏休みに なったら いつも 海に 泳ぎに 行きました。

宝くじに 当たったら 遊んで 暮らせます。

- ・「ば」は国語文法的には接続助詞で「V、またはA_i 假定形+ば」の形で条件を表すとするが、日本語教育では「V条件形+ば」「V“ない形”+なければ」または「A_i語幹+ければ」「A_i語幹+くなければ」を条件形といい、条件を表すとする。この時の「V条件形」は「条件形」として新しく覚えなければならない。
- ・「ば」は「たら」と同じく達成されるだろう、起こるだろうことを想定し、それが成立した事を条件に後文の事が起こる事を表現するが、「たら」よりその因果関係が強いときに使われる。

このボタンを 押せば お釣りが できます。

春に なれば 桜が 咲きます。

- ・「ば」は假定形と共に使われるが假定形の時制を考えると現在形（未来形）と考えられる。即ちこれから起こる事を假定にしているので、後文が過去時制になる文では使えない場合もある

× ボタンを 押せば 切符が 出てきた。

△ 太郎が 故郷に 帰れば 知っている 人は 誰も いませんでした。

○ よくよく 見れば 田中さんでした。（前文がきっかけ、理由、根拠として後文が成立する場合）

○ 振り返れば 苦労が 多い 人生だった。（ 〃 ）

- ・「ば」は4つの条件表現のうち既定条件及び発見条件の過去叙述文には使えない。（上記×、△の文）過去の習慣表現、反実仮想には使える。

夏休みに なれば いつも 海に 泳ぎに 行きました。（行ったものです。）

もし 宝くじに あたれば 遊んで 暮らせます。

- ・「なら」は国語文法では断定の助動詞「だ」の假定形か、形容動詞の假定形で「ば」が落ちたものとして扱うが日本語教育では「V、A_i 普通形又は“A_{na}」の語幹又は“N”+なら」で後文の成立条件を表すとする。
- ・「なら」は「たら」とよく対比されるが、「たら」がある事が実際に起こった事として、仮定しそれを条件に後文を述べるので、前文と後文の間には前文の後に後文が起こるという時間的制約がある。即ち前文と後文で前文の完了を条件に後文を言うときは「たら」しか使えない。これに対し「なら」は前文の動作はまだ終わっていないので、後文は前文の動作が未完であるときに対して言及する文となる。従って「なら」の条件文には後文が過去の時制はありえない。

目的地に 着いたら 直ぐ 連絡してください。 × 目的地に 着くなら 直ぐ 連絡してください。

読んだら 次に わたしに 貸して下さい。 × 読むなら 次に わたしに 貸して下さい。

パソコンを 買うなら いい店を 教えてあげますよ。

伊東に 行くなら ハトヤが いいですよ。

わたしが もう 少し 若いなら できたでしょう。（反実仮想）

2) 類型文：

- ① もし 1億円 あったら、何を したいですか。・・・コンピューターソフトの 会社を 作りたいです。
 - ② 約束の 時間に 友達が 来なかったら、どう しますか。・・・すぐ 帰ります。
 - ③ あの 新しい 靴屋は、いい 靴が たくさん ありますよ。
.....そうですか。安かったら、買いたいです。
 - ④ あしたまでに レポートを 出さなければ なりませんか。
.....いいえ、無理だったら、金曜日に 出して ください。
 - ⑤ もう 子どもの 名前を 考えましたか。
.....ええ、男の 子だったら、「ひかる」です。女の 子だったら、「あや」です。
 - ⑥ 大学を 出たら、すぐ 働きますか。・・・いいえ、1年ぐらい いろいろな 国を 旅行したいです。
- ・類型文①⑥は「Vた形+ら」の形でありそうなことを仮想してその条件の時どうするかを聞いてる文である。
 - ・類型文①の条件文で「もし」が使われている。「もし」は副詞で仮定の条件文の前文の文頭に使われるが、仮定する内容が、達成されない場合を予想する時に使われる。類型文①もその例である。類型文⑥で使うと聞かれた人に少なからぬ抵抗を感じさせるかもしれない。（大学を卒業できないことを予想する言い方になる。）
 - ・類型文②は動詞普通形の否定過去を表す「Vなかった」に「ら」がついた形である。「たら」は「Vた形+ら」

という事で教えているのでこの場合も「来た」の否定過去「来なかった」を導き出して「ら」を着けるといように指導する。

- ・類型文③は「い形容詞」の「た形」に「ら」がついた形であり、類型文④は「な形容詞」の「た形」に「ら」がついた形である。この場合の「た形」の形容詞はその状態であったらという意味である。

部屋が 寒かったら 暖房を 入れて 下さい。

- ・類型文⑤は名詞叙述普通体の過去形に「ら」がついた形で、形容詞の場合と同じくその名詞の状態であったらということを表す。

高校生だったら おとなの ふるまいを しなければなりません。

- ・類型文⑥は「Vだったら」を使った予定表現である。詳しくは教え方のポイントを参照の事。
- ・以上「と」「たら」「ば」「なら」についてその使い分けを概略説明したが、その形を下記の表にまとめる。

	例	「ば」の形	「たら」の形	「と」の形	「なら」の形
動詞Ⅰグループ	行 く	行けば	行ったら	行くと	行くなら
動詞Ⅱグループ	見 る	見れば	見たら	見ると	見るなら
動詞Ⅲグループ	来 る	来れば	来たら	来ると	来るなら
動詞否定形	行かない	行かなければ	行かなかったら	行かないと	行かないなら
い形容詞	寒 い	寒ければ	寒かったら	寒いと	寒いなら
い形容詞否定形	寒くない	寒くなければ	寒くなかったら	寒くないと	寒くないなら
な形容詞	静かだ	—	静かだったら	静かだと	静かなら
な形容詞否定形	静かでない	—	静かでなかったら	静かでないと	静かでないなら
名 詞	学生だ	—	学生だったら	学生だと	学生なら
名詞否定形	学生でない	—	学生でなかったら	学生でないと	学生でないなら

3) 教え方のポイント：

- ・上記までは日本語の指導者として知っておきたいという意味で「と」「たら」「ば」「なら」の使い分けなどを説明したが、学生には第23課における「と」に続いて、ここでは「たら」のみに限定して指導する。
- ・条件文は、初級学習者には難しい学習項目であり、まして「と」「たら」「ば」「なら」使い分けは中級クラスの課題となる。まず初めに条件文の導入をしてから、実際の応用に進むようにしたい。

あした 遠足に 行きます。→あした 天気予報は 雨です。→あした 雨が 降ると 行きません。

→ あした 雨が 降ったら 遠足に 行きません。

運転免許証を 取りたいです。筆記試験と 実地試験に 合格しなければなりません。

→ 筆記試験と 実地試験に 合格したら 運転免許証を 取ることが できます。

c f 筆記試験と 実地試験に 合格すると 運転免許証を 取ることが できます。

- ・類型文②の「Vなかったら」は「Vなかった」が第20課で文型Ⅰとして学習したが、まだ習熟度がわずかと思われるから他の動詞を提出してこの形を憶えさせたい。

努力しなかったら 成功は 難しい。

一日も 休まなかったら 皆勤手当を 支給します。

- ・「たら」が前文の「こと」が成就したという条件でその後に後文が続くという表現になるので、前の「こと」が完了したら、そのあと、後の「こと」をするという、予定を言う場合にも使われる。このとき後文は予定を言っているから時制は現在形になる。類型文⑥がこの表現例である。

ごはんを 食べたら お風呂に 入ってください。

12時に なったら 休憩に しましょう。

Ⅱ. 雨が 降っても、出かけます。

1) 基本文法事項：

- ・文型Ⅰ. で「たら」を使った条件文を学習したが、この場合後文が表現する「こと」の内容は、前文の仮定条件に対して当然に（自然に、順当に）続いて起こるであろうと予想されるものである。たとえば「雨が降ったら 行きません。」といえ、99%の人が普通に決定する判断を言っている。このように前件の条件に対し順当に起こるであろうと考えられる「こと」を言うとき、これを順接条件文という。これとは逆に先の例で、雨が降った時にも「行く」という人が1%でもいるかもしれない。順当に考えれば起こるであろう反対の「こと」を敢えていうとき、この条件文を逆接条件文という。順接条件を導く時は「たら」を使い、逆接条件を導く時には文型Ⅰ. のように「VまたはA_iまたはA_n。て形+も」の形にする。
- ・日本語文法では上記の形で説明するが、国語文法では「VまたはAの連用形またはN+ても（でも）」と考える。この時「ても」は接続助詞で仮定の逆接を取る時と、確定の逆接を取る時の二つの意味がある。

雨が 降っても 出かけます。(仮定の逆接)

いくら 呼んでも 返事が なかった。(確定の逆接)

仮定の逆接は前文が実際発生してない時、確定の逆接は前文が実際起こったことの違いである。従って仮定の場合は、「もし」、「万一」、「たとえ」というような仮定の副詞を伴うのに対し、確定の場合は上記のように実際の動作を説明する副詞が使われる。

- ・第15課で「写真を撮ってもいいです。」の文型を学習したが、この時の文型は「Vて形+副助詞も」で条件文ではない。この時は「も」を取っても意味が通じる事は通じるが、条件文の場合「も」をとると全く通じなくなる。(下記の類型文①で、ええ、見て わかりません。見ても わかりませんとは意味が異なる。)

2) 類型文：

- ① 先生、この ことばの 意味が わかりません。

.....辞書を 見ましたか。

.....△ ええ、見ても、わかりません。(○ ええ、見ても わかりませんでした。テキストでは△の答えとなっているが、過去形で聞かれたのだから、過去形で答えないとおかしい。)

- ② 日本人は グループ旅行が 好きですね。

.....ええ、安いですから。いくら 安くても、わたしは グループ旅行が 嫌いです。

- ・類型文②は「い形容詞」の逆接条件文である。「い形容詞」および「な形容詞」の「ての形」は第16課で形容詞の並列の述語表現として学習した。(このパソコンは軽くて便利です。) 学生には形容詞の「ての形」を使う機会が少ないと思われるので、ここでまず形容詞の「ての形」を作る復習をさせたい。

3) 教え方のポイント：

- ・逆接条件も実際の場合を想定して順序に従って理解させるようにしたい。

田中さんと 佐藤さんは あした お花見に 行く 予定です。

天気予報は あした 雨が 降るでしょうと 言っています。

田中さんは 天気予報を 聞きました。それから 田中さんは あした お花見に 行かないと言いました。

佐藤さんも 天気予報を 聞きました。それから 佐藤さんは あした お花見に 行くと言いました。

→ 田中さんは あした 雨だったら お花見に 行きません。(仮定の順接)

→ 佐藤さんは あした 雨でも お花見に 行きます。(仮定の逆接)

- ・仮定の順接と仮定の逆接を対比させながら、相互に変換する練習をする。

田中さんは 大学を 卒業したら すぐ 就職する 予定です。

佐藤さんは 大学を 卒業しても すぐ 就職する 予定は ありません。

政権が 変わったら 世の中が いくらか 明るく なった。

政権が 変わっても すぐ 暮らしが よく なりません。

暑かったら エアコンを つけてください。

暑くても エアコンは つけません。 エアコンは 好きじゃ ありません。